

木村長門守



告

096775-000-1

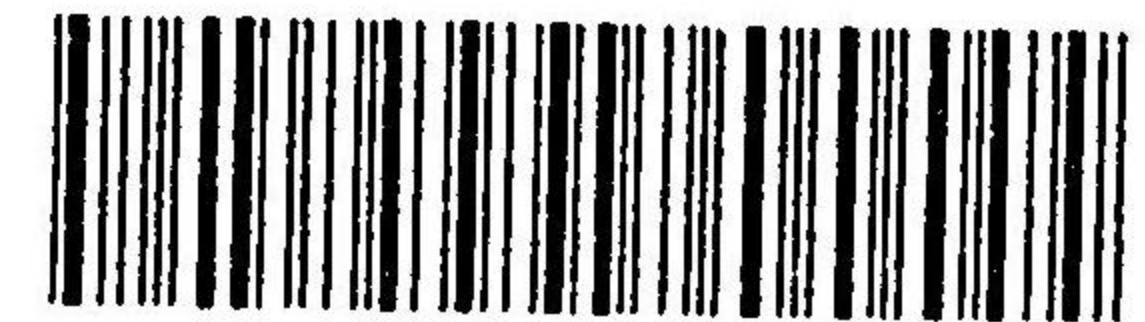
特65-402

木村長門守

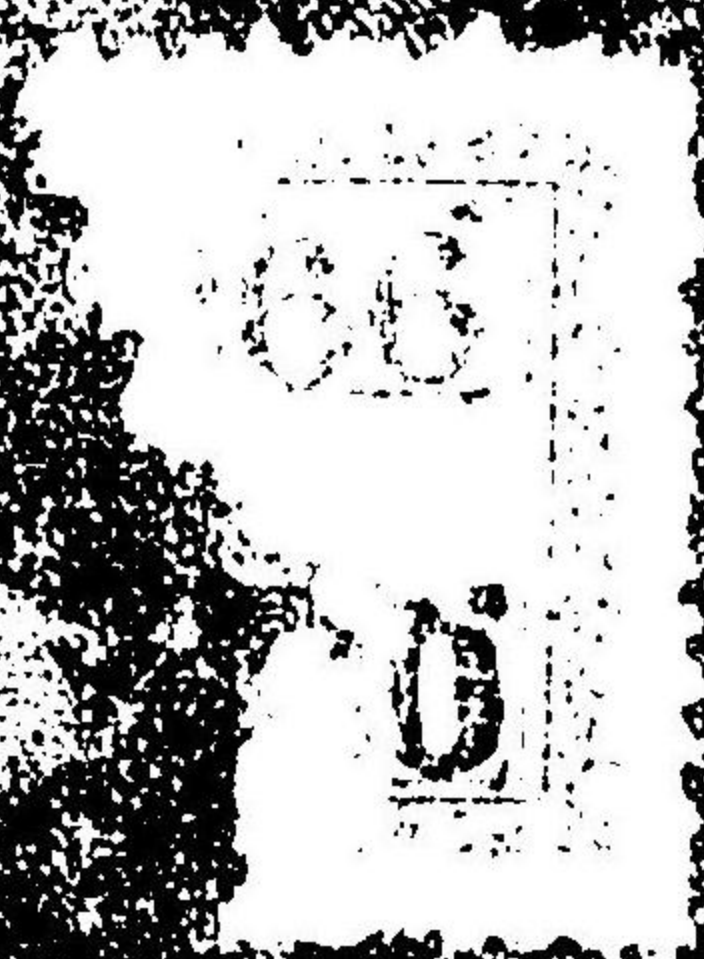
晴風軒/著

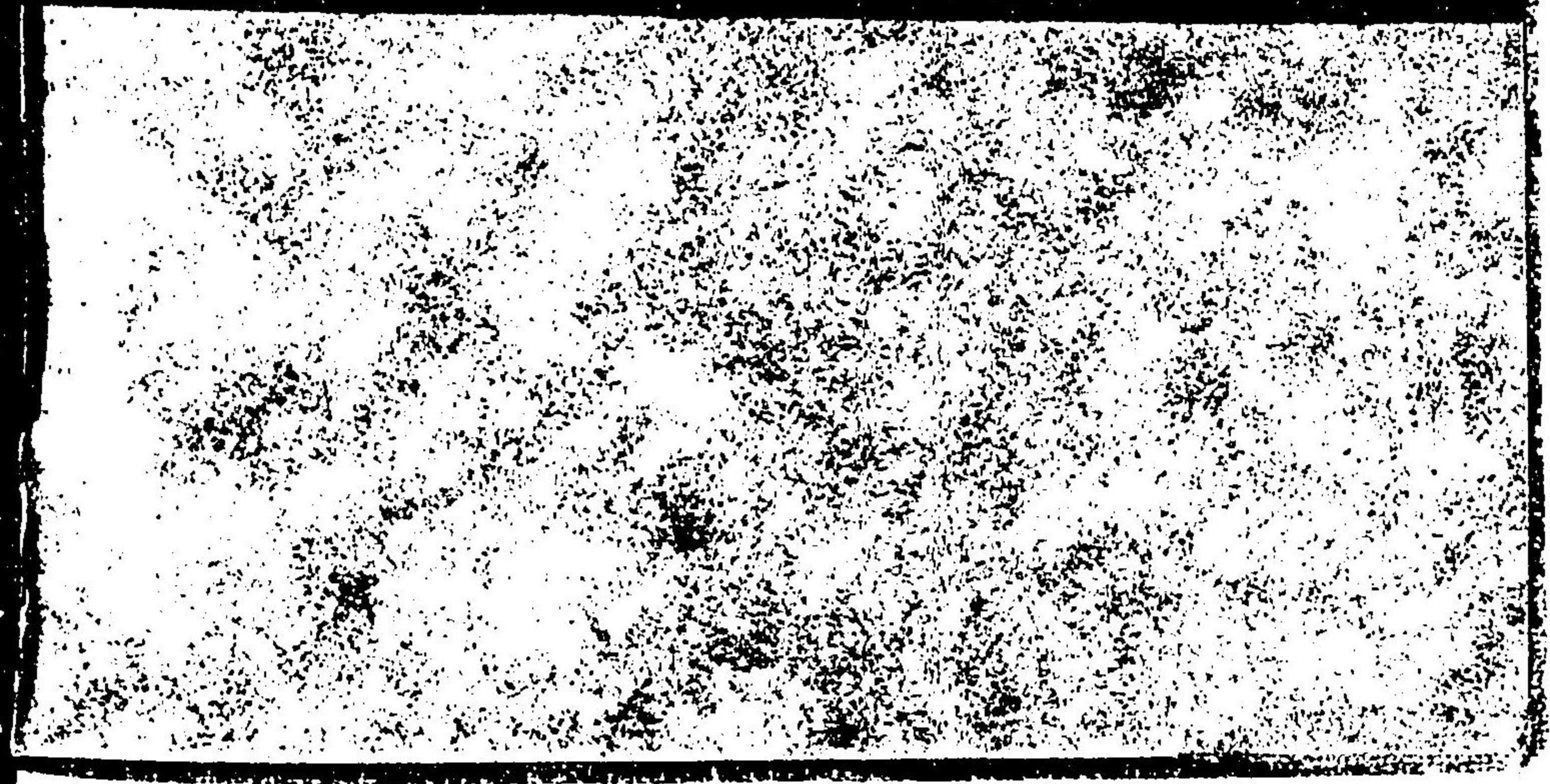
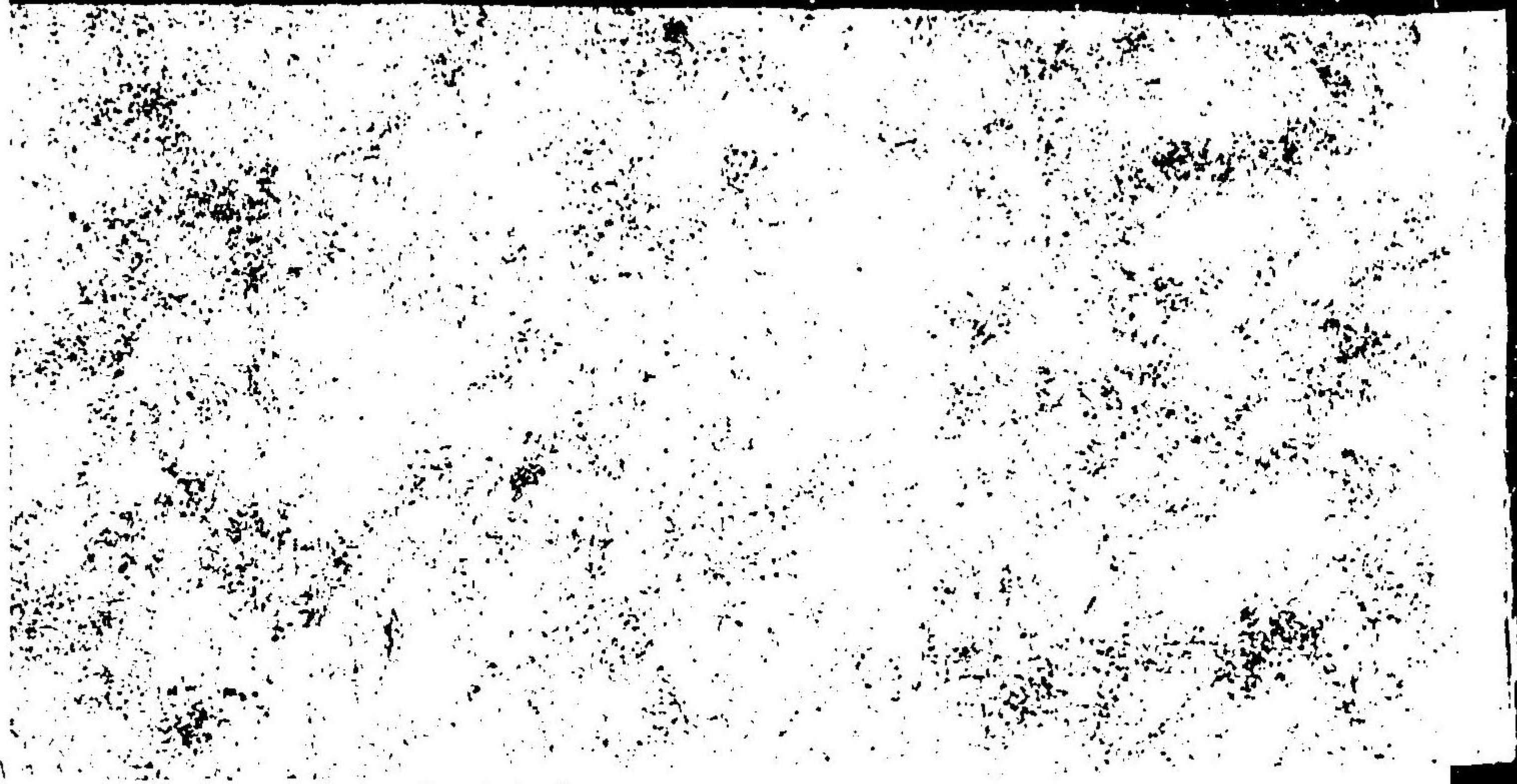
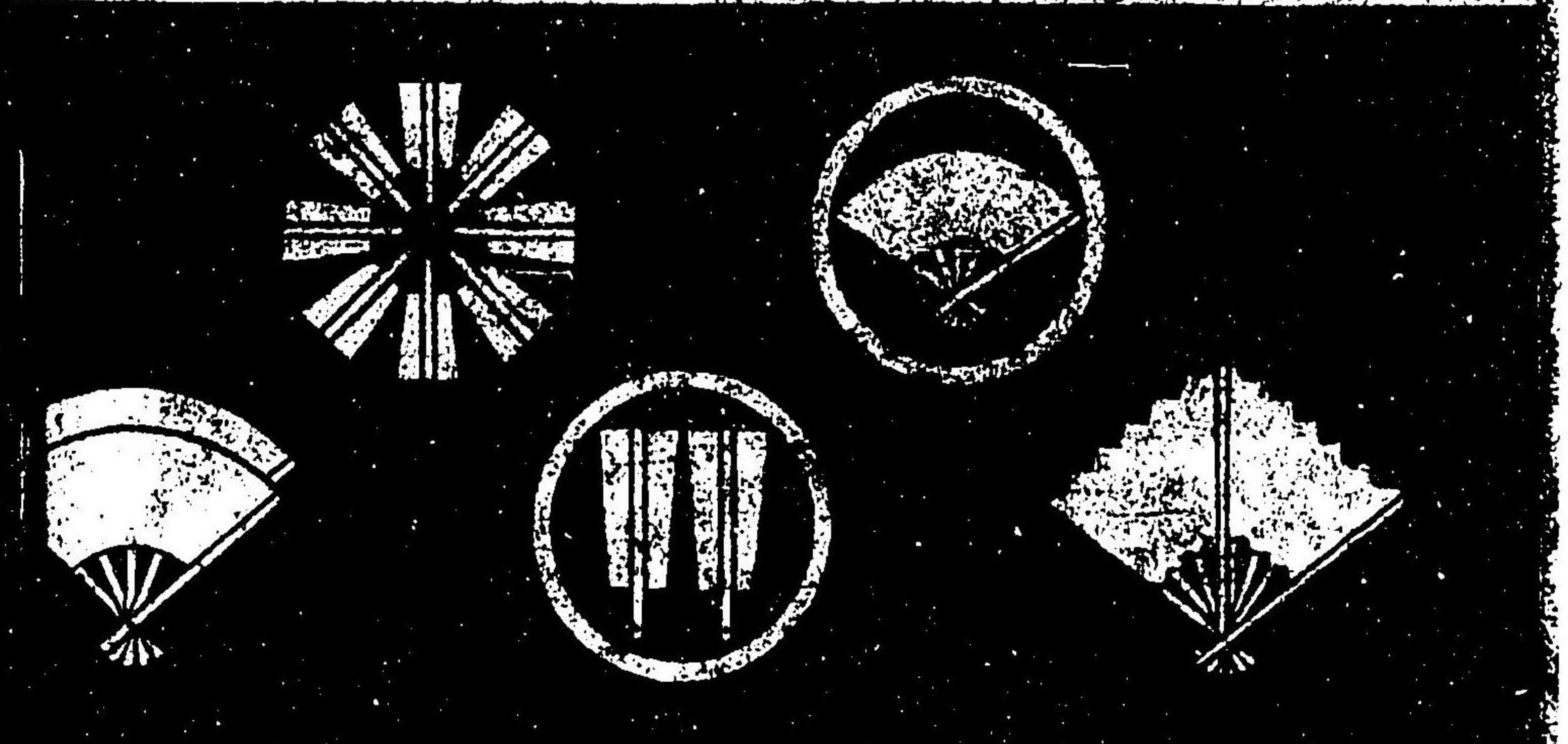
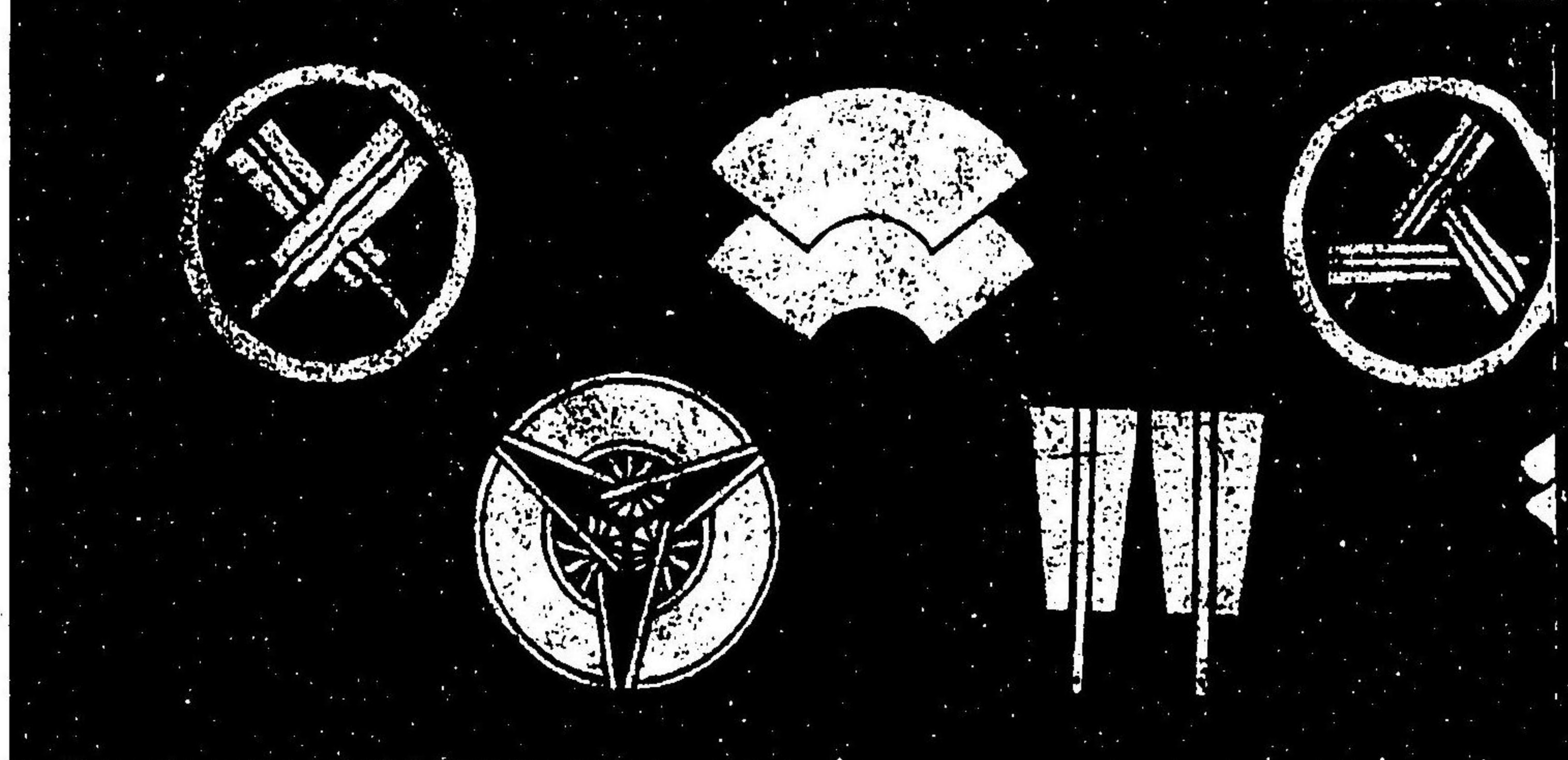
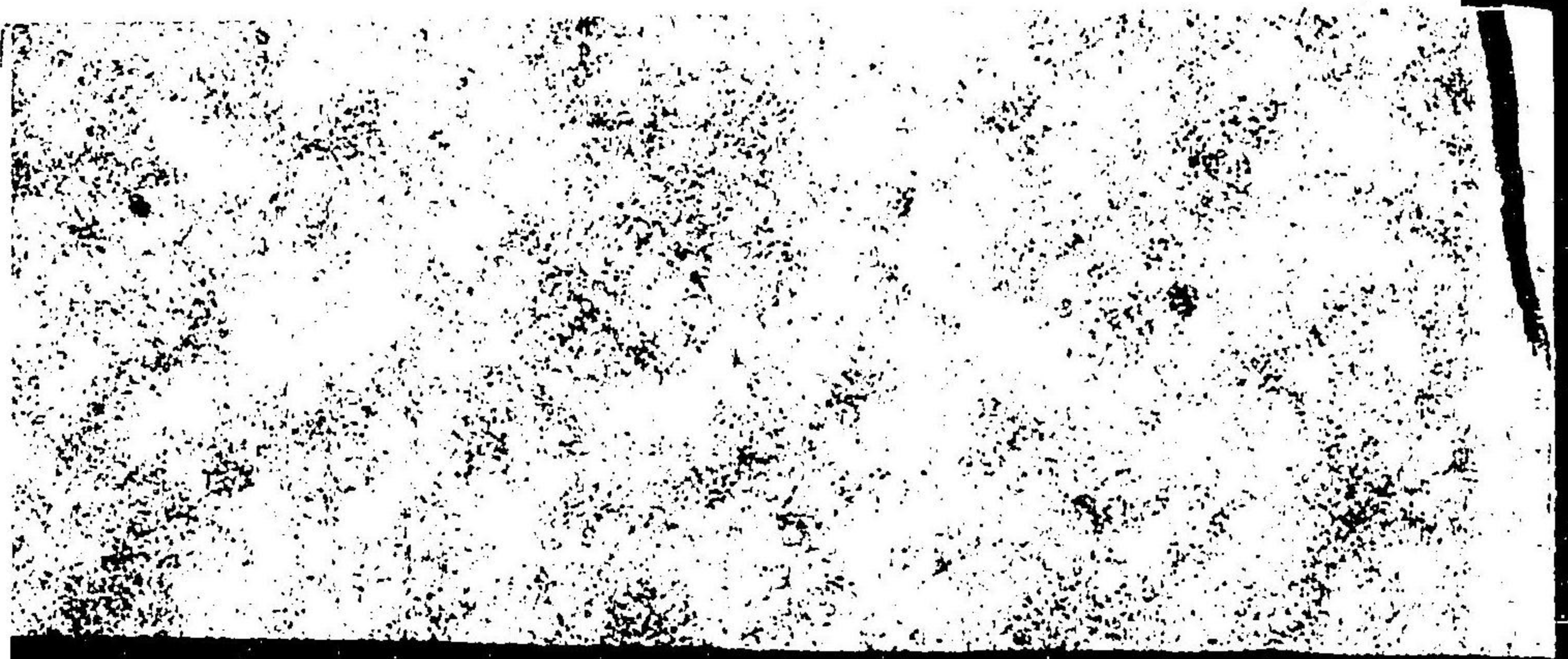
M44

DBS-0499

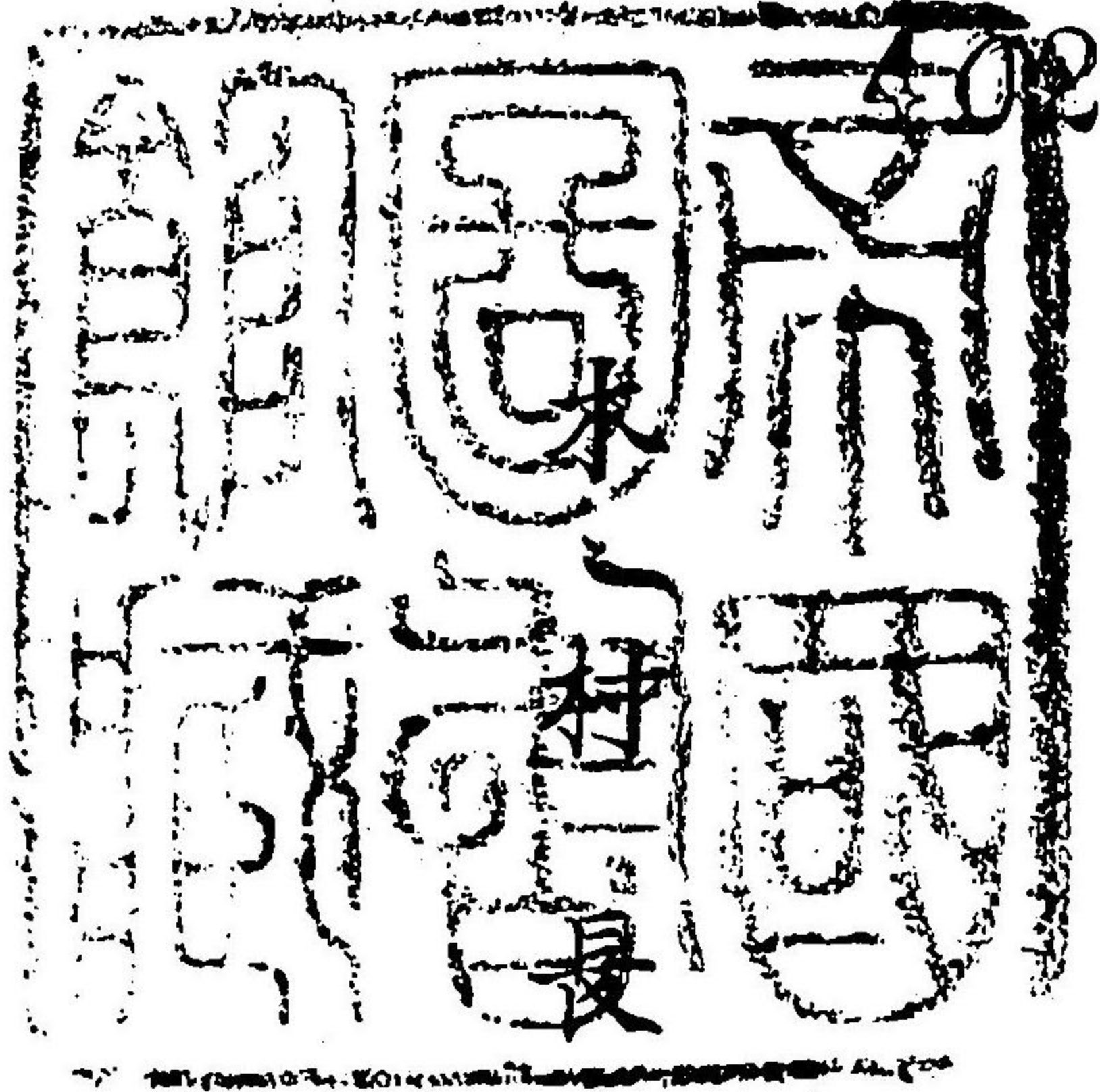


水村長門守





特65



門

守

9. 2. 1

袖珍講談文庫發刊の趣旨

大戦捷後、我が大帝國の讀書界は、國運の發展と共に、亦た多大の發展を來たし、修養的の漢文學大に勃興して、輕佻浮華の風漸く脱し、今や柔弱淫鄙の體文學は驅逐せられて、人格の鍛鍊徳性の涵養に資するの讀物を、歡迎するの域に入れり、是れ實に大國民の讀書眼が崇高なる位置に達したるの現象にして、眞に國力發展の曙光と云はざる可からず。

現下の讀書界如上の現象を呈す、左れば其の餘波は娛樂的の讀物たる小説界にも、幾多の感化を及ぼし、英雄豪傑忠臣義士の範圍を脱したる作物は、之を手にせる人なきに至れり、是れ蓋し娛樂的に英雄豪傑忠臣義士の徳性言行を知りて、以て自家の品位を高め、徳性を涵養せんとするの精神が、期せずして一致せる者と云ふべし。

弊堂此に感ずるところありて、今回袖珍講談文庫を發行せり、而して其の收むるところは、古今の英雄豪傑が國家に盡せる美談德行にあらざれば忠臣義士が主家に致したる至誠義舉ならざるはなし、是れ識す知らずの間に、大國民の徳性を涵養し、人格を崇高ならしむるの資料に供せんとするなり。従來行はたれる講談小説は、大形の冊子に仕立て、華麗なる口繪を挿入し、一人の傳記を物するに、二冊三冊の續き物とせり、故に一人の傳記を知るに二三冊の冊子を要し、而して勢の高き價を拂はざる可からず、且つ其の携帶には殊に不便を感ず。

此に於てか弊堂は現代讀書界の要求に應じ、一人の事蹟を小冊子中に遺憾なく納め、六號活字を以て、而も總振假名附に印刷し、製本も本綴とし、紙数を三百頁以上とし、而して僅々貳拾五錢均一を以て廣く講談讀書界に提供し、以て献身的に現下の讀書界に忠實を盡さんとす。

各編納むるところの事蹟は、各著者が弊堂の微志を容れて、正確なる引書に依り、歴史を基本として、勤めて面白く準色せるものなれば、蓋し在來の講談物と其の内容に於て幾多の價値特色を存するは素より、極めて低廉なる價を以て、完全せる冊子を講讀さる、されば其の利益や其れ幾許ぞ、而も金文字入の本綴なれば、机上の裝飾ともなるべく、又た其の携帶にも至極便なれば、紳士淑女も喜んで之をポケットに納め、以て旅行などの徒然を慰むる好同伴ともなるべし。如上の趣意に依り、本文庫を發行したれば、滿天下の讀者諸君は、弊堂が出版業者の責任として、聊か盡したる微志の、存するところを諒とし、第一編より途次愛讀歡迎の榮を垂れられんことを切望す。

二書房主謹白

はしがき

天運か人爲か、兎も角も、臣家の末路ほど、果敢なく感ぜられるものは無い、と云ふは忠臣烈士が、雲の如くに集まつてゐた、然るに半年ほどの間に、兩度の戦にて、彼のやうに滅亡した、而して其の忠臣其の烈士をして、遺憾なく活動せしむる餘地を與へず、悉く千古の恨を呑んで、戦場の露と化せしめたは、如何にも勿體なく感ぜしめて爲らぬ、予は大阪の冬及び夏の役の事蹟を讀む毎に、常に此の感が生じて、孤弱の秀頼の爲めに、一身を潔く犠牲に供されたる、忠臣烈士に對し、同情の感に堪ぬのである。

取分け木村長門守重成に對して、其の同情が甚だしく、且つ其の性行を直ちに取つて以て、臣子の龜鑑と爲すに躊躇せぬのである。

彼が其の花々しき忠死を爲したる二十三歳の春まで、蓋し一日も安  
 逸なる日を送つた事がない、父が石田三成等の奸策に依りて横死を遂  
 げたる後、身を六角義郷の許に寄せ、細さに辛酸を嘗めて秀頼に  
 仕るや、山瀬の奸策に窘められ、其れが漸くに濟むと、大阪の  
 冬の陣が来た、而して茶臼山の血判請取に心血を注ぎ、感状の返  
 上に諸將を泣せ、節食に妻を泣せ、妻の遺書を得て我れ亦た泣き、  
 而して若江堤の最後に、母を泣しむ、左れば重成の生涯は、血と泪  
 とを以て忠道を濕したのである、併りながら血と泪とが臣子の  
 龜鑑となれるにあらず、其の血其の泪を出ださしめたる心膽が、即  
 ち龜鑑となるのである、其の心膽とは如何ん、蓋し本書を誦讀して、  
 始めて知り得らるゝのである、請ふ愛讀を賜へ。

明治四十又四の盛夏

著者識

### 木村長門守目次

○ 腕白秀次と常陸介重滋	一
○ 木村重滋主君を佐く	六
○ 三奉行秀次を調べる	元
○ 夜陰に常陸介の微行	七
○ 木村常陸介秀次の爲めに心血を絞る	一
○ 伏見城内の大激論	一
○ 秀吉の心大ぬに動く	一
○ 秀次高野山頭の露と消ゆ	一
○ 壯絶悲惨なる誓願寺	一〇〇
○ 重成へ遺す金鐵の一言	一六



- 綱千代木村長門守重成と改たむ……………一三
- 淀川堤の夜嵐……………一五
- 重成鳴之助を懲す……………一六
- 住の江の秋遊び……………一七
- 淀君重成に盃を賜はる……………一七
- 山瀬の奸策重成を苦しむ……………二二
- 思ひも寄らぬ嫁御の話……………二五
- 重成後藤又兵衛を尋ぬる……………二七
- 重成の堪忍袋……………二八
- 今福堤の大功名……………二九
- 茶臼山の血判頂戴……………三三
- 木村長門感状を辭す……………三九

- 板倉伊賀守重成の忠節に泣く……………三三
- 心血迸ばりし烈女の遺書……………三六
- 木村重成名譽の最後……………三九

# 木村長門守

晴風軒著

## ○腕白秀次と常陸介重滋

位の人臣を極め、大志滄界を呑む底の大英雄豊太閤秀吉にも、一つの不足があつた。太閤の威力を以てしても、秀吉の精氣を以てしても、望み得られず求め得られぬ不足があつた。即ち嗣子のなきことである、求めて得られざる事なき秀吉も、嗣子ばかりは思ふやうに、設け得られなるとみえる、其れで甥に當る秀次を養子として、之を嗣子白職を譲り、而して聚樂の邸に居らしめ、太閤自身は大坂城に在つて、羽翼を海外に擴んと心魂を碎ひてゐた。此の時に太閤の愛壁淺井氏、即ち彼の淀君が男子を生むた、太閤の悦び一

方でなかつた、ところが太閤、子には縁の薄き方なるか、生れたその和子が、産聲を擧げればかりで死んだので、流石の太閤も太く消けたが、其の中に太閤は征韓の大軍を起したので、飯より好きな戦争に、失した子の事を忘れ、肥前の名護屋に置きたる本營に在つて、頻りと軍事を監督してゐたが、朝鮮軍の捷報が續々と來るので、太閤の機嫌斜めならずあつた文録二年八月に、淀君が男子を生んだと云ふ吉報が、名護屋の本營に達した、朝鮮軍は日々の大勝利、姪姫中の淀君は、男子を生んだと云ふので、太閤は非常に喜んで、今度は其の子の無事に成長つやうにと思ふてや、其の子を棄丸と名けさせ、而して自分ば軍事を、前田利家に委れて、其の翌九月に大阪城へ歸つたが、此の棄丸と云ふのが即ち秀頼であるのである。

此に於て太閤は秀頼が生れたので、行々は大阪城を秀頼に譲らふと考へたが、左様すると養子の關白秀次に、行々與えべき城がない、太閤、秀頼

が生れたので、養子の秀次を粗略に爲しはせぬかと云ふ批評を、天下の人に抱かるゝが心外と考へてか、秀次に與ふべき一城を築かんと思案した、時しも明國との和議が成立したので、朝鮮軍は續々と凱旋した、此に於て秀吉は伏見の地を下して、伏見城を新築することに決定し、文禄三年の正月に工事を起し、而して成功したのが、翌文禄四年、花咲き鳥歌ふ三月であつた、其れで大阪城より秀吉は、この新築の伏見の城に移つたのであつた。

ところが聚樂の邸にゐる養子の秀次、職は關白なれども、其の實は腕白である、此の人は叔父さんの秀吉に似ぬ、愚鈍な生れで、お話にならぬ亂暴な行状のみあつた、色に溺れ人を惱ます、言語道斷の行ひに至つては、秀次地下で怒るかも知らぬが、人間とは先づ以て云へぬ、其れかあらぬか秀次の事を當時、殺生關白と云ふてゐた、洵に早や大亂暴者であつた、必竟自分は秀吉に子がなかつたので、其れが爲めに、とつてもつかぬ關白職に昇つたの

だ、ところが亂暴者であるから其様分別が少しもつかない、當然ならば秀頼が生れたに依つて、關白職を秀頼に譲つて、若隱居を願ひ出なければ爲らぬ筈である、又た秀吉が大阪に立派な城のあるにも拘はらず、何故伏見なんかへ新たに城を築かれたのじやと云ふことをも考へれば爲らぬのに、一切お構ひなしであつた。

此の時に秀次に仕えて重く用ひられてた忠臣に、木村常陸介重滋と云ふ人があつた、此の木村重滋と云ふ人は、太閤秀吉に信用を受けて厚く用ひられてゐた家臣であつたが、秀次に關白職を譲られた時に、秀次を助けて天下の大政に、間違のなきやう、能く力を盡し呉れよと懇々と頼まれて、秀次補佐の重臣と爲つたのである。

其れが爲めに、何うかして亂暴の秀次を伶俐にいたしたいと、日夜心を碎ひて守をしてゐたが、何んの甲斐もない、時しも秀頼が生れ、秀吉が新に伏見

の城を築いたので、重滋は其れとなく、關白職を秀頼に譲つて、隱居を願ひ出でられよ、此が人たるの道で御座るぞやと、物に喩えて訓諫すること、一度ならず二度三度であつたが、材木に電氣を通じた如に、少しも感じがない、斯様主君に仕えた臣下こそ迷惑千萬である。

黒田如水、蒲生氏郷などの一粒選の大名も、秀次の暴状を見るに見かれて、屢次強意見をしたが一向にお用ひがないので、諸侯連も愛想を盡す、又た秀吉直參の大將連も、心外の事に思ふてゐる。

不義の行狀不徳の所爲は、天が其の繼續を許さない、此に心の附きたる者は其の終を全ふするし、心の附かざる者は、之に反す、五奉行の一人たる石田三成と増田長盛の兩人が、秀次の横暴を面白く思ふて、借度目をつけた、此れが秀次自滅の初めと相成つたのである。

何うやら奉行の石田と、増田とが眼をつけたやうである、今の中に早く關白職

秀頼に譲りて、隠居されれば、主君のお身の上危ふかるべしと敏くも、忠臣木村常陸介重滋は、睨をつけた、其れで又候や秀次に意見を加えたが、秀次は例に依つて例の如く、蚊が額に止まつたほどにも感ぜぬのみか、却つて秀頼が段々と成長されたら、無論關白職を召し上げられるだらうからと考がえて、行を改ためない、否な益々暴狀のつもののみである。奉行等が自分に眼をつけ出したと云ふことを知つてか、秀次は外へ出るにも多くの兵士を従へたり、又た諸大名に贈り物を盛んに遣はして、何んの爲めにや、類と諸侯の御機嫌を取り初めた。

○木村重滋主君を佐く

残暑が烈しい……強ひと口々に云ひ離してゐた中に、世は涼風の吹き初めて、文祿四年も半ばを送り、七月とは爲つた。

伏見城内の長廊下を、今しも静々と歩み行けば、奉行の石田三成である、殿中の坊主が、其れと見るより、石田三成様御登城……と呼ばるる。ア、此れ坊主……と、三成は呼ぶ、坊主は其れへ坐つて兩手を突く、三成ピタリと立ち止まりて、増田長盛殿御登城あらせられたか。『先頃御登城あらせられました、月の間のお溜にて、只今前田玄以様と、何にやらお物語りで御座りますると云ふ。』「オ、前田どのも、最早や御登城あらせられてるか、ウムーと三成は打ち點きて、其のまゝ長袴の裾さばきを静かに月の溜へ行く。増田長盛は社寺奉行の前田法印玄以と、對坐ひに爲つて何にや類りと相談に餘念なかつたところへ、石田三成は静々と入つて來た。『御兩所にはお早や早やと御出仕、三成退刻いたし、失禮に存じ申す、と會釋をして、其處へ坐す、兩人も鄭重に挨拶をする。』

「先登より前田殿と下評定いたしましたところ、前田殿も我々と御同然の御意見にて、今日太閤殿下へ、言上いたし、然るべくお指揮仰せが宜しかるべくとの儀で御座つたと、増田長盛の言葉に。」

「然らば我々三人打ち揃ふて、出仕の趣き、殿下へ御披露いたさするで御座りませうかなと、三成は云ひ出る。」

「最早や未の刻に間も御座れば、早う御披露いたさするがよろしゆ御座らふと、云ひつゝ、前田支以は呼び鈴を引く、而して三人が打ち揃ふて出仕せし趣きを、御前へ披露いたせと云ひつける。」

問もなく坊主は出で来たつて、お召し御座りまする、此に三奉行は打ち揃ふて秀吉公の御前へ出る、秀吉は三奉行打ち揃ふて、突然出仕いたせしを内心に訝かられつゝ。

「其方達三人打ち揃ふて、突然の出仕とは、予頼んと合點がまめらぬ、何に

か變つた事にて、生ぜしかと秀吉不審顔にて訊れる。

「如何にも容易ならぬ一大事御座りますると、増田長盛は両手をつきて云ふ、秀吉愈々不審の眉を蹙めて。」

「ナニ…：一大事あると、ハテ合點のゆかぬ、聞かう細さに申うせと、片脇に在つた脇息を前へ直させ、其れに兩肘を載せて、身體を少しく前へ差し出し耳を聳だてる。」

「關白殿御叛反のやうに御座りますると、三成の言葉を聞きて、大志雅量の秀吉は、カラく…：と打ち笑ひつゝ。」

「秀次が予に反かんと、アハ、ハ、ハ、ハ…：彼の様な青二才、假し事を企たつるも何にほどのことやある…：なれど益なきことに天下を騒がするは、朝廷へ對し奉つて恐あり、先づ其の仔細聞かう。」

「幼君御出生以來、關白殿の御行跡一層に面白からず、行々は幼君に關白

職を取り上らるゝに相違な御座りませすとや、存ぜられけむ、仕たい三味の  
 亂行、ばて情なき御事と、其れとなく御容子に心を配り居りましたる折か  
 ら、近頃は御出遊の折にも、數多の武將兵卒を従がはせられ、殊に諸大名  
 の方々へ最も懇なる贈物をいたされて、専ら歡心を得んことに勤め居ら  
 れまする、此れ諸候方を懷けて、反旗を翻へされんとの下心なりと推察  
 いたされましたる次第で御座る。

『只今石田殿の云はるゝ通りの儀に御座れば、嫩葉の中に害を除くことこそ  
 天下のお爲かと存ぜられまするに依り、一應關白殿の御吟味殿重にあそばさ  
 れて、然るべくかと存ぜられますると、前田支以威儀を正して言上するのであ  
 る。』

大志雅量の秀吉も、斯う云はれてみると、其れでも構はぬ、打ちやつて置けと  
 云ふ譯にはゆかぬから、ハテナと思はれて思案の小首を傾むけて居られる、三  
 人は無言で差し伏向てゐる。

『ウーム……秀次出遊することに、多くの武將兵卒を伴れて行くとか……  
 此れは先づ兎も角もとするも、諸大名に厚き贈り物をいたすと云ふは、頼ん  
 と合點が参らぬな、さては秀次方々の云ふ通り、何にか企て居るかな、假  
 し企だて居らふとも、格別案じるには及ばぬ、なれど今も申す通り、天下を  
 騒がするは朝廷に對し恐れ多き次第なれば、先づ其方三人にて、篤と秀次を調  
 べ見ぬ、予が呼び寄せて直々取り調べべきではあるが、併し其れでは事が荒だ  
 つて相成らず、左れば予に代つて取り調べいと云はれる。』

『心得まして御座りまする、何事も天下のお爲めで御座れば、殿下に成り代つ  
 て、一應關白殿を取り調べるで御座りませうと、三成は云ふ。』

『ウム、確と其方達に任せたま、秀吉は左程強うは氣にもせぬ、しさい容子であ  
 る、すると増田長盛が兩手を軽く突きて。』

「甚だ恐れ入つて御座りますが、關白殿を、お取り調べいたしまする御許可状を頂戴いたしとう存じまする、テ御座りませぬと、お取調べに不都合を感じられまするに依りと云ふ、此れは如何にも其の通りにて、此の三人は秀吉直參の大將連であるし、殊には奉行の職を承はつてゐる、なれども其の取調べべき相手は、兎も角も天下の關白である、其の關白を取り調べるのであるから、秀吉の許可状……即ち委任状が必要だ、此れがなくてはならぬから、其れで委任状の請求をしたのである、如何にも尤もじやと、秀吉は承知して、此に委任状を前田玄以に認めさせ、而して秀吉は之を證明すべく爲めに、花紋を署し、而して之を石田三成に渡した。

「然らば取り調べまして、其の容子を言上いたすで御座りますると、石田と増田の兩人は挨拶に及ぶのである、此の時に前田玄以が。

「取り調べの結果、格別のこと御座りませれば、此の上もなき幸多き儀に御座

りまするが、萬一十分に疑ふべきことの御座りましたる節には、然るべく御分別のほど、願はしゆ存じますると云ふ。

「可し承知いたした、兎も角も十分に取り調べひと云ふのである、此に於て一同は打ち伴れだつて、秀吉の御前を退く、其れより兩三日を経たる、確か七月の四五日頃であつた、石田、前田、増田、の三奉行が、長袴に威儀を正し其れ其れ從者を伴れて聚樂の邸へ赴く。

關白ならぬ腕白秀次、斯る事の我が身に生じ居らふとは、夢にも知らない、テ、今しも聚樂の敷寄を極めたる奥の間に、二十五六人の侍女に取り圍まれ酒を飲みながら、他愛もないことを云ふて遊んでゐる。

此の關白秀次は常に三十人からの、愛妾を抱へてゐたと云ふ、實に厄介な人物であつた、酒を飲んで女に興がりつゝ、喜がり切つてゐるところへ、近習の一人が次の間まで進み出て、雛鶴さま、おわしまするか、少しくお取次の



儀願ひとう存じますると云ふ、雛鶴と云ふは多くの侍女と共に、此の席に侍つて、秀次の機嫌を取つてゐた愛妾の一人である。

其の呼ばれたる雛鶴は、ハイと答へて静かに立ち上つて、近習の傍へ来た、近習は其れへ兩手を突きながら。

『只今御奉行石田様、増田様、前田様打ち揃はれて、御出仕に相成り、關白殿下にお目通りいたしたいと、仰せられて、御座りまする、此の由殿下へお身様より、お取次のほど願はしゆ存じまする。』

『オ、左様で御座りまするか、心得て御座りますると、雛鶴は優しゆ云ふて立ち上り、此の由を秀次に云ふ、酒に心の亂れかゝつてた秀次は。

『ナニ石田、前田、増田の三奉行が出仕して、予に目通りいたしたいとな、如何なる用事かは知らぬが、只今は酒宴の最中じや……エート……ウム秀次、今日は氣分悪ふして、引き籠り居るに依り、差し當つての用事でなくば、明日に

いたし呉れよと、體よく云ふて追ひ返せと、亂暴なことを云ふ、斯様關白のだから始末に終えない。

雛鶴は此の由を近習に傳えた、近習は此の返答に呆れ返つたが、併し關白の仰せ、近習の身として一言半句も言葉を添へる譯にゆかぬからして、委細畏まつて候と、其の場を引き退つたが、此の事を直と奉行の方々へ、申す譯にはゆ

かぬので、先づ關白の後見とも云ふべき、木村常陸介重滋に此の事を物語つて、如何取り計らひまして、宜し御座りませうやと云ふ。

今しも重臣の詰所に在つて、其の日の政事を見てゐた、木村重滋は、此の事を聞いて不審の眉を蹙めながら。

『何んと云はるゝ、其れでは石田三成、前田支以、増田長盛の三奉行打ち揃はれて突然に、關白殿にお訊れ申し度ことあれば、目通りいたしたいと云ふて來られたとか、先頃よりの石田どのと増田どのとの御容子、兎角に合點ゆかず

と存じ居つたが、斯く三奉行打ち揃はれての御出仕とは、ハテナと木村重滋、思案の小首を傾けたが、何にやら點きて左あらぬ體。

「ツーム、三奉行打ち揃はれての御出仕とは、是りや何にか殿下に直々お目通りの上へ、申し入れられれば相成らぬ御用事の生じてあらう、左るに酒宴中なるより、氣分悪しなど、嘘を云ふて、面會を拒絶されんなどは、甚だ以て宜しからざる思召じや、左様なれば身許が殿下に、一つ御意見を申し上るであらふとあつて、重滋は其のまゝ奥御殿なる、御酒宴の席へ赴むかれるのであつた。

秀次も木村常陸に對しては、我儘を云ふことが出来ぬのである、と云ふのは自分分關白職を譲られる時に、木村重滋を其方に附け添はせるに依つて、萬事は重滋の指揮を受けよと、太閤より云はれてゐる、其れだから重滋には幾分か遠慮をしてゐた。

我が君へ少しく申し入れ度き事が御座りますると、重滋案内も乞はずに、其の酒宴の席へ来て、末座に控へつゝ斯は云ふのであつた。

女どもも皆な重滋には、遠慮してゐたから、今重滋の來たのを見ると、一同が申し合せたやうに、ズート左右へ退ぞく、心地よふ酔ふてゐた秀次は、オ、重滋か、何にか火急の用事にも出来てかなと、優しく訊れる。

木村常陸介は心の中にて、さてもさても情けないことと思ひながらも、左あらぬ體にて、靜かに打ち點きながら。

「我が君に、少しく御意得たき儀の御座りまする、就いては侍女方御一同にはお次の間へ暫らく御遠慮の儀、願ひとう存すると云つて、シロリと左右に居並んでゐた、女どもの顔を見廻すのであつた。

女どもも常陸介には恐れ入つてゐる、其れで然らば遠慮せいと、秀次の言葉のかゝらぬ中に、一同は左様なればと挨拶して立つて行く。

『如何なる用事なるかと、秀次は一膝前へくり出づる、重滋は昵と秀次の醉顔を眺めながら、殿下御免あそばされませと、二膝三膝前へ進み出でつゝ、其れへ鄭寧に兩手を突きて。』

『只今承はりますれば、石田どの前田どの増田どの、打ち揃はれて御出仕お目通りいたされたいとのこと、然るに氣分悪きに依り、明日にても出直し來たられよとか、仰せられましたるよし、身許承はり、兎も角も方々へ申し上げられること、先づ暫らく控えよと、斯様に申して殿下の思召し承はらふと存じて罷り出まして御座りまするが、常陸考へまするに、今日三奉行打ち揃はれて、お越しなされましたは、思ふに太閤殿下のお旨を承はつて、お越あそばされたのでは御座るまゐかと存じられまする、然るに氣分悪きに依りなぞと、假し御方辨にもいたせ、お断りあるは三奉行の方々に對しては、差支は更に御座りませぬけれども、併し太閤殿下に對し奉つては、恐れ多き』

儀かと存せられまするに依り、御面會あそばされることこそ、然るべくかと存じられ申すと云ふ。

『成るほど左様云はるれば、如何にも左様じや、然らば面會いたすであらふほどに、正殿へ通されひと、秀次は木村重滋の言葉に従ふ。』

『然らば殿下、未だ巳の刻を打ちましたる許なるに、其の御醉顔は兎も角も三奉行に對して恐れあり、左れば冷水にて御洗面あり、而して御面會あそばさるゝこそ、作法で御座らふと云ふて、木村常陸は其のまゝ秀次の前を退ぞくのであつた。』

○三奉行秀次を調べる

聚樂の桐の間は、太閤直參の大將連の溜り所である、石田、増田、前田の三奉行は、桐の間に休息し、坊主が點て運ぶ茶を飲みながら四方山の話して

秀次面會するか否やの返事を待つてゐる、三人の聚樂へ出仕したのが、正に辰の刻半であつた、然るに早や半刻を過して、巳の刻を打つた、なれども未だ何んの返事もないので、此りや坊主茶を持ツ……と怒鳴てゐる。

『御兩所、大層に取次の返事手間取では御座りませぬか、我々が出仕いたしましたのは、彼れ是れ辰の刻半で御座つたに、只今打つたは巳の刻、左るに何等の返答もないと云ふは、如何いたしたる次第で御座るかな、御兩所は此の儀何んと思召さるゝと石田三成は少しく疔癩を起して云ふと、前田玄以が軽く打ち笑きつゝ。』

『三成どの其の儀御尤もで御座るが、奥向に於ても、其々用事の御座らふことゆへ、先づ先づお氣長に待ち居られひと、宥めるところへ、坊主は入つて来て、お三方様へ申し入れまする、只今此れへ木村常陸介重滋さま御越に御座りますれば、此の儀御承知置き下さりまするやう。』

『ウム……然らば木村常陸殿此れへお越になるかな、ウム……と前田玄以は軽く黙ひて、此に三人が一寸と衣紋を繕らふて居住居を直す、此れは其の頃盛んに重く用ひられてゐたる、武家の作法である。』

ところへ近習五人を従へ、靜々と入つて来たは、木村常陸なり、此れは常陸介どの、暫らく御機嫌をも得うかがはず、御無沙汰勝で御座つたが、相變らずの御壯健……イナ益々の御元氣と見まゐらせられ、大慶至極の儀に存じ申すと、前田玄以年長なるを以て、二人に代つて斯は挨拶を述べ、

『御三方こそ、別ての御壯健、常陸介珍重の至りに存じ申す、と同じく鄭重に挨拶を述べて、更に言葉を改ためつゝ。』

『今し承はりましたるところ、お三方には秀次殿下に、御對面あらせられたき由、如何様なる御用の儀なるかは存じ申されども、先づ其の由、殿下へ言上申し上げましたるところ、其れは終になき三人打ち揃ふての出仕、何にか火急

の用事出来いたせしに相違あるまじければ、早速面會いたすほどにと、斯様に仰せられては御座りまする、御休息相濟みまして御座りますれば、御出仕下さりまするやう、願はしゅう存じますると云ふて、木村常陸は三人の容子をシロリと視るのである。

「オ、左様で御座るか、然らば常陸殿、近頃御大儀ながら、御案内お願い申そうかと、石田三成は云ふ。

「然らば御案内申し上げませうわいと、常陸が立つ、其の後に續いて三人も立ち上る、而して打ち伴れ立つて正殿へと行く。

聚樂の正殿に、三人は控えてゐる、常陸は其のまゝ奥へ入つて、三人が正殿に来てゐることを秀次に云ふ、秀次は常陸の意見に依つて、冷水にて顔を洗ふたが、冷水で顔を洗ふた位で、酔の一時に覺るものではない、左れば禮服に着かへたが、酒の香氣は紛々として聞こえてゐる。

待つ間程なく秀次は、常陸に誘はれて正殿に出で、上段に悠然と座を構へる三人が其の容子をシロリと見ると、互ひの間が大分に離れてゐるから、確とは分らぬが、何處からともなしに、ブーン……と嗅つて来る酒の香に、さては秀次どの朝の間より、早や御酒飲られてよかと、口へ出しては云はぬが、呆れたかして互ひに顔と顔とを見合してゐる。

常陸は秀次と三人との中間に座を定めて、先づ三人に向ひ、殿下御出御に御座りますると云ふ、すると年長の前田玄以は、叮嚀に打ち點ひて、

「殿下に於せられては、秋冷の候に近寄まするにも拘はらず、益々御壯健にゐらせられ、千萬御芽出度存じ奉りますると、三人が兩手を突きて述ぶる挨拶を聞き終りて、相變らずの元氣、予に於ても強う嬉ゆ存ずるぞよと、會釋をして、其れより言葉を改ためつゝ、

「其方達三人、打ち揃ふての出仕、何にか火急の用事にも出来いたせしか

など、秀次脇息に凭れながら、應聲に訊れる。  
 『少しく殿下に直々お訊ね申し上げ度儀の御座りまするに依り、我等三名打ち揃ふて、斯は出仕いたして御座りまするが、先づ之を御一覽下さりませるやうにと云ふて、三成が懷中して来た、太閤の許可状即ち委任状を取り出だし、此れは太閤殿下の御状に御座れば、木村殿關白殿下へお手渡し下さりませるやうにと云つて、恭しく差し出だす、常陸進み寄つて謹んで其れを請取り而して秀次に渡す。

養父太閤殿下よりの御状とは、ハテ心得ぬ、如何なる事や認めあると不審がりつゝ、請取つて見れば、コハ如何に叛反を企て居る由、陰に承知いたしたに依り、今日三奉行に命じ、訊問いたさする、三奉行の間ふところは盡く予の間なりと承知し、有體に申し述べしと云ふ、意味が認めてあつて、而して太閤の花紋が、ピタリと描れてあるので、秀次は驚ひたから、酒の酔が

一度に醒てしもふて、顔が蒼くなつた。

其の容子を早くも見て取つた、木村重滋は、書中の容子知る由なけれど、此は一大事なりと、早くも胸を轟かせたが、左らぬ體で控へつゝ、秀次どののお身の上に關する大事に相違なき故に、事の次第に依つては、何處までも辨護せむと、咄嗟の間に覺悟を定めつゝ悠然としてゐる。

秀次は餘りのことに、一時は太く驚ひたが、左あらぬ體にて、シツと三人の容子を眺めつゝ、無言である、其の御状御得心參りましたかと、石田三成が兩手を膝に置ひて、威儀を正しながらに訊ぬる。

『合點いたしたが、心得られぬは此の秀次に、叛反の企ありと云ふ御証じや秀次不肖と雖も、叔父君に對し奉つて、何條叛反などを企てやうぞや、誰が斯様な根も葉もなきことを、叔父君のお耳へ入れしか、護者の言とは信ずるが、途方もなきこと、秀次強う迷惑をいたす、如何なる者が斯様なことを

申し出でたか、其の者の姓名先づ聞かうわいと、一時は驚きたるも、今は腹立しき容子にて云ふ、この言葉を聞ぬた木村常陸は、愕然と驚ひた、叛反を企だてるとは比れ容易ならざること、秀次どのに叛逆の企があると、太閤殿下がお疑ひを掛けられては、關白職の位ぬは勿論、危ふきのみか、一つ間違へば御生命に關すること、此りや容易ならざる大事件が出来いたしたぞツと、流石に膽力と云ひ志慮と云ひ、千人に秀てゐる木村常陸介重滋も、此れには驚くよりも寧ろ呆れ返へつたが、先づ三奉行の云ふところを、篤と聞かむと殊更に威儀を正して耳を峙てたのである。

「サア如何なる者が其様な不埒なことを、叔父上のお耳へ入れしか、其者の姓名を承はらふ、三成先づ云へと、秀次の言葉は荒ひ。

「其姓名は我等存じ申しませぬ、太閤殿下より關白殿、叛反を企たて居るよし、斯々の證據ありとのことなれば、其方等三人予に成り代つて、殿重に

取り調べ參れ、關白どの取り調の許可狀渡すであらうと仰せられて、其れなる御狀を下されたので御座りますと云ふ。

「ウーム……すりや其方達は、讒者の姓名存せぬと申すか……然らば其の者の姓名訊ぬること、兎も角もとして、予に叛反の企ありと云ふ、其の證據を先づ聞こうと、秀次の眼は殊に涼しく光るのである。

「其の證據と申しまするは、關白殿下近頃、御出遊あそばされまするにも多くの武將を召し伴れられ、又た多くの兵卒にまで、甲冑を被むらせて、守護あそばさるゝは此れ如何なる次第にて御座りまするか、此の申開き先づ承はらさせて、戴きませうと石田三成が云ふ。

「アハ、ハ、ハ……如何なる御嫌疑かと思へば、右様のことか、予が出遊いたす毎に、武將や兵士等に甲冑の用意をさせて、供に伴れるは、聊か仔細のあること、此の申し開きは太閤殿下のお手許まで、書面にて差し出すであらふが

御嫌疑の證據と云ふは、是れのみかなと、秀次内心に成算のあるにや斯く云ふて應答に訊ねると、石田三成が未だ御座りまする。

『未だある、オ、如何なることか、其れ聞かうと、秀次の言葉が未だ終らざる中に、然らば此の度は拙者が申し上げるで御座りませうと、云ひ出でたは勘定奉行の増田長盛である、秀次も木村常陸も、今度は如何なることを云ひ出るやと、耳を時たてゝゐると、長盛一膝くり出で。』

『關白殿下に於せられては、先頃より諸大名に贈り物を厚ういたされ、類りに好を結び居らるゝ由、是れ思ふに諸大名を手なづけて、行々は味方に引き入れられむ、御所存と推察な仕つた、然らざれば諸大名に今更贈り物を厚ふし類りに歡心を求めて、好を懇にいたされんとさるゝ必要なし、此の儀如如で御座りまするか、御申し開き承はるで御座りませうと云ふ、秀次常陸とチラリと顔を見合せたが、左あらぬ體で又もや。』

『アハ、ハ、ハ、如何なることかと思へば、予が近頃諸侯伯と親交を結び出せしに依り、行々は諸侯伯を味方に引き入れ、天下に事を揚げむ所存ならむと云はるゝか、ハテさて譯もなきことを、ウム此れも亦た其の云ひ開を、書面に認めて太閤殿下のお手許まで差し出だすであらふが、未だ外に嫌疑の證據と云ふのが、あらば一ト纏めといたして聞くであらふと、秀次は太く立腹の容子にて云ふのであつた、すると前田玄以が。』

『先づ右の二ヶ條が、叛反を企て居らるゝと云ふ、重なる證據に御座りまする、此の外にお疑はしき數々と申しまするは、と云ひ來たつて、前田玄以は三尺ほど進み出で、秀次の顔を信度眺めて、嚴然と控え、言葉に一段の力を籠めつゝ、殿下御遠慮なく申し上げまするに依り、御立服なく篤とお聞き取りのほど願ひ上げ奉りますると云ふて。』

『淀君様、秀頼様を御出生あそばされてより、以來、殿下の御亂行殊



に甚だしく恐れながら、殆んど自暴自棄の御有様に御座りまする、此の儀は如何なる御所存にて御座りまするか、又た關白と云ふ貴きお身であらせられながら、常々より御品行悪く、思はしき取沙汰で御座りますれど、殺生關白など云ふ名を、下々の者に呼ばられ、剩さえ政事も忽せにあそばさるゝ、此に就いては殿下の御重臣方が、度々御意見あられたにも拘はらず、更にお改めの容子なし、思ふに何にか深き御所存あつてのこと、存ぜられまする、又た先づ頃黒田孝高殿、太閤殿下御老年の身にて、長らくの陣中のお勤め嘸かし御大儀のように拜しますれば、關白殿下お代りに相成つて、肥前名護屋へお出馬あつては如何にやと、御意見申し上げたるにも拘はらず、更にお用ひなく、又た蒲生氏郷も、關白殿下に海を渡り給ふて、朝鮮軍の先鋒と爲られ給へと、お諫め申せしが、此れ亦たお用ひなし、右等は恐れながら太閤殿下を、馬鹿にいたされたる御所爲にて、太閤怒れば我れ亦た所存ありと

云ふ、思召の様に拜されまする、此れ等の御申し開も承はりとう存じまする、此の儀は如何で御座りまするか。

「ウーム……其等は全く秀次が不心得にて、志慮足らず不徳のいたすところである、此の儀は秀次太閤殿下に御申し開き旁々、厚くお詫をいたすであらうと、流石の秀次も左機櫓柄らしく云へぬからして、斯は云ふ。」

「然らば關白殿下には、此れ等の御申し開に對しては、書面を以て太閤殿下へ、言上いたさるゝと仰せらるゝ儀に御座りまするか、石田三成は念を押すやうに訊れるのであつた。」

如何にもと秀次云ひ來たつたが、暫らく何にやら思案を爲しつゝ、ウム書面に云ひ開いたそふかとは存せしがな、併し其れよりは叔父君に、御對顔の儀希ひ、御面前に於て逐條御申し開きいたすであらう、其方達左様承知いたさるゝが可からうと、秀次は三人の顔を見る。

云ふ、思召の様に拜されまする、此れ等の御申し開も承はりとう存じまする、此の儀は如何で御座りまするか。

「ウーム……其等は全く秀次が不心得にて、志慮足らず不徳のいたすところである、此の儀は秀次太閤殿下に御申し開き旁々、厚くお詫をいたすであらうと、流石の秀次も左機櫓柄らしく云へぬからして、斯は云ふ。」

「然らば關白殿下には、此れ等の御申し開に對しては、書面を以て太閤殿下へ、言上いたさるゝと仰せらるゝ儀に御座りまするか、石田三成は念を押すやうに訊れるのであつた。」

如何にもと秀次云ひ來たつたが、暫らく何にやら思案を爲しつゝ、ウム書面に云ひ開いたそふかとは存せしがな、併し其れよりは叔父君に、御對顔の儀希ひ、御面前に於て逐條御申し開きいたすであらう、其方達左様承知いたさるゝが可からうと、秀次は三人の顔を見る。

「殿下の御意では御座りますれど、我々三人が太閤殿下のお旨を承はり、名代として伺ふたる儀に御座りますれば、一應は我々へ御申し開きの儀、篤とお聞せ下されて然るべし、左すれば我々その御申し開きを、太閤殿下へお傳へ申し上げますれば、其れにても太閤殿下御不得心と御座りましたる其の節には殿下御直々に、申し開きあそばされて然るべし、兎も角も御嫌疑の重なる第一第二の個條に對する、御申し開き細さに承はるで御座らふと、石田三成はキツパリと云ひ出づる、木村常陸は唯々兩眼を閉ぢて、思案に暮れぬたるのみであつた。

「其方の云ふところ、一應は尤もじや、なれど予は太閤殿下に、御對顔いたして申し開きたすほどに、今此處にて其方達に語るには及ばぬ、然らば予が右様申し居つたと、伏見へ歸つて殿下に傳えよ、秀次も秀吉の甥だけあつて、亦た疝癰が強ぬ、其れで三成の意地わるき此の言葉に對し、少しく疝癰を生

して、語氣稍や荒く斯は云ふ。

此の答を聞き終つた三成は、其のまゝ無言で信度思案をしてゐたが、何に思ひけむ、木村常陸介重滋どの、お身に少しく御意得たしと云ふ、如何様なる儀で御座りまするか、終始無言でゐた重滋は、居住居を直して云ふ。

「關白殿下に於ては、只今の拙者の言葉を、疝に觸えられたかのやうに拜し申すが、併し我々は太閤殿下の名代として参りしもの、左るに依つて、殿下の御委任状を戴ひて伺ふたので御座りまする、故に我々三人の訊れば、殿下のお訊れも同様で御座る、然るに申し開き、お聞せ下されぬとは、殿下の御諛に反き給はる儀かと存ぜられ申す、我々は此の處にて強て御申開き承はられば相成すと申す次第にては御座らぬなれども、其れにては養父子の御道な相立ち申さず、又た御疝癰強き太閤殿下の、思召し如何あらむか、此の際の時、關白殿下の御不利益かと存ぜられ申すが、お身は何んと御分別あらせ

られまするかなと、三成は飽くまで、其の申開きを聞かんとするのであるからして、斯くは道理をつけて云ふを、聞ぬて重滋は暫時思案の小首を傾けてゐたが、聴て打ち 點きつ。

「只今の石田殿のお言葉は、一應道理のやうに存せられまするが、併しながら、木村常陸は力を籠めて言葉を改ためる。

「何んと……然らば木村殿には、三成の言葉が道理に叶はぬ儀と云はるゝ……イヤ思召さるゝので御座るかなと、少しく色を爲すと、如何にもと常陸は打ち 點ひて、二尺ほど前へ進んだが、武勇にかけては兎も角も、其の才智にかけては、遙かに三成の右に出る人物であるから、三成の色を變た位ぬのことに頓と驚かない、ところへ持つて来て、已に十分秀次の身に就いての成算を定めたからして。」

「石田殿の御道理 一應は御尤もに御座りますれども、我が君が太閤殿下に

直々御對面の儀、願ひ出でられて、太閤殿下の御得心の參らせらるゝやう、御申開きいたさるゝと、仰せらるゝのでは御座りませぬか、左るに御名代とは申し上げるものゝ、此方は關白殿下、又た太閤殿下に對し奉つては、叔父甥の問柄、殊に義理ある御親子の問柄で御座りまする、其れ故に御名代の御方に、申し開きあそばさるゝよりは、御親子御直々に、御對顔の上へ申し開かせらるゝ方、却つてよろしかるべくかと存せられまする、其れ故に石田殿折角のお言葉では御座りませぬども、此の處にて申し開きの儀は、御中止あそばさるゝこそ、然るべきかと存じますると、木村常陸の言葉は正に理の當然である、なれども負る嫌の三成は。

「すりや常陸殿、お身までが太閤殿下の御委任状を無視さるゝか、御無禮では御座りませぬかと、愈々顔色を變えて、言葉鋭く云ふのである。

「此は石田殿聞き棄ならぬお言葉を承はるものかな、拙者殿下の御委任状

を無視したとあつては、常陸甚だ心外の至りで御座る、右様のこと仰せられ  
まするからは、木村常陸改ためて石田殿に、お訊ね申すこと御座ると、三成の  
顔を倍度睨むやふに眺めて云ふ。

「如何様なる儀か、お伺ひいたそう、語られひ、と三成も倍度なつて云ふ  
アツヤ二人が此の場處にて、一ト争ひ生らんとする状であるので、斯と見て  
取つたる前田玄以は、先づ御兩所待たれいと云ひつゝ、其處へ進み出で、石  
田殿の御言葉も御尤もなれど、常陸どののお言葉も、至極御尤もで御座る  
拙者の考へでは、是リヤ木村どのの御意見の方が、御尤もと存じられ申す  
と云へば石田どの、或ひは御立腹かも知れ申さぬが、我々が此處にて申開き  
を承はるにも及び申さぬ、左れば關白殿下より、太閤殿下へ直々に言上いた  
さるゝやう、お願ひ申すで御座らふ、其れが宜しゆふ御座りませうと前田玄以  
が此の場の争ひを斯う云ふて沈めた。

三成は心中甚だ、面白くないが前田玄以は同じ奉行ではあるが、其の位置が  
三成よりは上だ、其れで今玄以に斯う云はれて、三成も我が、我を張る譯には  
行かぬから、然らば前田殿のお言葉に従ふで御座らう、其れが宜しゆふ御座  
りませうと、増田長盛も云ふ。

三成と常陸とは表面は兎も角も、内心に觸れてゐた、其れで、三成が此處にて  
云ひ開きを聞かうと、強情を張るのに、常陸は腹を立て、三成を一本きめ込ん  
だ、此れにて兎も角も話が一段落ついたので、此に三人は鄭寧に、秀次と木  
村とに挨拶を述べて、聚樂の邸を退ひた。

○夜陰に常陸介の微行

尤も、關白秀次が謀反を企たしてゐると云ふことは、石田三成や、増田長  
盛が睨をつけて、云ひ出した許では決してない、秀次の亂行が、殊に甚

だしいので、殺生關白と云ふ名をつけ、又た公卿方も秀次の關白には、呆れ返つて了ふて、腕白と云ふ名も隆で呼ぶやうに爲つた、其れや是れやで、天下の民心は、淀君が秀賴を生んでから、申し合せたやうに、心を秀賴に寄せ出した、ところへ持つて来て、秀次の亂行は其の極とも云ふべきほどに爲り折から今までになき、一寸と出遊するにも、所謂武裝を爲したる將士を伴れることに爲つた、此れ等が人目を惹く材料と爲つて、さてこそ關白は謀反するぞと云ふ評判が立ち初めたのである、なれど其實秀次は、行々關白職に秀賴に召し上げられるであらふとの懸念より自暴自棄と爲り、仕たいまゝの亂行には耽つてゐたが、併しながら秀吉に反きて、天下に事を起さうなど云ふ、大それた逆心は蓋し未だ抱ひて居らなしたのであつた。

左らば何故に出遊するにも武裝を施したる多くの將士を従えて行くか云ふに、此れには大ぬに理由のあるもにて、何んしろ秀吉直參の諸大將、

その他家臣の面々は、皆な秀賴に同情を寄せてゐる、又た朝廷の公卿方も心を秀賴に、十分に寄せてゐると云ふことを知つてゐる、其れで幾時何時如何なる者が現はれて、途中で自分を要撃せんも知れぬ、其の用心よりして、斯は武裝せる多くの將士を従へるのであつた。

又た諸大名に贈り物を厚ふして、歡心を買ひ、頼りと好を通じてゐたのは此れ如何にと云ふに、若も關白職を秀賴に譲ると云ふ事を云ひ出された時に、先づ暫らくお見合せなされた方が、宜しからふと、秀吉の御前體を、程よく取り繕らふて貫ふと云ふ、卑劣なる考へよりして斯は重立ちたる諸大名に厚き贈物を爲して、云はゞお世辭をつかつてゐたのであつた、然るに依つて三成や長盛の云ふごとく、行々は或ひは自暴自棄より、謀反を起すかも知れないが、併し今は謀反を企てるなぞと云ふ氣は更々なかつたのであつた。

ところが突然に三奉行が、秀吉の委任状を持つて行つて来て、反状ありとて訊

問に預かつたので、種々と押し問答の末へ、追ひ歸したが、きて其れより木村  
 常陸が首席と爲り、大評定を開きて、訊問の七ヶ條に對して、云ひ開きを爲  
 し、併せて貳心なき誓を立てることゝ一決して、其の翌日の巳の刻を合圖に  
 伏見城へ出仕して、秀次は秀吉の面前に於て、七ヶ條の云ひ開きを爲し、而し  
 て言葉巧みに、毫も反意なき由の誓を立てた。  
 流石は姻戚の間柄なり、今面前にて言葉を盡し、云ひ開きをされてみると  
 素より怒る譯にゆかず、且つ其の云ひ開きが、悉く道理に適ふてゐるので、  
 秀吉の心は忽ち打ち解け、其れ聞て予も安心した、先づ打ち寛ぎて行  
 くが可いと、折から午の刻を報じたので、秀吉は秀次を相手に酒宴を開き、而  
 して爾今品行を改めよなどと、様々なる優しい物語りがあつた。  
 案ずるより産むが易しとは、此のこと、ヤレヤレ嬉しや、此れにて安心と秀次  
 は大ぬに悦んで、未の刻半頃まで、御酒を頂戴し、喜び勇んで聚樂

の邸へ歸つたのが、彼れ是れ申の刻半、日の暮るるには最早や、一ト刻より間  
 がない、其れで伏見城の首尾が、殊の外に可かりしを祝ふとての氣にてかや、  
 直に奥御殿で相も變らぬ、二三十人の侍女を相手に、酒宴を張り成の刻半頃  
 に秀次太く酔ふたるより、其のまゝ寢室へ入つて横に爲つた、時しも知らず  
 亥の刻の鐘、それを聞きつゝ心地よふ眠に就いたのであつた。  
 廣き寢室に灯と云ふは、丸行燈一つのみなれば、ボンヤリと薄暗ぬ、酒の  
 酔と安心なしたる心の休りにてか、秀次は何んにも知らずに、スヤスヤ  
 と他愛もなく眠つてゐる、ゴーンと最も物淋しゆふ微かに聞ゆる鐘の音は、京  
 の町の何處かの寺にて、突き出だせし子の刻とみゆる。  
 時しも、秀次の寢室の屏風の外へ、靜々と進み寄つた一人の女、是れぞ別人  
 ならず、今秀次の寵遇を殊に辱なふしてゐる、彼の雛鶴である。  
 御前様……御前様と、鈴のやうなる優しの聲にて、二三度呼んだ、なれど聞ゆ

るものは極めて低き肝の聲のみであるので、マア能ふ寝しなつてゐらせられることゝ、獨言を云ひながら、屏風の内へ進み入り、枕頭に寄り添ふて、御前様……御前様と呼ばはつたが、尙ほ答がないので、肩口に手をかけて、御前様お目覺されて下さりませと揺り起した。

漸く眠より覺たる秀次が、信度目を開いて視れば、雛鶴が枕頭に侍へつてゐるので、太く怪みながら。

「其方は雛鶴ではないか、今時分何に用あつて、此れへ参り、予の眠を覺せしかと、秀次は熟睡の夢を破られたので、寝たまゝでムツとして云ふ。

「お夢を破りましたる段は、幾重にも恐れ入り奉つて御座りまするが、只今木村常陸介様御出仕に相成り、御前様にお目通りいたされたいとの御誼に御座りまするので、御酒お過しあそばされ、能ふ寝しなつてゐらせられまするが、と申し上げましたるところ、差支ぬ起し呉りやれとの御意に御座りまし

たるゆえ、失禮ながら、お起し申し上げ奉りましたのでと云ふ。

「何んと云ふ、今時分常陸が出仕いたせしとか、ハテ合點のゆかぬと、關白秀次起き直はつて、大胡座をかゐた。

「月のお溜に控へさせられて御座りまするが、如何取り計ふて宜しゆ御座りませうやと、雛鶴は改たまつて訊ねると、秀次は唯だモウ呆然として、思案に暮れてゐるのみであつたが、漸くにしてモウ何時じやと聞く。

「モウ彼れ是れ子の刻半に相成るで御座りませうか……

「スリヤ、モウ間もなく丑満でないか……斯る深夜に、常陸の出仕……起してまで予に會ひたいとは、ハテ心得ぬこと、さては何にか變事の生ぜしか、然らば會ふほどに、予が居間へ案内いたせと、此れより奥向の侍女等は叩き起されて、火を運ぶ褥を出す、イヤハヤ大騒動、其の中に木村常陸は居間へ通る間もなく秀次は衣服を改ためて、其れへ出て来る。

此の時に木村常陸は女の輿に乗りて、聚樂の邸へ忍び込んだのであつた、此れは自分が深夜に、聚樂の邸へ忍び行くと云ふことを、毫も人に悟らしめぬやうに爲さんとの、厚き注意である、左れば常陸は素より、非常なる秘密の相談を爲さんが爲めに來たのであることは、云ふまでもない、其れゆへに當直の近臣には、取次をいたさせずに、殊更に侍女の手を経て、嬖妾羅鶴を呼び起さしめ、而して秀次を起させたのであつた。

『御安眠の夢を破り申し、失禮とは存じましたれども、火急に御相談いたされば爲らぬ大事あり、其れに依り斯は推參仕り申した、先づお人拂ひを願ひとふ存ずると重き語調にて云ふ。

秀次も深き仔細のあることゝ、十分に承知してゐたからして、其方達は居間へ下つて控えぬると、秀次の云ふ傍より、常陸もお居間へ下つて御遠慮いたし居られひ、用事のある其の節には、身許其方達を呼ぶほどにと云はれて、一同は

心得まゝして御座りますると、其のまゝ引き退る、其の後姿を見送つた木村常陸は、其れより靜かに進み出で、御前と重く云ふ言葉の中には、殺氣が含まれてゐるので、秀次はいよく訝かりながら。

『お身如何様な大事件の生じてか、強う氣ならぬ、疾く聞かされよと云ひつゝ、傍に在つた煎茶を飲む、常陸も亦た煎茶に咽喉を濕ほして、先づ精神を沈着けるのであつた。

『大閣殿下の御首尾、如何で御座りましたか、先づ此の儀、お伺ひいたしとふ御座りまする、秀次は點きながら。

『至極の御機嫌にて、お疑ひ全然と晴れ、午の刻過ぎより、末の刻過ぎまで御酒頂戴いたし、強う酔ふて戻つたじやわい、御前體右の如く察するに及ばざりしに依り取り急ぎ、其方の耳へ入るるにも及ばず、明日出仕いたせし其の節に、委しゆふ物語らふと存じて居つたじや。



「オ、……左様で御座りましたかと、木村重滋一寸點ひて其のまゝ思案に暮れてゐる。

案ずるより生むが易しとは、常陸この事じやわい、左れば先づ安心いたし呉れよと、元氣よく云ふて、時にお身が此の深夜に、女の輿に乗つて忍んで來たと云ふ、其の仔細、サ、早う聞かして呉れ、伏見の首尾はよかりしかど、お身の忍びは心にかゝるじや……」

○木村常陸介秀次の爲めに心血を絞る

更け渡る聚樂の奥御殿、森閑として、宛然寂莫の郷に在るがごとく、時より聞ゆるものは、お庭の千草に秋は來にけりと、鈴虫、松虫などが優しの聲もて、雄虫を呼ぶ、其れが音楽のやうに響くのである。

「我が君に於せられては、如何思召さるるかは存じ申されども、此の度の大閣

殿下の御詮議は、全く石田三成と、増田長盛とが、淀君の歡心を得んが爲めに、我が君の事を悪しさまに申し出でたる儀に御座りますが、我が君には何んと思召されまするで御座りまするか。

「ウム……と、云はれてみると、成るほど思ふ節もあるじや……ウム……シテ見ると、石田三成に増田長盛の兩人は、予の敵じやのう……なれど謀反なぞを、起す氣の毛頭なきことは、天地神明の御照覽あるに依り、今日伏見に於て、云ひ聞きを御嘉納あそばされ直ちにお疑も晴れて、殊の外なる上首尾、左ればにや御酒まで賜り、至極の満足にて引き取つたのであるから、最早や案じるにも及ぶまぬかと、考へられるがと、云ふ秀次の言葉を聞き終りたる常陸介重滋は、ニツコと笑みつゝ靜かに打ち點きて、言葉に一段の力を入れ。

「今日伏見の御首尾よろしかりしより、直に御安堵あつて、其の様に仰せら

れ申す、是れ大なる御誤りかと失禮ながら存じ申すので御座る、左ればこそ重滋斯かる夜陰に、殊に女の輿に乗りて、参殿つかまつたので御座りますると云ふて、秀次の顔をキツと見上げる。

「伏見の首尾よかりしが故に安堵いたせしに、其れが却つて誤りとは、異なる言葉、その仔細はと、秀次不審顔にて訊ぬる。

「勝て兜の緒をぬめよとは、斯様な場合を申したので御座りまするぞよ、とのみ申し上げましたのでは、御合點なまわりませぬで御座りませうが、石田三成、増田長盛の兩人が、此のままにては決して、引き込みはいたしますまぬかと存じられまする、其の仔細と申しまするは、彼等兩人は淀君の心を歡ばせ申し、我が君を退けたてまつて、秀頼殿に關白職を襲せ申し而して行々は自分達の、榮達を圖らんとする考えにて、太閤殿下へ讒言いたしたので御座りまする、其れ故に又た候や奸智に長たる彼等は、太閤殿下の信任を

得てゐるを肩に着て、倭辨を振ひ讒言いたすに相違は御座りませぬ、左れば兎ても此の分にては、無事に納まりますまぬかと存せられまする、今日は太閤殿下の御機嫌、直りしと雖ども、是れ一旦のことにして、宛然風止みて一時火の鎮まりしに異ならず、風又た生れば、忽ちに燃え上り申す、加之ならず淀殿が秀頼殿に關白職をお襲せあそばされたきは、是れ申すまでもなき人情で御座りまする、シテ我が君にも、篤と御承知あそばされて居らるる通り、淀殿は太閤殿下の、天にも地にも代え難きお氣に入の御方、内には淀君あり、外には石田増田の兩人が、共々に倭辨を振ひて、殿下に燃つけ申せば、我が君の御身上、如何に安泰ならんと欲するも、得べき筈や御座りませうか、我が君この儀篤と、御思案下さるやう、願ひとう存じ申すと、名智の重滋が此の言葉に、成ほどと秀次合點したから、思はず知らず愕然と驚いたので、俄かに顔の色が變つて、眼の光が涼しく冴えた。

『テ御座りませうがな、御合點な参りまして御座りまするか。重滋の押す念を聞きつゝ、秀次は、ホー……と太き溜息を吐き。』

『如何にも左様じや、善き事を聞かせて呉りやれた、お身ならでは、斯様なる考えの早々に浮ぶものではないと云つた。』

『此の事御合點なまゐりましたら、我が君某の言上いたすこと、先づ恐れながら十分に御會得のほど願ひ上げたてまつりますると云ひつゝ、木村重滋は秀次の傍近くへ進み寄りて、言葉を潜めながら。』

『我が君には、關白職の御位を、お去りめそばすことは、好ませられぬで御座りまするか、聞く言葉は低けれども、力は十分に籠つてゐる。』

『予が關白職を止むる位なれば、昨年の春よりお身が、度々の意見もありたることゆゑ、疾くに止めて隠居いたす、なれどお身の意見を用ひざりしは、全く以つて今暫し止めともなきゆゑなりと、云ふを皆まで聞かず。』

『スリヤ何うあつても、關白職を思ひ切る、こと出来ぬと、仰せられまするの御座りまするなど、重滋の押す念を打ち消すこと共に、如何にもと點くの重滋は、ツツと其のまゝ秀次の顔を、無言で眺める、秀次も亦た木村の顔を、無言で眺めて居られたが、何に思はれてか。』

『お身は予に關白職を止めぬと勧めやるのか……』

『イヤ……無理にお勧めいたすと申す次第では御座りませぬが、併し御辭職あそばしまする方が、御身上却つて御安心かと存じられまする、なれど此れは、重滋が一人の考え、強てお勧めはいたしませぬが、御辭職のそばす思召しが御座りませれば、其の様に謀を廻らさればなりませぬに依り、一應御念をお押し申たので御座りまする、木村重滋不肖といへども、忠君の二字は、忘却いたし居りませぬ、一旦我が君のお傍近く御奉公申し上げましたる上は、身軀こそ我が物なれど、生命は正しく我が君の物、左れば一命を勿論棄て、我が君

の御事には力を盡す考へに御座りまする、故に御辭職の儀無理からは、決してお勧め申し上げませぬ。

『其の一言、秀次強う過分に存ずる、予が身上の不徳は兎も角も、此の折から關白職を御辭退申しては却つて太閤のお疑ひ如何あらむかと存せらるるに依り意地からにても辭退いたすは、予の本意でない、重滋察して呉りやれと秀次は言葉をもどよませて云ふ。』

『イヤ、御尤もに御座りまする、就いては我が君には、御身上を餘程大切になされませぬと、關白職を取り上げらるるのみならず、お身軀が危ふかるべくかと存せられますると、重滋の双の眼には、時ならぬ涙の露がたゞいふたのである。』

『何に予の生命にかかわるとな、秀次顔色を變て太く打ち驚く。』

『其は申すまでも御座りませぬ、淀殿の御辨舌、石田増田の毒舌には、如何な

ることが御座りませうとも、敵對いたされませぬに依り、太閤殿下の御機嫌打ち寛ろぎたればとて、決して御安堵は相成りませぬ、思ふに日もなく石田、増田の兩人が、淀殿と力を合せて讒訴いたさるるに相違は御座りませぬ、左れば我が君のお悦びは、下々で申す所謂ぬか喜びに御座りまする、其れ故に我が君に於せられては、此の儀篤と御忠案あそばされば相成りませぬぞと云ふ、重滋の眼は涼しくも力しく光つてゐた。

『ザーム……と秀次は太き溜息を漏しながら、無言のまま、深き思案に暮れてゐたが、稍あつて如何にも左様云はるれば、其れに相違ないが、然らば如何様なことになしたしたら宜しきかな、お身思ふ所存があらば、教えて呉りやれぬかと秀次の言葉は、幾分か震えて聞えるのであつた。』

重滋は靜かに打ち黙きつゝ、素より考ふることの御座りまするに依り、斯くは夜陰にお忍びいたし申したので御座りますが、第一に先づ確とお伺ひ

申し上げたきは、我が君には、關白職を御辭退あそばします思召しは飽までも御座りませぬか、お返事を承はりとお座りませぬ。

斯く云ふて重茲は昵と秀次の顔を眺める、秀次は關白職を止むること飽くまでも好まぬが、併し止めれば予の生命にかかるとの今のお身が道理、なれどもムザく讒者の言を怖れて、誰も止めよと云はぬ關白職を、我れより止め、未だ東西さへも分らぬ葉殿(秀頼のこと)に譲ると云ふは、實に心外千萬じや、察して呉れひ重茲と、秀次の言葉に……

『イヤ御尤もで御座りまする、然らば先づ斯様にあそばさるるが、差し當つての御上策かと存せられますると、重茲は更に秀次の傍へ進み寄つて、飽までも四方に心を配りながら、何にやらむ秘々と物語るのであつた。

聞き終りたる秀次は、俄かに元氣づきて、成るほど天晴れの妙計……ウム……然らば徳川殿の子息をば……と云ふを重茲は打ち消して。

『壁に耳あり蟻が堤を崩すとか申す事の御座りますれば、御合點まれば其れにて十分萬事は拙者にお任せなされど、其れより主従は尙も密議に時を移す中に、夜は早やホノホノと明け初めてか、此奥殿は暗けれども、お庭に轉ずる雀の聲が、最も喧びすしゆふ聞こえてる。

『ガ……我が君、最早や夜明と相見へまする、然らば拙者は人目に觸れぬその中に、一ト先づ歸邸いたし、身體を休めて巳の刻過ぎ、改ためて伺候いたしますれば、我が君にも先づ暫らく御休息あそばされませ。

『然らば常陸、呉々も頼んだぞよ……及ばずながら重茲一身を嗜して、悪ゆふは取り計らひ申さぬ、所存に御座りますると、此に重茲は御前を下り、待せ置きたる女の乗物に乗り、窈かに聚樂の邸を立ち出でたが、此の時は漸く東の白んだばかりにて、夜は未だ全く明け渡つてはぬなかつた。

木村常陸介重茲を乗せたる女の輿が、聚樂の邸を出で、二丁ほど行き

過ぎたる時しも、覆面の二人の武家が、片脇の松並木の中より、現はれ出で、互ひに何にやら黙つきつゝ、其處へ立ち止まり、急ぎ足にて昇ぎ行く輿を信と打ち眺めながら。

「お身合點ゆかれたかと、一人が云ふと、如何にもと云はんばかりに黙つきて、輿こそ女物なれど中なる主は、確かに男……東雲空の未だ薄暗さなれど輿の垂間より内なる主の横顔を、木村殿と見の参らせたが、お身は如何に……ウム……拙者も同感で御座ると云ひながら、覆面取つて互ひに顔を見合せつゝ、ニタリと涼しく笑ふた。

○伏見城内の大激論

松並木より現はれ出でたる覆面の怪しの武士は何に者か、是れぞ石田三成が秀次の云ひ譯たちて、太閤の機嫌の直りしを知り、更に聚樂の容子を探らんと

執念深くも考へて、秀次の聚樂へ歸らると共に、心利きたる家臣を派せて聚樂の附近を其れとなふ警戒せしめて置いたのであつた。

二人は今しも木村常陸が女の乗物に乗つて、聚樂の邸より立ち歸つたのを知つて、ハテ合點のゆかぬこと、時もあらふに此の未明に、而も女の輿に乗つて、聚樂より出るとは怪しいぞ怪しいぞと、其のまゝ一城を陥れたらむが如き元氣にて韋駄天走りに石田の邸へ馳せ走つて、一部の容子を三成に告げたから、三成も亦た大ぬに喜び、早々に出仕の用意を整えて、伏見の城へ入つたのが、辰の刻頃であつた。

石田三成は伏見へ赴くに先だつて、使を増田長盛と前田玄以の邸へ走らせ取り急ぎ御相談いたし度きことあらば、即刻伏見の城へ御出仕下されたしと云ひ送つたのであつた。

「石田様、大層お早くよりの御出仕に御座りますると、今しも廣き桐の間の

溜に、只一人悠然と控へてゐた三成に挨拶なしつゝ、茶坊主は茶を侷める、三成其れを受取つて靜かに啜りながら。

「殿下には未だお目覺でないかなと、問はれて坊主は其れへ兩手を突き、先刻お目覺あそばされましたかのやうに察し奉りまする、御出仕の趣きお奥の御方まで、言上いたしまするで御座りませうか。」

「イヤ未だ可い……今に前田殿、増田殿御出仕あらふほどに、其の上のことじやと、三成は獨で頼りと思案の小首を傾むけてゐる。

時しも櫓にて巳の刻を報する太鼓が響ひた、アリヤ巳の刻なるに、方々何にをいたし居らるるかなと、三成が不審がつて居るところへ、靜々と入つて來たは増田長盛である。

「石田殿、お待ちどふで御座りましたなと、會釋して對坐に座を構へ、シテ火急に相談いたすことあるとのお使者の御口上で御座つたが、如何様なる儀にて

御座つたか、先づ其の次第承はるで御座らふ。

「ウム……實は斯々斯様なる儀の御座つてと、木村常陸が未明に女の輿に乗つて聚樂の第より出たる、一部始終の容子を物語りて、増田どのお身は此のこと、何んと考へられ申すかなと改ためて訊ぬる。

ハテナと、長盛思案の小首を傾むけてゐたが、稍あつて木村常陸が未明に女の輿に乗つて聚樂より立ち歸つたとは、此れ夜中に何にか秘密の相談を、關白殿致されたに相違御座らぬ、殊に男子の乗るべき物ならぬ、女の輿に乗りてとは、是れ姿を人に悟られざらんが爲なり、兎にも角にも打ち棄て置れざる儀に御座りまするな、シテお身この事、何ふ考えられたかなと、今度は長盛が訊れる。

「拙者もお身と同様の、差し當つての思案で御座るじやが、此の際打ち棄て置れざることなれば、一應お身等と相談の上へ、殿下のお耳へ入れ、改ためてお

許しを得て、木村常陸を嚴重に取り調べ見むと考へ、さてこそ使者をお差し立ていたしたので御座る。

『成るほど、其れ御尤も、然らば殿下のお許しを乞ひ、早速嚴重に常陸を取り調ふるで御座らふと云ふてゐる時しも、前田様御出仕に御座りますると、茶坊主は案内する、二人は席を譲つて玄以に挨拶する。

玄以も亦た早速出仕いたすべきのところ、俄かのこととて、仕度到手間取り方々を強うお待たせ申して、お氣の毒で御座つたと會釋して、更に火急の御相談と、お使者の口上で御座つたが、如何様なることの生りし儀で御座るか、云ひつゝ坊主の運べる茶に咽喉を濕しながら、二人の顔を眺める。

實は斯々斯様な次第でと、石田三成と増田長盛の兩人が、交々に云ふ、其の容子を聞き終つて、前田玄以は不審の眉を顰めつゝ、

『すりや今朝の未明に木村常陸が、女の輿に乗りて聚樂より出でたるに依

り、必定夜陰に秘密相談を爲せしに相違なし、殿下に言上して常陸を嚴しく吟味なさんと、云はるるので御座るかな。

『如何にも左様、昨日關白殿、太閤殿下の御前に於て、七ヶ條の云ひ開きをあそばされ、且つ又た誓書を差し出されたに依り、殿下の御機嫌直り、お身も御存じの通り強う打ち寛ぎあそばされた、左れば關白殿には最早や御安心にてゐらせられれば相成らぬ筈、然るに其の夜直ちに木村常陸を夜陰に召して御協議あそばさると云ふは、此れ深き思召のあつてに相違は御座らぬ、左ればこそ殿下の聽許を得て、嚴重に常陸を取り調べんと存するので御座る、其故に先づ下相談いたし度と考へ、御足勞を煩はしたる儀に御座りますると三成は云ふ。

『成るほど、お身のお言葉一應合點な参り申した、又た下相談なしたる上にて殿下のお耳へ入れんとの御念のほども、十分に會得いたした、然らば拙者の



意見を聊か述ぶるで御座らふと云ふ、支以の言葉には太く力が籠つてゐたのであつた。

『然らばお身は此のこと、殿下のお耳へ入れ、木村常陸を嚴重に取り調ぶること、御不服だと云はるるので御座るかなと、三成は長盛と互ひに顔を見合せつと倍と爲つて云ふ、其の顔を支以も亦た倍度眺めて。』

『イヤ不服だとは申しませぬ、先づ拙者のお訊ね申すことに、お返事を願ひたい、東雲頃には木村常陸が女の輿に乗つて、聚樂の第より立ち歸つたと云ふ、其の容子をお身の家臣が認めたと、只今仰せられたが、白々明にお身の家臣が、何に用の御座つて聚樂の附近へ行かれたか、又た女の輿の内が木村常陸と云ふことを、何うして承知されたか、兎も角も大切なる詮議に御座れば、先づ其の仔細な承はりたい。』

入らざる詮議だてと三成内心に太く不快を感じたれど、左あらぬ體にて、如何にも御尤もなるお言葉、然らば其の仔細申し上げむ。

『關白殿、太閤殿下の御機嫌は直りたれども、謀反を企てたと云ふ嫌疑を不満に思召されて、其の……申さば不快晴しに、何にか御分別を改めていたさればすまじかと斯様に存じられ申したに依り、念の爲めに昨夜より、聚樂の附近へ心利きたる家臣を忍ばせて置いたので御座る、ところが拙者の推測に違はず、未明に聚樂より女の輿が出て申した、白晝なれば怪しむに足られど未明に女の輿が出るとは、合點ゆかすと家臣は、其のまゝ松並木に身を潜め輿の容子を見張いたるところ、垂の隙間よりチラリとへ見し横顔は、木村常陸で御座つたゆへ、さてはと心得て早速拙者の耳へ入れたので御座る、此の儀御合點なまゐりまして御座りまするか。』

『其れでは、關白殿が太閤殿下の御前體は、事なふ濟んだが、併し謀反を企だて居るなぞと云ふ嫌疑を掛けられたのが面白くないとあつて、又た何にか事

を企まんも知れぬに依り、聚樂の附近へ忍びの者を派せて、其れとなふ容子を探らせ居つたと云はれるので御座るな。

『如何にも……ウム、仲々の御熱心恐れ入つて御座る、アハ、……と前田玄以は嘲けるやうに笑ひながら。』

『其れにて輿の容子は會得いたし申したが、併し木村常陸が夜陰に、關白殿と密議を凝されたと申することを、お身は如何いたして御存じか……』

『ナント……イヤサ、石田殿、聚樂の奥深くへまで、忍びの家臣を遣はし置かれたか。此の儀確とお聞かせ下され、大事の上にも大事を取らねばならぬ儀で御座ればと、玄以の言葉は強う殿しい。』

此の訊れには、流石の石田三成もグーの音が出ぬ、なれど左る者なり、カラカラと笑ひながら、玄以の顔を倍度打ち眺めて。』

『前田殿、異なお言葉を承はるものかな、三成如何に心を八方に配るとい

へども、聚樂の奥深くまで家臣を忍ばすと云ふことの出来申うそぞや、知れ切つたことをお訊れなさるは、お身大閣殿下に反むきて、常陸を庇ふ御心底かつと、三成兩眼に血を迸らせて、斯んな過劇なことを云ふ。』

『石田殿、過言で御座らふ控へ召れツ……不肖といへども奉行の首席を承はつて居る前田玄以、憚かりながらお身の如き邪心は、毛頭持ち申さぬ、控へ召されツ、作法を存せられぬにも程こそあれと、剛直至廉の前田法印玄以は、斯く云ふてハツたと三成の顔を睨みつける、傍にぬた増田長盛は、玄以坊主餘計なことを云ふと、長盛も三成と同腹なれば、斯とは云はれど心の中に、斯と思ひてかキツと、前田の顔を縮視てゐる、邪心を持つてゐると真相より云はれて三成は火のやうに怒り出した。』

『拙者が邪心を有つてゐるとは、聞き棄てならぬお言葉、其の仔細先つ承はらふ、證據なくては云はれまぬ、サア聞かうと、三成今は喧嘩面なり。』

「木村常陸と關白殿とは、深き主従の間柄、假し夜陰に何事か相談なされ  
たればとて、お咎め申すことは毛頭御座らぬ、又た秘密の相談をされたやら、  
其れとも太閤殿下の御機嫌直りしを喜びて、更たくるまで酒宴を張り居られ  
たやら、其れも知れ申さぬ、且つ又た其の女の輿の中が、果して木村常陸で  
あつたか、白々明に遠見隠れに垂の隙より横顔を見たと云ふことなれば、此  
れとても確とは解らず、左りに關白殿と常陸とが、深夜に密議を凝して何事  
をか企てんとするにはあらざるかと邪推なし、殿しく吟味をいたされんなど  
は、此れ正しき心を有る者の、夢にも推量し能はぬことで御座る、左りに  
依つてお身が邪心を有るゝと申しだが間違で居りまするか、イヤサ立派な證據  
で御座らふがな、而のみならず斯る當推量を以て、太閤殿下に言上し、お許  
しを得て木村常陸を吟味なし、秘密相談なぞとは思ひも寄らぬこと、更たくる  
まで殿下の御機嫌直りし御喜びの、御酒戴きぬたりとか、又た聚樂にて

夜を明したる覺なし、女の輿の主は誰なるか存せれども、拙者は毛頭覺  
なし、ハテ迷惑至極、何に證據ばしあつて右様の御詮議あそばさるゝかと云は  
れたら、お身は何んと挨拶いたさるゝか、サア此の儀如何に……其の様な、お  
心掛にて奉行の大役が、勤まらふと思召さるゝか、御所存あらば承はらふ……  
石田殿如何で御座るかな、道理に叶ふた立以の言葉に、石田三成返す言葉なく  
サア其の儀は……と云ひたるのみにて、後は無言、火のやうに紅くしてゐた顔  
を一層に紅くしたのは、流石に怒の度を高めたのではなくして、心に恥ら  
ふてあらう。

『お身のやうに、理屈責にさるれば其れも左様……なれど此の際此の時、萬事  
に心を配るが天下のお爲かと存ずる、増田どの左様では御座らぬかなと、石  
田三成苦しき負惜味を云ふ、長盛は前田の威勢と道理とに荒膽をへしがれて  
か、無言にて打ち点づくのみ、

「此の際此の時天下のお爲なればと云はるゝ眞お身の心なれば、動かすべからざる證據を先づ集められひ、然る上にて御吟味あるこそ、御奉公の道ならむ、證據集まりたらばお手敷ながら、お知らせ下され、其の時には改ためて篇と御相談申さむ、左れば只今のところ、拙者此の場に居るも何んの益もなし、且つ邸に少しく執るべき所用も御座れば、失禮ながらお先へ御免蒙むり申す増田殿にも先づ御緩り——と、苦き言葉を遺して前田支以は、悠然と立ち上り廊下へ來ると、斯と見たる坊主は、前田支以様お下りッ……跡に二人は顔見合せながら、前田には關係なく、この事を殿下のお耳へ入れやうでは御座らぬかと、飽までも三成は云ふ。

「お許を願ふて常陸を吟味することは、先づ見合せ、女の輿に乗りて聚樂より歸りしと云ふことだけ、お耳へお入れ申し置くで御座らうと、長盛は支以の理の當然に服して斯は云ふ。

折から櫓に響く太鼓の音は正午である、オ、……モウ午かと、二人が庭を眺むると、細い雨が幾時の間にやら糸のやうに落ちてゐた。

○秀吉の心大に動く

「何んと申す、木村常陸介重滋が、女の輿に乗つて未明に聚樂の第を立ち出でたとな、ウーム……ハテ心得ぬことじやな、其方達何んと思案いたすかなと、今年の酒を濟ませて、眼の縁をホンノリと櫻色にし、女が運ぶ宇治の一品を啜りながら、秀吉は石田と増田の告げ事に耳を傾ける。

「其の仔細は素より存じませれど、乗るべき物もあらふに、女の物に乗り、而も東雲告る鳥の聲を聞きつゝ、聚樂を出づるとは、何れにしても正しきことにはあらずと存せられましたに依り、兎も角もお耳にまでお入れ申し置きますると、三成は言葉巧みに言上する。

「合點のゆかぬことなれども、兎も角も聞いて置こうと、其れより秀吉は先づ打ち寛ぎて物語りせいと云つて、二人に茶を下される。折から近習の一人は、三の間まで進み出て、殿下へ言上つかまつりますると云ふ、其の聲ての容子が、何んとなき尋常ならざるに、秀吉先づ不審を抱きながら、何んじやと訊ぬる。

「徳川大老の御嗣子、御出仕にて關白殿下の御事に就き、直々御前へ何事か、御意得たしと斯様に仰せあそばされて、御座りまする。

「ナニ……徳川の子息が、秀次の事に就いて予に……ハテ心得ぬ、何には兎もあれ直に此れへ通し申せ……近習は其のまゝ立つて行く。

「心得ぬことじやのう……如何にも合點まぬられませぬ儀に御座りますると、石田、増田の兩人は共々に席を譲つて控えてゐる。

天正十九年の秋に、秀吉が五人の大老を置ひた、其の時に徳川家康は、前田

利家等と共に大老を命ぜられて、今では五大老の首班にぬた、其れ故に城中にては徳川家康のことを、徳川大老と呼んでゐる、而して其の嗣子と云ふたは、即ち秀忠のことであるのである。

「秀忠はこの時に年は十七の、花なれば半開の蕾、人の未來はさて分らぬものとは云へ、終に江戸二代の將軍職に登つた方だけあつて、元服したばかりの若殿原なれど、旌檀は香しき嫩葉の香り、何處となふ床しゆふ見えてゐるは、さても争そはれぬもの。

靜かに二の間へ進み入つて、ピタリと坐り、兩手を突きたる秀忠の顔を、優しゆふ眺めて秀吉はニッコと笑みつゝ。

「和子、何にやら爺に話したいことあるとかや、サ、遠慮なふ云はれひ、聞かうわひ、秀吉と家康とは姻戚の間柄であると云ふのは秀吉の妹が、家康の室と爲つてゐるからである、其れで和子と呼び、又た自分のことを爺と云ふて

ぬる。

「今朝聚樂より私へ、直々お使者が御座りまして、朝廷へ参内せよとのこと、突然の儀で御座りまするので、如何なる次第かと實は怪みながらも、關白殿の仰せ、殊には朝廷へ参内せよとの御説、お反し申すは朝廷へ對し奉つて恐れある儀と存じ、取る物も取り敢ず、聚樂へ伺候いたしましたるところ、朝廷の御用とは、眞は口實で御座りまして……と云ひ來たるや秀吉は色を正して「何んと云はる……口實とな……聞きぬたる三成も長盛も、ハテナと思はず形を正して、借度互ひに顔と顔とを見合せたのである。」

「關白殿、私をお傍へ召され、予を妬む者ありて太閤殿下へあられもなき讒訴をいたす輩がある、其れにて強う迷惑いたし居る、就てはお身は徳川殿の嗣子、行々は天下の爲めに、一入の力を添へられればならぬ方、左れば子と共に力を天下の事に盡され呉りやれぬかと、思ひも寄らぬ突然のお言葉、而

して誓を立てられよと仰せられた揚句に、私に聚樂へ止め置き、其れとなく人質にいたされんかの如き、御容子に御座りまするので、私は太く打ち驚き、少しの隙を見て早々に馳せ歸りまして御座りました、就きましては又た候聚樂よりお使者の御座りましたときに、迷惑いたしましたるに依り、お爺様より宜しゆふ仰せられて下さりまするやう、お願ひ申し上げますと、思ひ掛なき秀忠の言葉に、三成長盛の兩人は、さてこそ讀めたり、此れぞ常陸が深夜の秘密會議に於て、注ぎ込みたる智慧ならむ、大言吐きて道理責めにせし立以も、此のことを聞かば嘸ぞかし呆るゝならむと、内心に打ち喜んだが、此れに反して太閤秀吉は烈火の如くに怒りて、秀吉公元來の赤き顔を、一層赤くされ、性得の疝癰筋は早やムラ／＼と眉間に進しつて。

「不埒至極の秀次……可し案じやるな、爺が可き様に取り計らふわひと、痛はり宥めて秀忠を歸す。」

其れより三成と長盛を相手に、相談される、何にがさて淀君の仰を胸に憂みて秀次を遂げんと思ひ居る、三成長盛の兩人は、散々に秀次や常陸のことを、半ば誇り顔にて悪ゆふ云ふてゐた。

其の翌日秀吉は、諸將を呼びて相談をされる、諸將も今は秀次の處置に不満を抱いたなれど、長盛や三成の如く、無暗矢鱈に悪ふは云はぬ、時しも毛利氏が出仕して、秀次が秀忠に誓しめんとしたと云ふ、其の誓書を携さへ來たつて、秀吉に奉つた、秀吉其れを讀んでみると、徳川氏を味方に引き入れて、關白の位置を堅ふいたそふと云ふやうな容子が、ホノ見えるので、秀吉は愈々怒つて、明日秀次に伏見へ出仕せいと云ふ、使者を立てられたが、此の秀忠を質になさんとせし事實は、常陸と秀次とが、夜陰の會合に於て決定せしものであつたなれど、徳川氏を味方に引き入れて、天下に事を擧げやうなぞと云ふ、不都合な考へはなかつたのであつた、全く三成長盛等の讒訴を防ぎ、

秀次の一身を安全ならしめむとの、木村常陸が苦心より出でたる、秀次に對する忠節なりしも、哀れ之が却つて仇なす基礎となりしとは、神ならぬ人の身の是非もなや。

○秀次高野山頭の露と消ゆ

嚴しく申し聞かせたきことあれば、明日巳の刻を期して罷り出よとの嚴命は、其の日の申の刻過に聚樂の邸へ達した。

徳川秀忠の伏見へ逃げ歸りたる、伏見の城の俄かに色めけるなど、ハテ合點のゆかぬ、何にか變事の生ぜるに相違なしと、聚樂の邸も亦た色めきて、未の刻頃より秀次直參の重臣は詰めかける、木村常陸は巳の刻頃より、勿論詰めかけてゐた。

すると果せるかな申の刻過ぎに、秀吉の許より使者が來たので、スワこそ大事

件と、奥御殿は鼎の湧が如き、大混雑大會議である。此の時に重臣の首席と云ふは、木村常陸介重滋に、秀次の愛將吉田修理とである、此の二人を筆頭に、栗野秀用、白江備後守成定、熊谷内膳亮直澄等の方々が、秀次の御前に居並びて大評議を開かれる。

『常陸殿、お身何んと思召さるゝかは存せれど、悪みても尙ほ餘りあるは、石田と増田とが淀殿と心を合せての讒誣で御座るじや、なれども事此に至りては怒るも詮なく、嘆くも益なし、就ては秀吉公のお使者の趣きに對し、右左の分別をいたされば成りませぬじやが、拙者は武將のこと、従がつて氣も荒く考も亦た粗暴に流れ易ふ御座るじや、左れば先づお身のお考え、御服藏なくお聞かせ下されれひと、秀次の愛將吉田修理は云ふ。

實にもと打ち點ひたる木村常陸は、其のまゝ暫し思案に暮れてゐたが、聽て靜かに打ち點きつゝ、然らば拙者の意見を申し述るで御座らふ。

『明日のお召に、關白殿下伏見へお越しあそばされ申したところが、思ふに秀吉公には、餘も御面會は御座りますまゐ、御面會あそばされたらば、十分に云ひ開きは御座りますれども、必らず石田増田等の奸人原が、邪魔立いたし、秀吉公假し御面會あそばされんと仰せ出ださるゝも、お見合せあれと申すに相違は御座りませぬのみならず、其のまゝ遠國へ流され給ふか、但しは伏見に於て、其のまゝ生命を召せられ給ふかの、二つで御座るならんと、重滋推察いたし申す、左るに依つて、伏見へ殿下お越しの儀は、斷然お止まりあそばさるゝ方、然るべくかと存じ申すと云ふ、木村の此の意見には、居合す一同の重臣悉く賛成の意を表した。

『如何にも御尤もなる常陸どの、御意見、修理恐れ入つて御座るじや、然らば明日の伏見行き、先づ假にお止めあそばすこととして、其れからの御分別は、如何……慮外ながら思召しお聞かせ下されひ。



「拙者の思案は、聚樂の守備を嚴にして、聚樂に在る諸將の妻子を、此のまゝ人質に取り、而して明日再び伏見より使者が参りましたら、其れを斬り殺して、當方の武威を示し、而して徐に關白殿下の罪なきことを、秀吉公へ云ひ開きいたすが、上分別かと存せられるので御座る、斯して伏見より兵來たらば潔よく戦はむ、左右する中には、諸侯方より和睦の相談ありて、無事に治らんかと存せられ申す、左すれば兎も角も關白殿下の、聚樂を立ち出で給ふことは、此の上もなき不利益かと、存せられ申すとキツパリ云ふ。

聞き終つて吉田修理は、幾度か打ち點きつ、其のまゝ何にやらむ、深き思案に暮れてゐたが、應て二膝三膝前へ繰り出で。

「常陸殿の御分別、修理強う感服いたして御座る、如何にも關白殿下の聚樂を出で給ふことは、此の上もなき御無利かと存せられ申す、就ては語に先んずれば人を制し、遅るれば人に制せらるゝと申すことが御座ると、云ひつゝ修理

は正面に直りて、居住居を正し、上段の間に在る秀次に向ひ。

「殿下只今御聽きあらせられたる通りの、常陸の意見、拙者は素より此の席に在る方々御一同も、殊に同感に御座りまする、左れば殿下の思召は如何かは存しられませぬが、何卒拙者に一萬の兵をお假し下さりませぬか、と驍將吉田修理は、全身殺氣に満されたるかの如き體で云ふ。

「ナニ……一萬の兵を借せとな……ウーム……シテお身は、其の兵を如何に使はんとさるゝか、先づ其れ聞かうわひ。

「別儀にても御座りませぬが、其の兵を率ひまして、今宵夜陰に伏見を襲ひ、石田三成増田長盛等を首にいたし、殿下の身邊を狙ふ奸人原を根だやしにいたし呉れむと存するので御座りますると、骨あり血ある痛快なる語氣であつた常陸は如何にも是れ妙と思はず叫んだ。

秀次の顔には、愁の色が俄かに浮んで、何にやら元氣なふ思案に暮れて居ら

れる、重臣の方々も修理殿のお言葉、如何にも勇ましく愉快に存じますると云ひつゝ、勇み立つのである。

「修理……と、呼ぶ秀次の語勢には、得も云はれざる凄愴なる一種の重みが含んでゐたのである。

「ハ、ツ……と吉田修理は、其れへ兩手を突く……

「折角の其方が言葉なれど、兵を率ゐて伏見を襲ふことは、予の本意でないに依つて、見合せやうと云つて、太き吐息をつかれる。

「何んと仰せらるゝ、伏見を襲ふこと好ましくないとの御意に御座りまするか

「如何にも左様じゃ、常陸と云ひお身までが、予を思ふての其言葉は強う嬉し

ゆふ思ふじや、なれども伏見へ兵を向はすることは、叔父君に對し奉つて相

濟まぬ、其れゆへに予は其の心遣は辱けなければ、思ひ止むるわい、淀殿

石田増田の奸人原には、恨あれど叔父君には恩より外に何にもない、左れ

ば伏見を襲へば、關白いよく叛反せりと、何んにも知らぬ天下の者どもの口の上が残念じや、察して呉れへ修理常陸と、云ひつゝ暗涙に咽ばるゝ容子に成るほど、常陸も修理も感心した。

「大義を重んじ給ふ殿下の御誕、恐れ入つて御座りまする、就いては殿下如何

あそばす御所存に御座りまするか、改ためて常陸は訊ねる。

「予は只今も云ふ通り、叔父君に反く心は毛頭ない、左れば御面會あるか、

又た其のまま、遠國へ遣はさるゝかは兎も角も、其れまでの予が運命として、

明日巳の刻までに、伏見へ罷り出ると云はるゝ。

この秀次の言葉に、今は争そばむやふもなく、然らば左様あそばされませと、

一同は互ひに顔と顔とを見合せて、太き溜息を漏すのみにて、暫し一同は無言

……聚樂の奥殿には、時ならぬ曇れる雲が満々てゐた。

「然らば殿下には、明日何うでも伏見へ、お越して御座りまするか、吉田修

理は更に力を籠めて、念を推すのであつた。  
 『大義には代えられぬと、秀次の言葉は簡單なる一言なれども、其の餘韻には千萬無量の、落魄と怨恨とが含まれてゐた。』

『是非もなき次第で御座りますのうと、修理は言葉を常陸介に移す、兩手を膝に置き頭を垂れて、深き思案に暮れてゐた木村常陸は、此の時に太き呼吸を長く吐きつゝ、垂れたる頭を擡げながら。』

『大義を重んぜらるゝ殿下のお心、只々恐れ入るのみなれど、今は此のお心を太閤殿下へ、申し入るゝ由もなし、残念至極の儀では御座れども、詮なきことゝ常陸介、太く感ぜしか、ハラ／＼と落涙する。』

昨日まで世は秋の初めなるも、此處ばかりは花の三月にも優りて、陽氣なりし聚樂の奥殿も、俄かに變る晩秋の如くなるぞ哀れなる。』

『お身たちが、秀次を思ふての強ひ心遣は、嬉しゆふ存する、就ては明日

伏見へ参りなば、如何に成り行くやらむも圖られぬ予の身の上へ、或は再びお身等と共に、打ち寛ぎて語らふことのならざらむも圖られず、左れば別と云ふにはあられども、最早や入相、更たくるまで打ち寛ぎて、杯かわそふわい、お身たち相手しやと、秀次は餘處ながらの別の盃を、重臣と取り交そふと考へてや、眼をしばたゞきながら斯は云はるゝ。

常陸介、今は決心の臍を固めたかして、ニタリとホ、笑みつゝ、成はほど最早や入相、方々打ち揃ひ御前にての盃事、それ宜ゆふ御座らふ、各々方も十分に召し上がられては如何に、アハ、……と常陸介は譯もなふ笑ふてみせる、而して常陸は立ち上りて、幾間かを隔てたる近習溜へ自ら赴き早速酒肴を奥殿へ運ぶ、用意を掛の衆へ傳へられひ。

間もなく日は暮る、萬燈の数は幾時より多けれども、盃の数は一同強て過せども、坐興は殊に湧す、お庭の秋色の其れにも優りて、坐敷は何にやらむ寂て

ぬる。

ドンドンと巳の刻を報す太鼓の音、その撥音は變られども、心ある者の耳には、何んとなふ物の哀を告るがごとくに聞こゆる。

『殿下、供廻りの仕度と、のひまして御座りますると、木村常陸介重滋は、秀次に言上する。』

禮服に身を改めたる秀次は、オ、左様か、然らば常陸此より参るぞよ云ふてシロリと眺めらるゝ顔には、凄愴の色か漂えてゐる。

『お留守は不肖なれども常陸介、借度承はり居りますれば、萬事にお心を注がれてと、そのまゝ、頭を垂れたが、常陸の眼には涙が濕ほふてゐた、秀次も暫時無言……聴て。』

『然らば常陸頼むぞよ、の一言を遺して、静々と大立關へ立ち出でられる、常陸を初め近習の方々は、静々と送り出でられる。』

餘り供廻り多くてはとの遠慮より、吉田修理が腕利の兵士白駒あまりを率ゐて途中を警戒なしつゝ、伏見の城へ行つた。

秀次は先づ太老溜へ通つて、休息なしつゝ、太閤殿下のお指揮あるを待つてゐると、其の中に正午となつた、心を籠めたる御馳走に、銚子さへ添へられて、最も鄭寧に晝餉を下される。

其の中に未の刻を打つた、折から此處へ静々と入つて来たは、大老毛利輝元を先に、秀次の恨かさなれる石田三成、増田長盛を始め、太閤直參の歴々方十四五人であつた。

一同は、ブラリと下座に居竝びて、兎も角も作法なれば、両手を突き頭を少く垂れて會釋をする、秀次も亦た軽く會釋をされる、すると、毛利輝元が少し

く前へニツリ出で、信度秀次の顔を眺めながら。  
 「關白殿下には、早速の御登城、養父殿下に於せられても、殊の外なる御満  
 足に御座りまする、右に付き養父殿下、早速御對顔あらせらるべき筈のこ  
 ろ、今朝ほどより御氣分優らせられず、其れが爲めに、予が意中を關白殿へ  
 傳へられよとの仰せを、臣等承はり、養父殿下の御名代として、罷り出まし  
 て御座りますると云ふ。」

「ウム……さてはい、よく常陸の推察通り、此奴等の邪覽立にて、御對顔あ  
 そばされぬなど、秀次心に思ひたれども、今は是非なきこと、其のまゝ左  
 あらぬ體にて、信度輝元の顔を覗むが如くに眺めて。」

「オ、……叔父君に於せられては、御不例とな……其れは氣ならぬこと、格別  
 の儀にてはなわさぬかな……オ、……其れは先づ重疊じや、然らば叔父君の仰  
 せと云ふを、十分に承はるであらふと、居住居を直さる。」

「御方には暫らく高野の山に、お引き籠りあつて然るべしと、斯様の御上意に  
 御座りますれば、此れより直ちに高野へ落ち延びあつて然るべし、お供廻りの  
 用意も、已に其々整ひ置きまして御座りますればと云ふ。」

此の言葉に秀次は顔色を變たが、仕方がない、けれども左様かとは何んぼうで  
 も直に、承引する譯にはゆかぬからして、無念に躍る心の動氣を、殊更に押  
 し洗めて、故意らしく凄き笑を浮へながら。

「高野の山へ引き籠れとの御意か……ウム、如何様なる次第にて、高野の山へ  
 遣はさるゝのか、その容子お身知つて、あらふから承はらう……とは云ふも  
 の、叔父君の仰せに、反く次第ではない、左れど、その容子一應承はられ  
 ば、予が心濟ぬじや、お身たち存せぬことは餘もあるまゐ。」

「如何にもと、靜かに打ち詰ひた毛利輝元は、御意に御座りまする關白殿  
 下に於せられては、昨日徳川殿の御息子を、朝廷に參勤せよとてお呼び寄せ

に相成りましたが、其の實は全く關白殿の思召しにて、秀忠殿を人質として、止め置かんとのお考えなるよし、秀忠殿太閤殿下の御前へお越しあそばされてのお物語り、二つには其の節、秀忠殿にお誓はせあそばされた御個條も、太閤殿下のお耳へ入りまして御座りまする、其れゆえに、殿下殊の外なる御立腹にて、兎も角も高野へ參つて謹慎いたし居れ、追つて沙汰するとの御誼で御座れば、左様御承知下さりまするやうにとの言葉に、オ、左様で御座つたかと、秀次は其のまゝ無限の恨を兩眼に深よはせて、三成と長盛の顔を倍度睨みつけつゝ、暫らく思案に暮れておたが、臆てウーム……と太き呼吸を吐きながら。

「叔父君の仰せとあれば是非もなく、又た御病氣にて、御面會叶はずとあれば此れ亦た據處なきことじや、云ひ度ことは山ほどあれど、今は其の詮なし、然らば高野へ行くであらふと、秀次争ふても甲斐なきことなれば、高野行を

不承無承に承諾したのであつた。

「左様なれば、是れも太閤殿下の御命令で御座りまする、高野へのお供には宮部善祥坊、堀尾吉晴の兩人承はりますれば、左様御承知下さりまするやう、又た聚樂の御留守は、取致す木村常陸介重滋に任せられ申すとの御誼に御座りますれば、是れ亦た御承知下さりまするやう、願はしゆう存じますると重れて毛利輝元は云ふ。

「オ、……其れでは吉田修理を伴れて、行く譯には參らぬのじやな、との秀次が押す念に、御意に御座りますると輝元は答える。

「何にことも世の成り行き、運命とかや云ふことならむ、是非もなしと靜かに無言で打ち點づかれる。

「右御承知あそばされまして御座りますれば、一刻も早く御支度のほど、願はしゆう存じまする、疾より仕度いたし居りますればと、石田三成の言葉である

己れツ……猪古才なる三成奴と、心中燃るが如き思ひなれども、秀次は今  
は幾許争そふも、其の甲斐なしと思ひたれば、左あらぬ體にて。

『毛利どの、何事も叔父君の仰せなれば、決して反きはいたさぬ、然らば仰せ  
通りにいたせと云はれる、此に於て秀次は木村常陸や、吉田修理の考へた通  
りに、高野へ善祥坊と吉晴とが監督の下に、其の日の中に伏見を其のまゝ立  
つて、其の夜は途中に一泊の上へ、其の翌日の夕刻に高野山に着し、青巖寺  
へ押し込めの身の上となつた、是れ皆な三成と長盛が秀吉を説きつけて、取り  
計らふたる仕打にてあつたのである。

斯と知つたる吉田修理は、伴ない來たつたる兵卒を引き伴れて、其のまゝ是非  
なく聚樂へ歸り、木村常陸に此の由を物語り、さつても據處なき次第である  
と、修理と常陸が相談に餘念なかつたが、今は主なき聚樂の、素より兵を擧げ  
うなど云ふことの出來べき筈がないからして、木村常陸が一人留守をして、

伏見よりの沙汰を待つてゐると、其の翌日伏見より、松田勝右衛門と云ふが、  
秀吉の使者として行つて來た。

常陸介重滋は、近習の武士の取次に依つて、斯くと知り、兎も角も太閤殿  
下の御使者とあつてはとて、勝右衛門を早速奥御殿に招じ、其れより重滋は  
禮服に作法を正して、而會に及んだのである。

『秀次殿此の度の行跡、重々不埒至極とあつて、高野へ執居の儀申し渡され  
て御座る、右に付き關白の官職は免ぜられて御座りまするに依り此の儀先づ  
心得置かるゝやうにと、勝右衛門殿かに云ふ。』

重滋は何んにも云はず、委細心得て御座りますると、兩手を突きて鄭重にお  
請けをする、勝右衛門其れからと、更に威儀を正し、言葉に一段の重みを持た  
せながら悠然と構へて。

『關白職は何れ秀頼殿、お襲ぎあそばさるゝ儀と存する、なれども此れは

朝廷の御聽許を得奉つた上ならでは、披露は出来申さぬ、就ては其れまで其方に聚樂の留守申し付ると、太閤殿下の御誕に御座れば、其のお積にて不都合のなきやう、確とお取締のほど申し渡しして御座りますぞ。

「左様ならば秀頼様、關白職を襲せたもふまで、拙者奴に聚樂の留守いたせよとの御誕に御座りまするか。」

「ウム……如何にも左様じや、左れば十分ともにお心を注がれてなと云はれて、重滋は其のまゝ何にやらむ、思案の小首を傾けてゐたが、稍あつて軽く打ち點きつゝ、委細心得て御座りますると御受をする。」

「太閤殿下の御誕は此れだけ、然らば重滋殿此れにて、お別れいたし申すと、松田勝右衛門は其のまゝ立ち上らんとするを。」

「勝手ながらお身にまで、少しく承はりたいことの御座りますれば、と重滋は引き止むるので、如何様なる儀で御座るか。」

「お身御承知の通り、聚樂には諸侯方の妻子も居られ申す、此の方々のお身の上は、如何御取計ひいたして宜ゆふ御座るか、参考までに承はつて置きとう御座ると問はれて、勝右衛門一寸と小首を傾けたが。」

「其の儀は、殿下は素より奉行方も、何んとも仰せられひで御座つたが、併し拙者の考え申すには、何分の御沙汰あるまで、お身に聚樂の留守を任せ申すとの御誕ありたるからは、諸侯の妻子方をも、御沙汰あるまでお身が御監督あつてこそ、然るべくかと存せられ申す、若し然らざれば、妻子方は斯くいたされひとの、お言葉添えがあつて然るべくかと存すると、此に勝右衛門は別を告げて歸つて行く。」

此に於て重滋は、重立ちたる臣下の面々と、諸侯の妻子等を大廣間へ呼び寄せ、伏見よりの使者の趣きを、委しゆふ語り聞かせた。

家臣の中には、此容子を聞いて太く怖を抱く者もあつたが、諸侯の妻子方



の中うちには、秀次ひでつぐの恣ほしいままなる此これまでの舉動ふるまいを、面白おもしろからず思おもふてゐた者ものもあつたから、秀頼ひでより殿どのが關白かんはくしよくつ職しやくに就きかれると聞きて、喜よろこぶものもあつた、其その中うちにて殊更ことさらに悲かなしく、且かつつ各自それぞれの身みの上うへを取り分わけて、案あんじてゐたのは秀次ひでつぐに厚あつく愛あいされてゐた奥殿おくでんの壁へい妾せつ連れんであつた。

其そのれより六日むいかを経へたる文祿四年七月ぶんろくねんがつの十六日にちと云いふに、石田三成いしだなり、増田長盛ますだながもり、長束正家ながつかまさいえの三奉行ぶげうは、打ち伴つりれだつて聚樂しうらくの第ていへ來きた、斯かくと知しつたる木村重きむらしげ滋よしは、さてこそ秀次ひでつぐ殿どののお身みの上うへに、凶變りうへんのありしに相違さうかなし、事ことの次第しだいに依よつては、拙者せつしやの生命いのちも危あやふぬぞと、流石まさかは聚樂しうらく第内ていの諸事しよじを、一身しんひに引ひき受うけて此これまで整理せいりして來きた、常陸介ひだらのすけだけあつて、早はやくも常々つねづより淀君よどぎみの歡か心しんを買かふことにのみ、心こころを傾かたむけてゐた、揃そろひも揃そろひし此この三奉行ぶげうが、行やつ

て來きたので、さてはと早はやくも考かんがへたが、併しかあ飽あくまでも左さあらぬ體ていにて、先まづ三奉行ぶげうを奥殿おくでんへ案内あんないさせ置おきて、自分じぶんは十分に精神せいしんを沈おち着つけな置おむとの考かんがへにてか、坊主ぼうずを呼よびて薄茶うすちやを點たさせ、其それを喫のみて悠々ゆうゆうと三奉行ぶげうに面會めんかいする。『方々かたかたには御上使ごじやうしの御役向おんやくむかき、大儀たいぎに存ぞんじ申まをすと、重滋しげよしは應膺おうように挨拶あいさつをする、此これは重滋しげよしが三奉行ぶげうを憎にくんでゐたから、其それで馬鹿ばか々々くくしくつて、鄭寧ていねいな挨拶あいさつが出でたのであつた。

『常陸殿ひだらのどのにも此度このたびは、種々いろくと心遣こころづかひ、御苦勞ごくろうの儀ぎに存ぞんじ申まをすと、三成なりは白々しらくしく云いふと、長束正家ながつかまさいえが一膝前ひざまへへ繰いり出いでよ。『常陸介殿ひだらのすけどの、今日こんにちはお身みに種々いろくと、太閤殿下たいこうでんかの仰おほせを傳つたへ度たくと存ぞんじて參まわつたので御座ござる、就つては強きつうお身みの荒膽あらざりを、へしぐことも御座ござらふなれど、其そは斯かる成行なりゆきなれば、是非ぜふもなきことよ、思おほしめ召めされて、篤とんくりと我々われの申まをすこと、お聞き取きとりのほどを願ねがひとふ御座ござるじや。

『心得て御座りまする、如何様なる御詮かは存じ申されど、拙者も常陸介重滋と、多くの人に名を知られ、又た及ばずながら關白殿下、御身邊の輔弼を承ばりたるもの、荒膽をへいぐやふなる見苦き状は、いたし申さぬ所存で御座るアハ、と三奉行を嘲けるやふに笑ふ。』

『イヤ尋常一般の物語ならば、兎も角も、事が大分に大きゆう御座る、左れば我々が婆心で、一寸とお身の耳へ入れ置くので御座るじや。』

『其の御親切は決して仇にはいたし申さぬ、先づ其の事篤と承はるで御座らふと、兎變に相違ないと合點してゐたから、平然たる者である。』

『其の後實は、御城中に於て秀次殿の、御身上に付き、種々と御詮議が御座つた、又大老方や殿下の直參の諸侯方とも、種々御相談が御座つたが方々の御意見には、多少の相違は御座つたが、併し秀次殿を、此のまゝ御覽居申し付けて置かれては、秀頼殿の行々の御爲に悪からむとの、御意見が多

數にて、終に昨日福島正明殿、御使者として高野へ行かれ申して御座ると正家が語り來たるを皆まで聞かす。

『然らば福島政則どの、昨日秀次どの、許へ、御使者として立たれたと云はれ申すか……ウーム……さては、秀次殿御自害仰せ附けられたもふたと存ぜられ申す、ア、……是非もなきことゝ、常陸介思はずホロリと落涙するのである。』

『常陸介どのには、秀次どの御傷害の儀、能ふお察しなされたなと、三成は云ふてニタリと、一種の笑を漂えだは、豫てより互ひに反目してゐた常陸介に、今ぞ思ひ知つたかと嘲けつたので、さても憎々しさの限である、常陸介はハツタと三成の顔を睨みつけつゝ。』

『其れほどのこと、確と察せいで聚樂第内の整理を、主として司ることの出来申そうぞや、三成どのには如何かは存じれど、重滋には能ふ察せられ申す、

アハ、ハ、ハ……と大聲にて笑ふ。

『如何にもお身の推察通り、秀次殿幾時までも、高野に蟄居いたされあらむには、新に關白職を襲れたる、秀頼どのをお恨みあつて、御自身脇腹の臣下等と牒し合され、如何なる變亂を天下に起されも圖られずとの、相談一決して、御氣の毒はこの上もなきことながら、御自害をお勧め申すことゝ爲り、福島正則どの檢死の使者として、昨日お越しなされて御座りましたと、増田長盛は殊勝らしく云ふ、常陸介は無言にて、ニタリニタリと笑ふてゐる。

『就ては今日限り、常陸殿には聚樂を引き拂はれて、誓願寺へ赴き、殿下より御汰汰のあるまで、謹慎あれとの御詫、何れ十九日には松田勝右衛門どの御使者に立せらるゝやに察し申したれば、此の儀御承知下されひと、正家は云ふて倍度重滋の容子を視る。

承知いたして御座る、然らば今日中に仕度いたし、誓願寺へ引き籠るで御座

らふがと、云ひ來たつて、其のまゝ無言で何にやら思案に暮れてゐたが、聽て軽く黙ひてニタリと笑みながら。

『其れでは十九日に、殿下の御沙汰を松田勝右衛門どの、承はられて誓願寺へ、お越しなされるとの儀で御座りまするか。

『如何にも左様……と、長盛はキツパリ云ふ。

『左れば重滋、秀次殿の御事に付き、申し上げ度きこと聊か御座るじやが此りや方々に申すよりは、勝右衛門どの、拙者の許へ御座るとあれば、松田殿に申すで御座らふ、シテ上使の向きは、最早や此れだけで御座るかな。

『イヤ未だ少しく御座るじや、今日より聚樂は、我々三名にて、此れも亦た御沙汰のあるまで、お預かり申す、又た御家臣その他の人々に就いての處置……此れも亦た、殿下の御沙汰を待つて、我々どもが取り計らふで御座るほどに、お身は御子息を引き伴れられて、誓願寺へ引き籠もらるれば、其れにてよろし

いので御座るじやと云ふ。  
 然らばとあつて、重滋はモウ深く決心の臍を固めたと見え、悠然と構へつゝ、  
 我れが保管しぬたる重要書類を、悉く取り揃えて、三人に渡し、其れより  
 自身の仕度を調へて、其の日の夕方に常陸介は、無念の涙を呑みつゝ長  
 子志摩介を伴れて、聚樂を後に誓願寺へ引き移つた。

○壯絶悲惨なる誓願寺

秀吉は、秀次を殺すと云ふ考へは、毛頭以てなかつたのである、然らば何  
 うする考へであつたかと云ふに、高野の山中へ押し籠めて置くと云ふだけの  
 考へであつたのだ、然るに淀君は秀次の、高野へ押し籠められたと云ふだけ  
 では、得心しない、其れは云ふまでもなく、秀次が生き長らへてゐては、秀頼  
 を恨むことが、益々強まつて来る、併し秀吉が生き永らへてゐる中は、何事

も勿論なからふけれども、何に云ふても秀吉は、六十だ、左れば最早や何時  
 この世を去られるかも知れない、其の時に秀次が、其の舊臣や殊に懇にして  
 ぬた諸大名等と、力を合せて、兵を擧るやうなことがあつては相成らずと  
 先の先までのことを考へて、何うかして今の中に、秀次を無き者にする工夫  
 はないかしらむと、石田三成と相談をした、ところが三成も淀君の意見に大賛  
 成で、宜しゆふ御座る、如何にも御尤もなるお考へ、拙者増田長盛、長東  
 正家等と相談の上へ、然るべく取り計らひ申せば、先づ以て御安堵あれと、其  
 れより三成は此の事を相談した、すると正家も長盛も、勿論異存がない、其  
 れより三人が打ち揃ふて、秀吉の御前へ出で、秀次殿を此のままにいたし置  
 かれたら、秀頼殿に後難を貽す道理で御座りますればと、言葉巧みに説きつ  
 けたので、秀吉の心が稍や動ひて、然らば其方達よきに、取り計らへとの命  
 令が下つたので、三成は遅々してゐて萬一、殿下のお志が變るやうなこと

があつては相成らむと、斯ふ考へて、其れから福島正則に此の事を物語る  
 と、元來剛氣の正則が、可し左様云ふことなら、俺が高野へ出掛けて、秀次  
 どのに殿下の命令を傳へ、御自害をお勧め申して、御首級を頂戴して戻るであ  
 らふと、福島正則大變な役向を、快く引き受けたので、石田三成は馬鹿  
 に喜び、早速この由を太閤殿下に申し出で、改ためて正則に上使の役を仰  
 せ付けられたのである。

乃で十三日に伏見を出立して、十四日に高野へ行き、此の事を秀次に傳へた  
 腹立さ悔しさ悲しさ嘆かしさは、此の上もなければ、今は籠の鳥同様な身  
 の、如何とも詮なきまま、十五日に終に自害された、正則は其の首を携さえて  
 伏見へ歸り、秀吉に献上した。

斯の如き次第にて、秀次は高野へ遣はされてより、七日経つか経ぬ中に、斯る  
 果敢なき最後を遂げられたが、此れ皆な石田三成等の奸策より出でたる次第で

ある。

秀次の一命を奪ひたる三成は、未だ此れにても飽きたらずや、秀次に厚く用ひ  
 られてゐた、有爲の人材を亡き者にしやうとした……否な亡き者にせれば、已  
 まぬと云ふ決心で、秀吉へ願ひ出た、已に秀次の一命を取りたる上は、其の家  
 臣の一命を救すと云ふ譯にもゆかぬので、三成の請ふがまゝに任せられた、テ  
 第一着に此れまで目の上の瘻とし、嫌ふてゐた木村重滋に、死を賜はさせる  
 と云ふことに爲つたのだ。

ア、如何に戦國の世の習ひとは云へ、榮枯盛衰の劇變、觀じ來たらば除るに身  
 神の棘然たるを覺へざるを得ないのである。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

\*

召させられまして御座りまするか、と、隔の唐紙靜かに押し開き、闕の外

に両手を突きたるは、此誓願寺の小坊主了然である、年は十三の未だ乳臭いれども、其の性質殊に伶俐く、見るからに優しの小童である。

『ウム……方丈は居らるゝかな……オ、……今御用はおわさぬやうじやがたとニツコと笑みて優しゆに尋ねたは、重滋である。』

『只今御観經相濟み、御居間にて御休息いたされて、御座りまする、左様か然らば身許が御意得たければ、お差支えなくばお手數ながら、此れまでお越の儀、坊、申し上げて呉りやれぬか。』

心得まして御座りますると、了然は立つて行く、その後姿を見送りながら、庭の秋景風を果敢なさそうに、重滋は眺めてゐる。

間もなく了然に褥を持せ、拂子を左右へ靜かに振りながら、入つて来たは、誓願寺の長老である。

斯と見るより重滋作法なれば褥より離れて両手を突く、長老も亦た両手を

軽く突きて、互ひに挨拶を濟ませてから。

『御休息の折から、御苦勞を御願ひ申し、恐れ入つて御座りまするが、拙者の

生命も、最早や明日限りかと存ぜられまするに依り、生ある中に一度前の關

白殿の、御位牌にお暇乞ひ申し上げとふ御座りまするに依り、御讀經願ひた

く、二つには聊か御座りまする拙者の遺言、お手數ながら能き機を見計ひ

たもふて、太閤殿下のお耳へ、お入れ下さりまするやう、願ひ申し上げた

くと存じ、御足勞を煩らはしたる儀に御座りまする。』

褥の上に悠然と座を占め、兩眼を閉ぢて重滋の云ふところを靜かに聞き終り

たる長老は、無言のまゝにて打ち黙きつ。

『了然……了然……と、突如に大きな聲を出して了然を呼ばれた、すると二間

を置きて次の間に控へてゐた了然坊は、闕の外まで行つて来て、何に御用に

御座りまするかと両手を突く。

「ウム……薄茶を持って、重滋殿にも差し上げるのじやぞ……間もなく湯加減に心を籠めたる、薄茶を運びて兩人に侷める。此の時まで尙ほも無言であつた長老は、木村殿先づ一服召し上がられと、茶を侷めて、而して自分も喫む。此れは茶にて精神を、十分に沈めやうとの考へであつたとみゆる。

『お身のお言葉、十分に會得いたし申した、秀次殿の此の度の大兎變は、愚僧察するところ、石田三成増田長盛等の入智恵ならむと存する、其の入れ智恵が、忠節無比のお身にまで及ぼし、喩へやうなきお身の迷惑、お察し申すも涙の種で御座る、なれど斯く爲り果る上からは、神佛の力を以ていたすも叶ひ申さぬ、何事も宿世の因果と、お諦らめ下されひ、秀次殿のお位牌へお暇乞の儀、愚僧承知いたして御座ると云ひ來たつて、長老はホロリと涙の雫を落すのである。

兩手を膝に置き、頭を下げて聞き終りたる木村重滋は、無限の感に打たれたるかかの如き體にて、長大息を漏しつゝ。

『恐れ入り申したる長老のお言葉、如何にも仰せの通り、關白殿の御生命を縮め申せしは、太閤殿下の思召にては全く以て之れなく、石田増田長束等が奸計より、出でたる儀に御座りまする、斯ること此の期に及び、私の口より申し上げては、愚痴に流るゝやの思召も御座りませうがと、長老と、重滋の言葉は重る、而して其の兩眼には一種の凄味と、眞紅の細き血の管とが迸しつてゐたのであつた。

『何んで愚痴など、愚僧が、アハ、ハ、ハ……お身の御遺言を承はる前に、石田三成等が奸計と云ふを聞かされひ、他日何にかの参考とも爲らふかと存せらるれば、アハ、ハ、ハ、物嗜のやうなれど、先づ……如何にも、秀次殿のお身にも重々の過失御座りまする、此れは私が只今

彼は是れと申さいでも長老は能く御存じ、其れに付き私は、如何ほど心を  
 運び、又た如何ほど御直諫申し上げたかは存せられませぬ位然るに毫も御  
 用ひなく、なわし申した、なれど三成等が申す、叛反など云ふ大それたこと  
 は、毛頭以て御座りませぬ、左りに叛反……叛反と申せば、全く石田三  
 成等が、淀君に取り入り、棄殿を（秀頼のこと）關白職に就せ申し、十分に  
 恩を被せ申し置きて、而して太閤殿下が百歳の後に、秀頼どのを頂きて、  
 天下に事を擧げんとする、考へに御座りまするぞ、其の秀次どの、高野に僧  
 となつておわしなば、何にかの妨げ、さてこそ無法にも、お命を締め申し  
 たる儀に御座りますると、先の先まで、見へ過ぎたる考へのやらには御座り  
 ますれど、斯様に存じられるので御座りますると云ふ。  
 三成が秀吉百年の後に、天下に事を擧げん野心よりして、淀君に取り入り、十  
 分秀頼に恩義を被せて置かむとするのであると云ふ、この宛然三成の腦

底へ入り込んだやうな想像は、重滋の活眼ならでは他に又たあるとも思はれぬ  
 ので、ツーム……と流石に大智識の長老も、内心に強う驚くよりは、呆れた  
 らむが如き風情であつたのであるが。  
 如何にも重滋のこの想像通り、此の時より中、三年を経たる慶長の四年に、  
 關ヶ原の大職役があつた。此れは石田三成が秀頼を擁して、事を擧げたので  
 あわよくば己れ天下を奪ひ取らんず、大陰謀であつたのである、此大陰謀  
 の基礎を、己に此の時に定めたのであつた。  
 『イヤ如何にも驚き入つたる御卓識、愚僧恐れ入つて御座る、如何にも、ト  
 云はるれば、或は左様ならむも圖られず、其れに就けても思ひやらるるは、  
 豊臣家の御行末で御座ると、長老は嘆息の大意を漏す。  
 『拙者は明日を限りの生命、左れば豊臣家の御行末は、草場の陰より見お申  
 さんも、長老には先づ確と御覽あそばされたし、アハ、……併し此れは此



の場限りの物語りで御座るじや、さて其れからお願ひ申したきは、遺言の一條で御座りますると、重滋居住居を糺す。

「去んぬる八日伏見より、秀次どのに罷り出よとの、御殿命達しましたる節に私ば伏見へお越しあそばすこと、先づ見合せられひ、お越しあそばすも太閤殿下を勧めて、石田等が御對願を妨げ申すに、相違御座るまゐ、左れば伏見へ赴かれなば、其のまゝ高野へ追るるか、左なくばお生命が危ふ御座りませう、其れ故に聚樂に止まられて諸侯の妻子を人質と爲し、守備を嚴にし、伏見より攻め來たらば、先づ盛んに戦ひあそばせ、其の中には必らず和睦が調ふに相違御座りませぬ、和睦さえたに調はゞ、お身は御安泰に御座りますと、言葉を盡してお諫め申したので御座つた。

「ウーム……と長老は點く……」

「斯様に申し上げましたるところ、イヤならぬ伏見よりの、お召に反むきて參

城いたさぬは、不孝なり不義なり、且つ又た、さては關白いよく叛反の心底にてあつたるかなど、口善惡なき者どもに、云ひ難さるるが殘念じや、其れ故に予は如何なる事のあらふとも、其方達の申すること、は一切用ひぬ聽かぬと、仰せられて、其のまゝ伏見へお越しあそばされたと申す儀に御座ります此の一條を太閤殿下へ、お傳へ下さりまして、秀次殿には、決して叛反のお心など、毛頭之れあらざりし由の、御證明を願ひたいので御座ります、叛反云々の一條、秀次殿地下に於れて、強う御無念に存じ居らるゝやう、察し奉りますればと云ふ。

この言葉に長老太く感心なし、心得て御座る、此の儀は愚僧御佛に誓つて太閤殿下へ言上いたしまするほどに、御安心下されひ、此の外に最早や何にも、申し遺さるる儀は御座りませぬかな。

「何にも御座りませぬ、此れだけ御得心置かれ下さりますれば、十分に御座り

まする、此の外には、申し遣すことは毛頭御座りませぬ。  
 『殿下への御傳言は、モウ御座るまゝとして、お身の御遺族に何にか、申し置  
 くことは御座りませぬかな、申し置くこと御座らば、何になりと承はるで御  
 座らふと、長老は重滋に太く同情を表して斯は云ふ。  
 『御親切は千萬辱なふ御座れど、毛頭以て御座りませぬ、只今申し上げ  
 た事だけ、御會得下さりませれば、千萬無量の御讀經にもイヤ増して嬉しゆふ  
 瞑目いたし申すと、重滋は殊の外なる満足の體である。  
 長老は重滋の忠節無比は、素よりのこと、文武兼備の大人物たることを、能  
 く知つてゐるから、斯る有爲の人材を、罪なきにムザムザと殺すは、甚だ好  
 ましくない、其れかあらぬか。  
 『此れは愚僧が勝手に、お身にお訊れ申すので御座るが、お身明日限りのお生  
 命と云はれたが、其はその由お達しにても御座つたのか、其れとも亦たお身の

お考へにてでも御座るかなと、顔を眺めて仔細あり氣な訊れ。  
 『イヤ何にもお達しと申しては御座りませなんだが、昨日石田等の言葉に、  
 誓願寺へ引き籠つて、兎も角も謹慎いたし居れ、何れ十九日には松田勝右衛門  
 が、改ためて御沙汰を傳へらるるほどにと、斯様に申し居つて御座りまする。  
 松田殿の御沙汰と云ふは、取も直さず拙者に、死を賜わる命令を、傳へらるる  
 と同時に、檢視の役仰せ付かつてに、相違御座りませぬ、其れ故に明日限り  
 の生命と、申し上げたので御座りまするが、此れは最早や滅太に、相違の御座  
 りませぬこと、アハハハ……と凄く笑ふ。  
 『成るほど云ひつゝ、長老は何にやらむ、深き思案に暮れてゐたが、稍あつ  
 て静かに打ち 點きつゝ、木村殿と、居住居を直しながら、了然は居るか、了  
 然と聲たかく了然を呼んで、本堂に御燈を上げて、一同に看經の仕度いたし置  
 けと命ぜられる。

「然らば此れより、秀次どの、御回向な仕るで御座らふが、併しお身未だ、死を賜はると云ふお達しのあつたと云ふでなければ、悪僧御救免の儀を、殿下へお願いいたしてみとう存するが、如何で御座るな。」

「此れはしたり長老、何に仰せられまするやら、譯もなきことを、アハハ、……其の御親切お情は、千萬辱なふ御座れども、拙者は瞑目いたすが希望で御座る、假し又た明日死を賜はると云ふ、御沙汰、萬々一接しませいでも拙者は殉死いたす所存に御座りますれば、折角のお情なれど、此の儀は平に御容赦下さりませと云ふ、その決心はキツパリ云ひし言葉に十分に溢れてゐるのであるから、長老は太く感服なしたるかの如き體にて。」

「イヤ然らば、モリ何にも申しませぬ、天晴れ見上げたる御精神、愚僧恐れ入つて御座ると、長老は殉死と云ひし一言に、太く精神を感動せしとみへ、唯だモリ感じ入つてゐるのみ、折から次の間より。」

「父上只今戻つて御座りまする、御免蒙むつても宜しゆふ御座りませうや……オ、伴か、苦しゆふない入りやと、重滋の言葉に、然らば御免蒙むりますると、挨拶して静々と入つて来たは、重滋が惣領息子の、志摩之介と呼ぶ當年十六の、女にせまほしきほどの美少年である。」

志摩之介は、父と共に前日此處へ引き籠つたのであつたが、今朝しも父が何にやらむ、認めたる一通の書面を、木村家の本家である、六角義郷の許へ、秘と持て行きて、今し戻つて来たのであつた。

「大儀であつたのう、義郷どの御在宿であつたかな。志摩之介は先づ長老に、御寧に挨拶して、其れより父に向ひ、

「參上いたしましたところ、叔父上には折あしく、豊後守(頼包のこと)様の許へ、お越しとて御不在に御座りました、其れ故に御書面は、叔母上様へ確とお手渡しいたして御座りますれば、御安心下さりませ。」

「ウーム……左様であつたか……と云いながら、重滋一寸思案したが、シテお身叔母上に何にも云はればすまぬな。

「ハイン……何にも申し上げはいたしませぬ、只だ當座時候の御挨拶のみ。

「而して御家内にお變りはなかつたかな……」

「御家内皆々様、打ち揃はれて、殊の外なる御元氣に御座りまする。

「ウム……其れ聞いて安堵いたした、予は只今長老に、關白殿の御位牌へ御回向の儀お願ひ申して居つたところじや、其れは左様と、モウ彼れ是れ未の刻じや、お身は未だ午の仕度いたされまると云へば。

「叔母様が、モウ晝に間もなきことゆえ、食事いたして行けと、強てお勧め下され、又た大阪より貰ふたる酒あれば、一口過せとの有がたき仰せ、御辭退申し上げんかとは存じ申したが、思へば此れが今世のお訣れ、殊に酒まで侷め給はるとは、餘所ながらの暇乞ひせよとの、神佛のお知らせかと、斯様に存

じ申して、有がたく頂戴いたして参りました。

「アハ、ハ、ハ……其れは先づ可かつたと、重滋は我が子の顔を眺めて、得も云はれざる一種の笑を漂えてゐた。

長老は、志摩介の此の言葉を聞きて、さては俸まで父に殉ふて死せんとの決心とみゆるな、ア、見上げたる心底、天晴れの武夫、なれど花なれば蕾の未だ綻び初ぬ稚子櫻を、ムザムザと夜半の嵐に散すかと思へば、さてもいぢらし不慰やなど、思はず涙よふ涙を、法衣の袖にて拭いつゝ、喫み残したる薄茶を喫みながら。

「然らば秀次どの、御回向取り行ふで御座らふかな、志摩どの食事済ませられたとあれば、共々に御回向をと、立ち上る、折から颯と吹き来る無情の風は桐の葉を三つ四つバサバサと落すのであつた。

○重成へ遺す金鐵の一言

白装束に、死出の作法を繕らふて、鬚の後毛一筋も亂さず、此處誓願寺の離れ座敷へ、静々と入り来たつて、ビタリと坐わりたる木村親子……上座には死を賜はるてふ、命令を傳ふべく、併せて検死の役目を仰せつかつて来た、松田勝右衛門が禮服に威儀を飾つて、嚴然と控へては居れど、親子に同情を表してにや、流石に打ち萎れてゐた。

お待ちどふで御座つたと、重滋軽く會釋しながら、勝右衛門どの、折り入つての頼み御座るが、聞き入れて呉りやるるかなと、改たまりたる重滋の言葉に勝右衛門は、點きつゝ。

「何んなりと御所存御座らば、遠慮なく仰せ聞かされひ。

「別儀にても御座られど、倅志摩介の介錯は、拙者に仰せ付け下さります

るやうにと云ふ。

「オ、其れは最と易きこと、御遠慮なふ御介錯あそばされませ……此れは早速のお聞き入れ、千萬辱なふ御座ると云ひつゝ、志摩介に向ひ。

「聞きやる通り、お身の介錯は拙者に仰せつけられた、左れば作法亂さず、立派に切腹しやと、言葉は凜々しく些のどよみなけれど、其の餘韻は腸を断ち切るばかりに聞こえる。

「左様なれば父上、お先へ御免下さりませと、流石は木村常陸介重滋の長子なり、涙一滴眼に持たず、斯く云ふて更に勝右衛門に向ひ、兩手を突きつゝ、御手数ながら確と御検死のほど、願ひ上げますると、其のまゝ居住居を直す松田勝右衛門は兩眼をしげたまきながら無言で點く。

重滋は秀次より、拜領の名刀、九寸五分の鞘を拂つて、三方に戦せ、静かに志摩介の前へ差し出すのである。

松田勝右衛門は、如何なる仔細あつてか、キヨロキヨロしてゐる、志摩介は無言にて、父の差し出す三方を我が前へ据えたる時に。

『先づ暫らく待たれ、御遺言あらば篤と承はり置くで御座らふほどにと、勝右衛門の言葉、重滋はニツコとホ、笑みて。』

『御親切なる其のお言葉、聊か遺言も御座り申した、なれど其れは昨日長老と打ち寛ぎて物語りいたし居りましたる節に、逐一申し遺して置きましたれば、何れ没後長老より、お話し御座りませう、其の節には御面倒ながら、お聞き取りのほど願はしゆ存ずる。』

『オ、左様で御座つたか、然らば最早や何にも申し遺さるる儀は、御座りませぬなど、何んと考へてか強う念を押す。』

『有がとう存じまするが、一言も……サア悴……と、志摩介の切腹を急ぐ、志摩介は式の通り水盃の土器に両手を添えんとするを、志摩殿其の様に急

がるるなど、勝右衛門は再び止める。

愈々以て合點のゆかぬ勝右衛門の舉動と、重滋は不審の眉をひそめたが、左あらぬ體にて、未だ何にか御用な御座りまするかと思れる。

『お身この期に及んで、勝右衛門餘計な詮議立いたすと、或ひは思召されんも、アノ……今日のこと、桃山へお知らせは御座らなんだかな、との思い掛な

き訊れに、重滋は思はず、志摩介と顔を見合せたが。『アハ、……何にか問はるるかと思ふたら、譯もなきことをアハ、……』

……と重滋は、續けさまに笑ふのである。『夫婦母子が一生の訣れ、顔を合す合さぬは兎も角も、互ひに云ひたい事もあり、聞きたい事もありに、何んの御通知もなさらないと、さても氣強いこ

とでは御座りませぬか、右京どの桃山の御殿に居られるに依り、其れにて、御座るか、餘計な詮議だてのやうなれども、其の言葉は極めて熱心であるの

で、常陸介は不審顔。

「知らず、知らさぬは、拙者が心底に在ることなれど、お身知らせたくも、今日拙者親子に死を賜はると云ふ御沙汰は、更に御座り申さなうだ、先刻お身より御沙汰を蒙つて、始めて知つたる儀に御座りまする、左れば知らせたくとも、知らせやうが御座り申さぬ、アハ、ハ、ハ……と笑ふてみせるもの、勝は兩人とも引き裂くばかりの思ひなり。

「成るほど、而く仰せらるれば如何にも御尤もに御座る、其れではお身は、右京どのお會ひあそばす、思召は御座りませぬか。

「イヤ會ひとふは御座らぬ、會へば女の愚痴……涙の種アハ、ハ、ハ……サア志摩、早く腹召されひと云ひつゝ、重滋は土器に水を盛る。

勝右衛門は何にやら、氣を焦りながら、嘆息をしてゐる、長老は庭を隔てたる向ふの居間にて、經文を唱へ出した、此れは木村親子が臨終に際し、滿腔の熱

誠を以て、其の成佛を彌陀に祈つてゐるのである。

左様なれば父上御介錯を、お頼み申し上げますと云ひつゝ、志摩介は水盃を濟ませて、腹押し抜き、九寸五分を右手に持ち、左の手にて靜かに二三度腹を撫でる、重滋は刀の鞘を拂ふて立ち上り、上殿に構へながら、思はず我が子の横顔を、上より瞰下して、ハラハラハラと熱き血の涙を落す、勝右衛門は堪りかねてか、兩眼を閉じて、片脇を振り向く其の途端に、志摩介はアツ

リツと、左の脇腹へ刺し通して、グヒツと右へ引く、オ、……美事天晴れ……天晴れ天晴れと、重滋は叫びつゝも、永く苦痛を感じせしむるは、親の慈悲ならずと、南無阿彌陀佛の唱名を稱へつゝ、切り下す一刀の下に、バサリツと音して無惨、志摩介は十六年を一期として相果てたる途端に、バタ／＼と倉

皇しき足音して、隔の障子を脱さん許りに開きつ、此處へ轉び込み、我が夫道欲なく、聲を張り上げて泣き叫びたるは、木村重滋の妻、志摩介に對して

は實の母なる、右京の局が、當年三歳になる綱千代と呼ぶ、和子を抱えて来たのであつた。

「遅かりしぞ右京局どのと、勝右衛門は思はず叫けんだ、其の右京局は、今切腹して首と變りし志摩介の、眠れるが如き死に顔を見て、オ、志摩、母じゃ……母じゃわいなアと、我れを忘れて血に染まりし生首を、抱き上げんとするを、遮りたる重滋が。

「女房たしなまぬか、狼籍者ツ……と心に泣きつゝ、叱かり飛ばすと局は恨しそふに夫の顔を眺めて、ヨ、と其場へ泣き倒れる。

「其方は如何なる仔細あつて、桃山より此の席へ参つたか、此の場の容子を誰に聞き、又た誰の許を得て、態々参つたか、先づ其の仔細を聞かふと、今我が子の首を切つた血刀を拭ふて、片脇へ直し、其處へヒタリと坐つた。

「木村殿其の御不審は、御尤も貞許局に成り變つて、お話しいたすで御座

らふ、實は身許先刻太閤殿下の許を得て、桃山へお知らせ申し、時を移さず御座れよと申し添へたので御座る、其故に先刻より、モッお越しあるが、顔を見せらるゝかと、何んの彼のと餘計なことを申し上げて居つたので御座りま

するじやと、云ひつゝ、局に向ひ。  
「お身モッ少しお早よふお越し御座つたら、志摩殿に今世のお暇乞ひあそば

されたるものを、さてく惜いこといたして御座るじや。  
「然らば松田殿が、お取計ひにて御座つたか、ソム……イヤお身の御芳志暎途へ至るまで辱なふお請け申す、併し志摩介が存命中に、右京の参らざりしは、實に幸ひ、顔を合されてみると、親子の情……萬々一見苦しき死に様いたすやうなことあつては、木村家の恥辱で御座つたにと、夫の言葉を皆まで聞かず。

「我が夫、其れば何を仰せらるゝので御座りまするか、お身はこの綱千代、可



愛ゆふは御座りませぬか、右京あることお忘れて御座りまするか、志摩介は、お身一人にて出来た子では御座りませぬぞえ、親子夫婦が今世の訣れ、一言半句のお知らせもなきのみか、志摩に會はなんだが、幸福だなどとは、鬼か蛇かお身は妾が桃山にて、棄様（秀頼のこと）に乳お上げ申して居るより、仇じや敵じやと思召して、か、サア其の次第聞かせて聞かせてと、前後正躰打ち忘れて口説たてる。

此の右京の局と云ふは、申すまでもない木村重滋の室にてあるが、今此處へ伴れて来てゐる、綱千代と云ふ三歳になる子を生むと間もなく、淀君が秀頼を生んだところが秀吉が右京の賢夫人なることを見抜てるので、秀頼の乳母に所望されて、其れより桃山の御殿に奉公し、其れより右京の局と呼びて、秀頼の乳母と爲り、綱千代と共に、桃山の御殿にゐたのである、シテ此の綱千代と云ふ、重滋の遺子こそ、即ち本編の主人公……父に劣らぬ精忠無比の若

大將として、其名後世までも香ばしかりける、木村長門守重成であるのである。

『其の恨は一應無理ならず、なれど今は其の様なこと、彼れ是れと云ふべき時ではないが、折角父の最後を見届げんとて参つた綱に對し、此のまゝ無言で訣るゝも本意ない、且つ又た木村家の胤は、綱より外にはない、左れば我が亡き後、兄が亡き後を吊らはするは綱より外にはない、加之ならず綱に、遺物をも興りたければと、云ひながらシロリと、涙に正體亂し居る右京の膝に凭れながら、頑世なけれど何にやらむ憂に沈みける、綱千代の顔を眺める、右京はいよく涙を流す、勝右衛門も親子夫婦が悲惨なる此の場の状を見ては、武門に生れし身の、人事とは思はれいで、ヨ、と涙に濕ふ眼を拭ふてゐるのであつた。

『暫らく見ぬ中に、強う成人しやつたな、親はなくとも子は育つとか云ふ下世

話の喩、さて争そはれぬものじや、アハ……アハ……アハ……と所謂泣き笑ひをなしながら、形を改ためて。  
 『勝右衛門殿、未練ケ間敷と思召すかは存じませぬが、此れも凡夫の悲さ少しく綱に云ひ聞かしたことの御座れば、暫らく御猶豫のほどを、願ひとう御座りますると云ふ。  
 『其の様な御斟酌には及び申さぬ、お身にお會したしたさに、拙者どれほど氣を揉んだやら知れ申さぬじや、サ、篤くりとお訣れをと云ひながら、堪え得ずや爲りたりけむ、顔を脇向つ、懷紙取り出して鼻をかむのである、然らば御免下されひと云ひつゝ、重滋は立ち上つて、我が子の傍へ進み寄りて、綱千代を抱き上げながら、黒々と生えてゐる髪を撫でると、ワツと泣き出した、此れは此の場の餘りに哀さを、頑世なき身にも何んとやら感せしとみへるのであるらしい。

『綱よ大きゆうなつたのう、父じやぞ……其方の父じや、何うもいたしはせぬ叱るのじやない、泣きやるな、泣きやるなと揺ぶれば、流石に恩愛の感じてかや、ピタリと泣き止んだ、而してニツコと得も云はれぬ愛くるしい眼付をして父の顔を見上げる、見上られてみると、又た一層に哀を感じて、父も泣く、母も泣く勝右衛門も亦た貰ひ泣きをするのであつたが、重滋は我れながら、不覺の涙と氣を取り直して。  
 『是りや綱千代、臨終の際に父が申すこと、能く聞かれや、今日秀次殿のお供をして、其方の兄の志摩どのと、瞑途へ参ること、一昨日父はモウ承知いたしたのじや、左れば其方を呼び寄せて、永の訣をいたすべきではある、なれど殊更に呼び寄せざりしはな、聊か其方の行末を思ふての父が、志じやとさ許にては明るまぬが、太閤様と關白様とは、御親子の縁を結ばれたる間柄じや、然るに圖らずも仇敵と爲られて、關白殿には御生害……と

云ひ來たつて、重滋ホロリと涙を落しながら、更に言葉に一段の力を添へつゝ。

「シテ父は其の御一方の秀次様の、御恩に預かつて居つた身じや、よいか、而して母は其の御一方の太閤様の、御恩に預かつて、棄様（秀頼のこと）の御乳人を承はつてゐる、其れ故に一ト口に申せば、其方は棄様とは乳兄弟じや、其故に其方は此の後ば、身を粉にし生命を捧げて、棄様に御忠勤を勵まれば爲らぬ身の上へ、左るを父が臨終の場處へ、態々呼び寄せたとあつては、後々の恨を、父が其方達に云ひ聞かすではあるまぬか、など世間の人の噂に上るが不本意、又た斯る折から何んの彼のと、世間の人に思はれては、其方が成人してからの、強ひ妨げ、又た可弱き其方や、涙脆き女房どもに惨しい此の場の状を見するが嫌さ、其れや是れやを考へて、呼び寄せなんだのじや、可いか明つたか、臨終の際に父が、心をかけて、斯く云ひ聞かす言葉、

其方は頑世なければ得心は得まぬるまいが、能く覺へ居つて、成人の後ば豊臣家の、天晴れ忠臣ぞと、世間の人々より褒められるやうせい、左すれば父も草場の陰にて、何れ位も喜ぶか、又た兄も如何ばかり、嬉しがるか知れむ、斯くありてこそ、其方は重滋の子じや、天晴な孝行者じや、必らず父のこの言葉、忘れまぬぞやと云ひ聞かされて、綱千代は父の親を眺めながら、ニツコリと笑ふたは、得心やゆきたりけむ……

「女房此れへ來や……アイ……と返事も口の中、右京の局は鼻すゝらせつゝ、其れへ進み寄る。重滋は綱千代を女房に渡して。

「只今綱千代に云ひ聞かせたること、其方も其れにて聞きぬて、能う得心なまぬつたであらう……サム、就ては此りや其方に確と申し渡すのじやが、我が亡き後は、其方の手にて綱千代を育つることは、決して相成らんぞツ、實は昨日他處ながらの暇乞をかれて、志摩介に書面を持たせ、六角義郷殿の御許へ遣

はし置きたれば、早々義郷殿の御許へ送られよ、左すれば義郷殿、拙者に成り代つて、文武の道を仕込まれ下さるゝほどに……必らず必らず、桃山の御殿にて育つることは相成らんぞ……

「アイツ……と右京の局は綱千代を抱ひて泣く。

幾時までも、ベツベツと能ふ泣く女アハ、……これは勝右衛門殿、頼んだ愚痴話に御迷惑を相掛け、恐れ入つて御座る、左様なれば御手数ながら御介錯をと、重茲は設けの席へ悠然と坐を構へつゝ、志摩介が用ひたる九寸五分の血に、染りたるを取り上げて。

「此りや綱千代、此れはな秀次殿より、父が拜領いたせし古今の名作じや、此れにて父と兄とが腹を切る、左すれば此れには父と兄との魂が、こもつてゐる、此れを其方に紀念として遣はすほどに、後にて持て行くと、云ひつゝ其の九寸五分を逆手に持つ、彼方には長老が讀經の聲、鐘の音が盛に起る。

重茲は兩眼を閉じて、南無阿彌陀佛と口の中に唱へつゝ、ブツリツ……左の脇腹へ突き立て、右へ引くを合圖に、勝右衛門が下せし太刀風と共に、ドーと音して無惨、重茲は首と代つたのである。折から入相の鐘の音ゴーン……ゴーンと淋しゆふ響き渡つて、庭には鴉が埒へ歸る鳴き聲の、殊更に哀に聞えてゐる。

○綱千代木村長門守重成と改む

絶世の英雄不世出の豪傑豊太閤秀吉公も、病覺と云ふ敵には、打ち勝つことが出来ぬ、秀吉公には慶長三年三月に、前田玄以に空領を命じて、醍醐に最も盛なる花見の宴を、子の秀頼と夫人とを伴れて催した、此の秀吉醍醐の花見は、驚く許の贅澤を極めたものにて、醍醐の花遊びと云ふては後世有名な一つ話に爲つてゐる。

秀吉この豪遊を爲して歸つてより、一ト月経つか經ぬに、病氣に罹つた、剛氣な公のことなれども、六十三と云ふ高年だから、申し分なき醫藥も其の甲斐なく終に其年七月秀吉公には薨なられた。

其の御臨終の際に、片桐且元と小出秀正の兩人に、秀頼殿の守役を頼まれ予に成り替つて秀頼の仕附をいたし呉れよ、而して行々は木村綱千代、渡邊尙、瀧田兼相の三人をも、秀頼の守役にいたし呉れよ、殊に綱千代は父常陸の遺言もありたること、又た秀頼とは乳兄弟の間柄なれば、十分重く用ゆるやうにいたし呉れよと、遺言されたが、此の時綱千代は父の遺言に従ふて、母の手を離れ、六角義郷の許に在つて、文武の兩道を勵んでゐたのであつた。

慶長三年の七月に、秀吉公が亡なられた、其の翌慶長四年には、石田三成の野心よりして、關ヶ原の戦争がある、此れよりして豊臣家と、徳川家との間

に、面白からぬ感情が生じて來たが、併し前田利家、毛利輝元、上杉景勝などの大老が、其々事を執つてゐたからして、先づ何事もなかつた。

左右する中に、歲月流水のごとく、慶長十三年となつた、秀頼殿早や十六歳と爲らせられて、大阪城にあられる、戦國の餘煙尙ほ散ぜざる折柄なれど天下の人心は至極平穩にて、太平の夢に酔るがごとし。

『お局様、少しく申上度こと御座りまする御意得ましても、お差支は御座りませぬかと、大阪城内は右京局の部屋の次の間に、正しく坐り、兩手を突きて、局の召使の白梅と云ふが云ふ。』

今し徒々の餘り、古今集に心を奪はれてゐた局は、此方を靜かに振り向き、て、差支えぬ、何んじや何に事じや云や。

『江州堅田の畔より、綱千代様とか仰せられまする、十五六の若衆様お越しあそばされ、お局様にお目にかゝりたいとの由、お表よりお取次御座

りましたと云ふ。

『ナニツ……堅田の畔より、綱千代が参つたと、ハテナ……と右京局は太く不審顔にて、思案の小首を傾むけてゐたが、聴て静かに黙きつゝ。』

『大藏の局様、お下りでかなと、我が子が十年振に訪れて来たのだから、喜んで直に會ひそふなものだに、左はなくして大藏局の事を訊れるとは、合點のゆかぬことである、なれども白梅は三年ほど前に、局に仕えたのだから綱千代が局の實子であるなぞと云ふことは、素より知らふ筈がないので、如何かは妾存じませぬが、一應お伺ひ申し上るで御座りませうかと云ふ。』  
『オ、……お訊ね申して見て呉りや、シテお下りで御座つたら、自が少し御相談願ひ申し上たきことあれば、お差支なくばお伺ひ申し上げますればと、お訊ね申し上て呉りやれ。』  
心得まして御座りますると、長局の廊下を辭々と、大藏の局の部屋へと

行く、大藏の局と云ふは、秀吉公の遺言の中にあつた、秀頼のお守役を承はつて、薄田隼人兼相と共に、秀頼のお侍に御奉公申し上げてゐる、渡邊内藏介、尙の母であるのである。

渡邊尙と薄田隼人とは、綱千代より年が五つ六つ上であつたので、疾より秀頼公の、お守り役を勤めてゐたのである。

間もなく白梅は戻つて来て、先刻お下りあそばされ、打ち寛ぎて居られますれば、御遠慮なふお越し下されませと、仰せられて御座りました。

『オ、左様でかと、右京局は、其のまゝ大藏局の御部屋へ行く、右京と大藏とは同じ局中でも、取り分けて交情がよく、宛然姉妹のやうにして、御奉公を大切に勤めてゐたのであつた。』

『右京どの、御相談と仰やるのは如何やうなことで御座りまするか、大藏の局は、侍女が點て持つて来た茶を勧めながら訊れる。』

「アノ……只今思ひ掛なくも、十歳振にて綱が、お表へ参りまして御座りまする、流石は母子の情なり、嬉しそふな顔付にて云ふ。

「エ、ツ……何んと仰せられまする、綱千代様がお越しあそばされたと、其れはマア……と、大藏の局も、太く打ち喜びたる風情にて。

「モリ大層に大きゆう、美しい立派な若衆に爲つて居られませう、妾もお目にかゝりとふ御座りますれば、早う此處へお伴れあそばされませいなと、大藏局は綱千代、右京の部屋に居るものと合點して斯は云ふ。

「大藏どの、其れに就いてお身様に、御相談願ひとふて参つたので御座りますると、云ふその顔を大藏は眺めて不審顔。

「オ、左様なれば、綱千代様の來られたことを、上様へ申し上げて呉れへと、妾に仰しやるので御座りまするか、その事なれば最と易きこと……

「イ、エ……左様では御座りませぬ、未だ會ひませぬので……

「何んと……すりやお身は未だ綱千代様に、お會ひなさらないと仰しやるので御座りまするか、其れはマア如何して……

「義郷様より、モウ御奉公申し上げても可い、又た何處へ参つても引を取らぬ、一人前の腕じやと云ふ、お音信が未だ妾の許へは参つて居りませぬ、然るに突然綱が妾に會ひたいと云ふて、参りましたとは、合點のゆきませぬこと、其れ故に若しや年頃に成り、妾に會ひたさに、義郷どの、許を脱けて参つたのでは御座りまするか、萬一その様なことで御座りましたら、會はずに追ひ返すが道かと存せられまするので、如何いたしたものでやらんと、一人で思案がつきかれまするので、お身様のお智慧をお借り申そふと存じましてとの、物堅き言葉に。

「此れはしたり右京どの、其れは何にを仰せられまする、綱千代様が六角様のお手紙を持って居られるので御座りませう、假し又た脱けて來られたところが

母子では御座りませぬか、殊に十年からお會ひあそばされぬものを、其様な邪見な無情いことを云はるゝものでは御座りませぬぞや、オホ、……で御座りますれば、早うお會いあそばされませ、而してお話の數々は、三日や四日で盡はいだしませぬで御座りませうけれど、御休息が濟ましたら、妾にもお顔をお見せあそばして下さいませと、大藏の局は宛然我が子が、久々にて訊れて来たかのやうに、勇み立つて云ふのである。

「其の様に仰やつて下さりますれば、其れも御尤も、左様なれば兎も角も、會ふてやるで御座りませうと、此に綱千代と右京局とは、十年振にて面會したが、六角義郷が心を籠めての教訓に、父の遺訓を堅く守りて、一心不乱に七八年、文武の兩道を研ひて、今は天晴の腕前と爲り、年は未だ十六の、綻びかゝりし蕾なれど、學問武藝は一際のものおよ、及ばぬ上達の仕方であるので、此れなれば一本立にして、突き出すも、決して引を取るやうなことはない」と、

六角義郷が斯ふ考へたので、左てこそ手紙を持たせて、右京局の許へお越したるのであつた。

其の手紙を讀んで右京は、先づ一人前優れた腕にして呉れたのを喜び、第一二には見るからに、立派な武夫に爲つたのを嬉がり、第三には年は十六なれど、父に似て柄が十分に大きいのと、其の容貌の美しゆふして、且つ殊更にやさしく、所謂威あつて猛からず、柔にして剛ならずと云ふ風情であるのに、亦た強う心を樂しましめ、其れより上様へ御披露申し上げるまで、兎も角も妾の部屋におやと、其のまゝ綱千代は母なる局が許に、住ふこととなつたのであつた。

秀頼公には今しも其の日のお勤を了られ、大阪城の奥殿に在つてお身と同じ年頃十六七の花のごとき侍女三四人と、お守り役たる波邊内藏介尙、即ち大藏局の息子とお相手に、庭の夏景色を眺められながら、お茶を



召し上つて、餘念なふ休息して居られるところへ、其の日の當番たる大藏の局は静々と入つて来て。

「上様、御休息にぬらせられまするか、少しく上様のお耳へ、お入れ申したいことの御座りまするが、お聞きたまはられませうやと両手を突きて優しゆふ云ふ、その顔を秀頼どの優しゆふ眺められながら、ニタリ……とホ、笑まれて。

「如何やうなごとか、云ふて見やと、脇息に肘を凭せかけられる。

大藏局は静かに三膝ほど、秀頼どの、傍へ進み寄りて。  
「上様が豫々より、何うした何うしたと、お訊れで御座りました、綱千代どのが、兩三日前にお越しで御座りましたと云ふ。

「ナニ……予と乳兄弟の綱千代が、参つたとな、オ、其れは珍らしい、定めて成人いたして、あらふ、懐かしいことじや、シテ何處に居るかな。

「右京どの、許に、休息いたして、御座りまする、實は昨日にも此の由を、申

し上げやうかとは存じまして御座りましたが、先づ一日緩りと、休息いたさるゝが宜しからふかと存じ、差し控えて居りまして御座りました。

「オ、……其れは懐かしい、然らば改ためて召さうほどに……と秀頼は兄弟に久さ方振にて會ふかのやうに打ち喜ばれつゝ、内藏介と傍に侍つてゐた、渡邊尙に言葉を移される。

「ハ、ッ……と其れへ両手を突く、秀頼は且元は、モリ退出いたしたかなと問はれる、伺ふて参りませうと立つて行く、問もなく戻つて来て。

「片桐様、最早や御退出で御座りまするが、豊後守様おゐでに御座りまする、豊後守と云ふは、眞野豊後守頼包のことである。

然らば豊後を呼べと、眞野頼包を呼び寄せて、綱千代のことを物語り、其方も知つての通り、父君の御遺言もありしこと、二つには乳兄弟の綱千代、會ふて相當の知行與へたければ、其方善きやうに取り計らひ呉りやれと仰せ付けら

れる。

「心得て御座りまする、上様の御沙汰なくも、頼包明日、片桐殿と御相談の上へ、改ためて御披露申し上ん存じ寄に御座りました。

「オ、左様か、すりや其方は綱千代の参り居ること、存じ居つたとみゆるなと秀頼どの嬉し顔にて云はれる。

「ハイ昨日右京どのよりの、お届けにて承知仕つり、先程片桐どの桐の間のお溜へ、綱千代どのを呼び寄せられ、御面會いたされて御座りましたとの頼包の言葉に、秀頼どの愈々御満足の體にて。

「オ……其れでは其方にも、又た且元にも、綱千代に會ふたと云やるか……ウム、成人いたし居るであらふな。

「年は殿下と御同年に御座りまするが、父の常陸に似まして、筋肉殊に猛ましく、天晴の武將に御座りまする、文武の兩道は六角どの強う心を籠めて仕

込れたとみへ、一際の武士も遙かに及びませぬ位ぬ、熟達いたし居りまする氣に見受られまする、且元どのも天晴の武將に爲られたな、殿下に於せられても、御満足に思召し、嗚かしてお悦びあそばすことであらふと、斯様に仰せられ、私ども一同太く打ち喜びまして御座りました。

「オ、左様か、其れけ嬉しいことである、就ては早速會ひたいに依り、其方此れへ召し伴れて來ては呉りやれぬか。

心得まして御座りますると豊後守頼包が立ち去る後、姿を見送られながら、秀頼どの、何にか急に思ひ出されたことのあるらしき風情にて、嬉しがつて其れに控へてゐた大藏局に向はれ。

「其方右京の部屋へ参つて、左京にも此れへ罷り出るやうにと申されて呉れぬか、心得まして御座りますると、其のまゝ大藏局も立つて行く。

秀頼どの千金の寶にても得られたかの如く、打ち喜んでゐられるところへ

眞野頼包に伴れられて、静々と入つて来たは綱千代なり。  
 次の間に平伏せる、綱千代の容子を秀頼どの、つくぐと御覽せられると、色  
 あくまでも白く、髪は漆を塗りたらむかと思はるるまでに濃く、眼元に愛ら  
 しき愛嬌のあふれてゐて、見るからに花のごとき美少年、殊に未だ取らざる前  
 髪の、一入やさしゆふ愛らしさを添へてゐる。  
 斯る優しき姿の中にも、筋骨の鍛え、力量の鋭さが、十分に具はつてゐて  
 流石は常陸の、わすれ記念だけあつて、何處となく冒すべからざる威風の、四  
 方を拂ふ状あるは、實に今二三年を経ちなば、一方の大將として、恥かしから  
 ぬ容子の現はれてゐるので、秀頼どの、御喜悅愈々斜めならずして、天晴の  
 武夫に爲りたるよなど、暫し綱千代の容子を見惚て居られた、折から右京の  
 局は、大藏局に誘はれて、静々と入り来たりて、二の間の下座に兩手  
 を突きて控へてゐる。

「オ、右京来やつたか、今綱千代の容子を見るに、實に天晴なる武夫、予は  
 強う嬉しぞ、其方は取り分け、能き子を持って、一入嬉しからふのう。  
 「恐れ入りましたして御座りまする、御覽の通り年の割には、装が大きい御座り  
 まする、なれども子供同様、何んのたしなみも御座りませいで……  
 「ア、綱千代、近ふ寄りや、許すと云はれる、なれどもお近くへ進み寄るは、  
 此の上もなき恐れ入つたることなれば、ハツ……と云ひしのみにて、控へてゐ  
 る、遠慮は入らぬ許す、其方に物語もあることなればと、重ねての御詫であ  
 る、すると眞野頼包が傍より。  
 「綱千代どの、右府様が取分ての思召し、恐れ多きことながら、御遠慮申す  
 は却つて無作法、左れば先づお傍近くへ進まれひと、頼包の取り爲に、左様な  
 れば御免こうむりますると、綱千代は作法亂さず、上段の間の閨際まで、膝  
 にて進み寄りて平伏する。

『綱千代、予が父君の御遺言もあつたことだに依つて、今日より其方を召し抱えたいと思ふが、其方余も異存はああるまぬのう。』

『何んと仰せられまする、上様、拙者奴を家來にいたすこと、いやじやと仰せあそばされましても、拙者奴は、片桐様か眞野様にお願ひ申して、御家來にさせて戴かれれば爲りませぬと存じて居りまするので御座りまするもの、勿體ない異存などとは……草履取なりと、お使ひ下さらば、斯様な嬉しいことば御座りませぬなれど、上様と、綱千代は言葉に力を入れ。』

『只だ案じられまするは、十六の志慮とても十分に定まりませず、又た文武の兩道も此の上もなき、未熟に御座りますれば、御役向の手前、粗忽なく勤まりまするや否や、此れのみが案じられて爲りませぬ。なれども忠と義とを基礎といたし、お指圖を受け申したらば、不都合なふ勤まりませうかと存せられまするので御座りまする。何んとぞ如何なる鄙しき役にても、毛頭異存御座りませぬ。』

れば、御家來にお取り立て下さりまするやう、只管お願ひ申し上げ奉りまする。

『オ、能く云ふた其の言葉聞めて、予は一城二城の城を得たよりも、強々満足に存するぞよと云はれる、綱千代は只だモウ恐れ入つて平伏してゐる、眞野豊後守は嬉しそふな顔をして、笑々してゐる、右京局と大藏局とは、差し伏向て感涙に咽せいでゐる。』

秀頼どのには、涼しきお聲に心からなる誠を籠められて、綱千代、其方も知つての通り、其方と予とは乳兄弟じや、左れば斯も成人しやつて、予の家來に成つて呉れるからは、予は其方を兄弟の様に思ふて、深く便にいたすほどに其方も亦た予を兄弟と思ひて、家のことに一入の力を盡して呉れよとの、優しい仰せ、綱千代は勿體なふ御座りますると云ふ、右京局は只だモウ感極まつて、ハラハラハラと嬉し涙を落してゐる。

「然らば豊後守、今日より綱千代を改ためて、予の家來にいたし、侍役仰せつけるほどに、知行のことは其方且元と相談して取り定めよ。」  
 「心得まして御座りまする。地下になわする太閤殿下、此の御容子を御覽に相成り、嗚や今頃は御満足、お喜びでゐらせられませうと、頼包も勇みたつ、秀頼どのの更には更に言葉を改ためられて。」  
 「綱千代十六と云へば最早や一人前、殊に其の大兵にて、前髪あるはふさわいからず、此れにて元腹いたし、父の名を襲げよと云はるよ。」  
 「此れは又た重れ重れ有がたき上様の御誼、如何にも年は十六なれども、身體は常陸介どのに似て、二十歳からの格服、且つ又た綱千代と云ふ幼名にては役向の手前面白からず、然らば御免蒙むつて、拙者が元腹いたさせるで御座りませうと、此に眞野豊後守頼包は、仕度を爲し、秀頼どの、御前にて、綱千代の前髪を取り、芽出度元服させたのである。」

「オ、……其れにて最も立派……天晴な武夫に相成つた。シテ名前は何んと改だめさせやうぞなと、秀頼どの暫らく思案の小首を傾けむて居られたが聴て靜かに打ち點かれつゝ。」  
 「木村家の先祖、四郎重信以來重の字は、木村家代々の通り字の様に聞き及ぶに依り、重の字に忠成り、孝成るを祝ひ、且つ古の楠どの、名に因なみて、重成と呼ぶかよろしからむ、豊後の守此の儀、何んと思やるかなと、云はれて頼包はボンと小膝を打ちつゝ。」  
 「恐れ入つたる上様の御名前付け、如何にも重成こそ、此の上もなき芽出度名に御座りまする、シテ受領の儀はと、頼包の訊れ、秀頼どの再び思案に暮れて居られたが。」  
 「左れば綱千代が、今日より忠節を長へに勵み呉れて、我が家の門に幸福の礎を定め呉るるやうにとの心より、長門守とは如何に。」

『重ね重ね恐れ入りましたるお考へ、名前と云ひ受領と云ひ、斯様な芽出度ことは御座りませぬと、頼包愈々喜こびて。』  
 『然らば綱千代どの、今日より木村長門守重成と名乗れて、君側に仕へ、御家の爲め忠節をお勵み下されひよと云ふ。』  
 『ハ、ツ……身に餘る面目……上様の御高恩、辱なふ存じまする、木村重成不肖と雖も、この御報恩は心血を捧げて申し上げますると、疊へ頭を摺りつけ、感きわまつてか泣いてゐる、右京の局は餘りの辱なさに、何んと言禮を申し上げて可いやら、其處へ平伏なしたるまゝ、無言にて頭を上げ得でありしは、辱なさと嬉しさに、せぐり來る涙を押さへ得であつたものと思はれる。』  
 『右京のお局どの、お身も御満足で御座りませうなと、豊後守に云はれてハイ……と云ふも口の中、宜しゆふ御禮を豊後守様より、申し上げて下さり』

ませと、此に芽出度木村綱千代は、元服して長門守重成と呼び、秀頼どの、お守役と爲つた。

○淀川堤の夜嵐

辱なき秀頼どの、取り計ひが、木村重成の膺底に、極印を捺したる如くに徹み込みて、上様の御爲には水火の中は素より、心の血を絞り出して、御恩を報じ奉つらんと決心した、其れより母の局と共々に、寢食を忘れて忠勤を勵む、左れば君側の御覺へ芽出度は云ふまでもなく、諸將方も非常に重きを置き、一方の名大將を得たと、豊臣家の爲めに殆んど申し合せたやうに寝め且つ祝ふのであつた。

諸將方は重成を斯様に便にする、又大奥の侍女達の、老たるも若きも皆な一様に亦せ申し合したやうに、長門様……長門様と云ふて、侍女どもが一

所ところに集あれば、直すに重成しげなりの噂うはさをし、今日けふ妾めかけはお局つねのお廊下らうかにて、御苦勞ごくらう様さまで御座ござりまするなど、優やさしいお言葉ことばを、重成しげなり様さまより戴いたきまして御座ござりまし  
たよなぞと、重成しげなりに言葉ことばを掛かけられたのを、自慢じまんする、此これは花はなも羞はらふ重成しげなり  
の紅顔こうがんに、惚まれと云いふ譯わけにてはあるまじけれど、女性ぢよせうの常つねとて、何なんとなふ重成しげなり  
の顔かほを見るみのが嬉うれしゆふて爲ならぬより、問ひさへあれば重成しげなりの噂うはさをしてゐる、  
お表おもても大奥おほおくも、重成しげなりの噂うはさで持もち切きつてゐた。  
左右とさうする中うちに、其その年としも暮くれて翌あれば慶長けいちょう十四年ねん、二月ふたつきの仲旬なかば、木村長門守きむらながとのりみ  
重成しげなりは、上様うへさまの許ゆるしと母はの許ゆるしを得えて、近州ごうしゅうは堅田かたの畔ほとりにゐる、叔父おぢの六角かく  
義郷よしさとの許もとへ久方ひさかた振ぶりにて、機嫌きげん訊たづねかたがた、新年しんねいの挨拶あいさつを述のべやうと、出掛でかけ  
たのである。  
義郷よしさとは便たよりに依よつて、重成しげなりが右府殿みぎふどの（秀頼ひでよりのこと）に勿體もったいないほど手厚てあつく取り  
立てられたることを知り、一入ひとしほ喜んでゐたが、久し振ぶりにて訊たづねて來たので、

又また一入ひとしほの喜よろこび、四五日にちとつりう逗留としてゐる中うちに、種々いろいろと云いひ聞きかせ、心こゝろらす上うへ  
様さまの御馬前ごばぜんにて死しするのだぞよ、夢ゆめにも疊たまみの上うへにて死しすなぞと云いふ、心こゝろを  
生おこしてはならぬぞよと、忠君ちゆうくんの道みちを淳々じゆんじゆんと説とき聞きかせたから、鐵石てつせきの如ごとし重  
成しげなりの心膽しんたんは、愈々いよいよ益々ますます堅かたふ爲なつたのである。  
五日いつかほど滞在たいざいして暇いとまを告つげ、伏見ふしみへ來きて夜舟よぞねに乗のらふとした、ところが二三  
日前にちまへに、二日ふつか續つけて降ふつた大雨おほあめの爲ために、淀川よどがは筋すぢは水嵩みづかさが増ました、其それで今  
夜やは舟ふねを出だせるか出だせぬか知しれぬと云いふ、船宿ふなやどの挨拶あいさつに、其そんなら仕方しかたがない  
から歩あるひて歸かへらふかと思おもつたが、其その時ときはモウ彼かれ是こゝれと申まう刻ときだ、日ひの暮くれ  
るには一刻とこあるか無なし、今いまより歩あゆむも途とちう中ちゆうで泊とまらねばならぬから、今宵こよひは此處こゝ  
へ泊とまらふ、若もし船ふねが出でれば、此この上うへもなき幸さいはひと、斯こゝふ思案しあんして、重成しげなりは其  
のまゝ其その宿屋やどに足あしを止とめた。  
今いましも風呂ふろより上あがりて、夕飯ゆづげの仕度しどを濟すませ、茶ちやを所望しよぼうしながら、休息きうそくして

ゐるところへ、女中は入り來たりて、お武家様、折角に御座りますれど、今宵は船出ませぬそふに御座りますれば、お早よう寝しあそばされませと云ふ、オ左様か、然らば打ち寛ぐであらふわいと、云ふてゐた時しも、十四日の春の月は、早や中天高く上がりて、妙なる光は、東向きなる重成のゐた此の坐敷へ射し込むのである。

春宵一刻價千金と云ふ時節には、未だ些と早けれども、又た捨て難きの月、未だ初夜の鐘を聞かざるに、此のまゝ眠むるは、優しの月に對して勿體なし、川の堤を逍遙ひて、流に映る月の姿に飽はやと、重成こんなことを不圖考へたので、そのまゝ庭下駄を穿いて立ち出て、ブラリと淀川の畔へ出た時に、ゴーン……ゴーン……と聞ゆるは、初夜の鐘であらう。

川の流れば雨の爲めに濁り居れども、冴えたる月は惜し氣なふ、その清き姿を水に浮ばせて、見る人の心を頻りと楽しましてゐる。

得も云はれぬ妙なる眺めに、重成は唯だ一人、打ち興じつゝ、柳の木影に身體を据へて見惚れてゐる。

折から比叡山より湧て出たやうな黒雲が、北の空にポツと浮んだ、其れも朦朧月夜の空に浮び出たのなれば、格別に目立もせぬが、冴え切つたる水を流したやうな青天に、浮び出たのだからして能く明る。

「オ、……雲が出たな、彼が廣がつたら雨に爲るのか知らむ、又た雨では困るがと、重成は一方に雨を怖れると、又た一方には其の黒雲の塊が、如何云ふ變化をするか、見届けやうと云ふ嗜好心に駆られて、其の場を立ち去らで、今度は月の方よりも其の雲の方に心を奪はれて、見惚てゐると、瞬間中に其の黒雲の塊は、宛然糊に水を加え手にて滌き延すのかの如く、次第次第に廣がつて、早や我が上を元氣よく走つてゐた月を覆ひて、四方は朦朧に變つて行



つた、併れども雨は降らない、  
 重成は此の空模様を眺めながら、幾許雲が出て降らぬ時には、さても降らぬ  
 ものじやなアと、獨で感心しながら、水嵩増したる淀の流れが、チャブランチ  
 ヤブと岸邊を洗ふ音を聞きつつぬたる折しも、川上の方に當つて、キヤツツ…  
 …と云ふ女の叫び聲が、手に取るやうに聞えた、其れが今朦朧夜となつた許  
 の、寂寞の天地を破つて聞こえたのだから、重成はハテなと不審を起して、思  
 はす立ち上り、耳を欬てると、續ひて聞ゆるアレー…と云ふ哀なる女  
 の叫び聲に、合點のゆかぬこと、人通り途絶たるこの堤…而も此の夜陰に  
 女の悲命は確かに變事……ウム、他處に聞き流す譯にはゆかぬわい、兎も角  
 も容子を見て、助け得させんと、袴の股だち取り上るや否な、一目散に聲を  
 便りに川上へ堤を走つた。  
 朦朧に曇る空模様を透してみれば、定かには明られど、十七八と思はるる若衆

姿の者が、此れも十六七かと思はれる、下髪の娘の振袖を、確と押さへて  
 ぬる容子に、重成は直に其の場へ飛び出しては行かすに、片脇の木影に身を潜  
 そめて、凝と容子を窺ふてゐると、其の若衆姿の男が、下髪の娘に無  
 理矢理に伴れゆかんとせる状が、朦朧氣ながらも、ありくとみえてゐる、  
 なれど其の若衆姿の男は、下手の木影に、此の場の容子を窺ふ重成のぬ  
 やふぞとは、夢にも知らなかつたのであつた。  
 さては無情ふされたる叶はぬ戀を、無理矢理に遂げさせやうとするのか、何方  
 の娘かは知られど、下げ髪の容子より察せば、決して町家の者ならず、さて  
 も不慙、助け得させんと、重成 佞度思案を爲しつゝ、静々と故更に沈着拂  
 つて進み寄る、其の状を始めて知つたる若衆は、ギョツとせしが、併し此の若  
 衆も、腕に十分覺えのあつてか、格別強うは驚きもせず、又た逃げ出そふ  
 ともせず、静々と進つて来る、重成の容子を端視てゐた。

其の小娘も、亦た重成の來た姿を見て、如何なる感<sup>かんじ</sup>を起<sup>おこ</sup>せしか、小脇<sup>こわき</sup>に在<sup>あ</sup>る名<sup>な</sup>も知<sup>し</sup>れぬ古木<sup>こぼく</sup>の影<sup>かげ</sup>に身<sup>み</sup>を潜<sup>ひそ</sup>めたるは、心<sup>こころ</sup>丈夫<sup>ぢゆうぶ</sup>に爲<sup>な</sup>りしには相違<sup>さうわい</sup>なきも、幾<sup>いく</sup>分か恥<sup>はづ</sup>かしむと云<sup>い</sup>ふ念<sup>ねん</sup>もあつたのであらうか。

其<sup>その</sup>若衆<sup>わかしゆう</sup>姿<sup>すがた</sup>は、仁王立<sup>にわうたち</sup>に爲<sup>な</sup>つて、言葉<sup>ことば</sup>涼<sup>すず</sup>しく怒鳴<sup>どな</sup>るのであつた。

重成<sup>しげなり</sup>は其<sup>その</sup>若衆<sup>わかしゆう</sup>の、三間<sup>さんげん</sup>ほど手前<sup>てまへ</sup>のところまで來<sup>き</sup>て立<sup>た</sup>ち止<sup>と</sup>まり、心<sup>こころ</sup>を四方<sup>よつた</sup>に配<sup>く</sup>りつゝ、殊<sup>こと</sup>に牙<sup>ま</sup>へ切<sup>き</sup>つたる音状<sup>おんじやう</sup>にて。

「何者<sup>なにもの</sup>でもない人間<sup>にんげん</sup>じや……其様<sup>そのさま</sup>申<sup>まを</sup>す其方<sup>そのち</sup>は、何者<sup>なにもの</sup>か、初夜<sup>しよやす</sup>過ぎ<sup>ひどほ</sup>に人通<sup>ひととほ</sup>り途絶<sup>とつた</sup>たる淀川<sup>よどがは</sup>堤<sup>づみ</sup>に於<sup>お</sup>て、若き女<sup>わかをんな</sup>に悲鳴<sup>ひめい</sup>を揚<sup>あ</sup>げせると云<sup>い</sup>ふは、心得<sup>こころえ</sup>ぬこと、如何<sup>いか</sup>なる仔細<sup>しさい</sup>あつて悲鳴<sup>ひめい</sup>を揚<sup>あ</sup>げさせしか、先<sup>ま</sup>づ其<sup>その</sup>仔細<sup>しさい</sup>聞<sup>き</sup>こふわい。

「あ……すりや、其方<sup>そのち</sup>は女<sup>をんな</sup>の揚<sup>あ</sup>げし悲鳴<sup>ひめい</sup>聞<sup>き</sup>きつけ、其<sup>その</sup>仔細<sup>しさい</sup>聞<sup>き</sup>かんとて、此<sup>こ</sup>れまで態<sup>わざ</sup>々<sup>くま</sup>參<sup>ま</sup>りしかと、言葉<sup>ことば</sup>に殺氣<sup>ころつき</sup>を帶<sup>お</sup>びて云<sup>い</sup>ひ放<sup>はな</sup>つ。

「素<sup>もと</sup>よりのこと、先<sup>さき</sup>刻<sup>まど</sup>より淀<sup>よど</sup>の川<sup>がは</sup>瀨<sup>せ</sup>に流<sup>なが</sup>る月<sup>つき</sup>を眺<sup>なが</sup>めながら、心<sup>こころ</sup>を樂<sup>たの</sup>しめぬたる折<sup>をり</sup>しも、俄<sup>には</sup>かに叢雲<sup>むらぐも</sup>出<sup>で</sup>て、朦朧<sup>おぼろ</sup>に變<sup>かは</sup>り行<sup>ゆ</sup>きたるにぞ、最<sup>も</sup>早<sup>は</sup>や眺<sup>なが</sup>めも薄<sup>うす</sup>と存<sup>ぞん</sup>じ、假<sup>かり</sup>の宿<sup>やどり</sup>へ歸<sup>かへ</sup>らんとしたる時<sup>とき</sup>に、耳<sup>みみ</sup>を劈<sup>つんざ</sup>く女<sup>をんな</sup>の悲鳴<sup>ひめい</sup>、奮<sup>たいご</sup>事<sup>ごと</sup>ならじ、何<sup>な</sup>には兎<sup>と</sup>もあれ實<sup>じつ</sup>否<sup>ひ</sup>を見届<sup>みと</sup>けて、助<sup>たす</sup>け得<sup>え</sup>させんと、斯<sup>かく</sup>は存<sup>ぞん</sup>じて進<sup>すす</sup>み寄<sup>よ</sup>りたるなりと、重成<sup>しげなり</sup>の言葉<sup>ことば</sup>は、愈<sup>い</sup>々<sup>よく</sup>訝<sup>あや</sup>えて殊更<sup>ことさら</sup>にやさしい。

「此<sup>こ</sup>れは又<sup>また</sup>た強<sup>きつ</sup>御心切<sup>ごしんせつ</sup>……イヤナニ餘計<sup>よけい</sup>なお世話<sup>せわ</sup>、アハ、……飛<sup>と</sup>んで火<sup>ひ</sup>に入<sup>い</sup>る夏<sup>なつ</sup>の虫<sup>むし</sup>の出<sup>で</sup>るには、未<sup>ま</sup>だ早<sup>はや</sup>き春<sup>はる</sup>の初<sup>はじ</sup>め、朦朧<sup>おぼろ</sup>夜<sup>よ</sup>にて確<sup>しか</sup>とは明<sup>わか</sup>れども、音状<sup>おんじやう</sup>の容<sup>よう</sup>子<sup>す</sup>に依<sup>よ</sup>れば、前<sup>まへ</sup>髪<sup>かみ</sup>取<sup>と</sup>つた許<sup>ばか</sup>りの若衆<sup>わかしゆう</sup>らしい、入<sup>い</sup>らざる詮議<sup>せんぎ</sup>だていたはて、此<sup>こ</sup>れからの花<sup>はな</sup>を、ムザムザと夜<sup>よる</sup>の嵐<sup>あらし</sup>に散<sup>ち</sup>さぬやうにひたされび、さても御心切<sup>ごしんせつ</sup>なる方<sup>かた</sup>かや、アハ、……と其<sup>その</sup>若衆<sup>わかしゆう</sup>は、嘲<sup>あざ</sup>けるやうに云<sup>い</sup>ふて、カラカラカラとささも憎<sup>にく</sup>々<sup>く</sup>しゆふ高笑<sup>たかわら</sup>ひする。

なれども重成<sup>しげなり</sup>は元來<sup>がんらい</sup>の勘忍<sup>かんにん</sup>強<sup>つよ</sup>き人<sup>ひと</sup>、毫<sup>ごう</sup>も腹<sup>はら</sup>立<sup>た</sup>ちたる容<sup>よう</sup>子<sup>す</sup>もなければ、焦<sup>せ</sup>ぎ込<sup>こ</sup>

みたる體もなく、又たその立ちたる處よりは、前へも進まず後へも戻らず、  
左へも寄りれば右へも動かず、大磐石のごとく突つ立ちたるまゝにて、ニ  
タニタと笑ひながら。

『夏の虫であらふが、春の蝶であらふが、其の様な詮議立ては聞くに及ばぬ、  
危ふきを知つて助けざるは、武士の情にあらず、其方悲鳴を上げさせたる次  
第物語ること好まぬとあれば、強て聞こふとはいたさぬ、其處に居らるる娘  
御、此れへ来て揚し悲鳴の、一部始終細さに語られひ、お身の不爲になるやう  
な、計は決していたさぬ、兩刀の手前誓つて良きやうに、取り計らふほどに  
サ、早ふ來やれと、重成のやさしき言葉に、其の若衆は慄へかれてか、猪古才  
なことを申す、青二才、咲きかけたる花をムザくと求めて散す氣か、生命知  
らずの白痴者、左ほどまでに女が揚げし悲鳴の、仔細を聞きたくば聞かし呉  
れむ、性根を据えて能く承はれツ……と、ブラリツと引き抜きたる白双の光

は、朦朧夜ながらも、業物とみへてピカリツと、雷光の如くきらめくのである  
左にも右にも双の光を暗に輝やかされば、納まらぬことゝは、初より承  
知してたのだ、重成少しも騒がず、腰に挿してゐた鐵扇を右手に持ちて、寄  
らば一ト拂ひと、傍の松の古木を楯に取つて身構たり。  
『愈々以て猪古才な奴……左ほどまでに、惜からぬ生命なれば、呼吸の音と  
めて川の雑魚の餌といたし呉れむと、云ひしもあへず、上段に構へ、重成めが  
けつ、眞二つに爲れよと、云はん許の風情にて、勢ぬ鋭どく、躍り込んで  
來たるぞ、さても怖ろし。

アはや、五尺に餘る重成の身、眞二つに爲つたかと思ひきや、エイツ……  
と云ふ掛聲が聞えた、すると、其の若衆は、手にしてゐた一刀を其處へ投げ出し  
て、其の身體は二間ほど先の、草叢の上へドツカと倒れたは、是れ重成が切り  
込でん來た利き腕を鐵扇にて叩き、其れと同時に、右の足を上げて相手の腰を

拂ひたるより、斯は二間ほど飛ばされて倒れたのであつた。  
 アハ、ハ、ハ、ハ……口ほどにない弱ひ若衆と、重成が笑ひつゝ、倒れたる其の有様を眺めてゐた、時しも幾時しか黒雲は月の前を走り通つて、月は又た妙なる光を下界にあびせかけたから、四方は夜の明けたかのやうに、際立つて明るくなつて来た、重成は笑ひながらに、其の倒れたる若衆の傍へ進み寄つて、思はず其の顔を眺めたが、重成如何しけむ、強う驚きたるが如き風情にて、ヤ、ツ……其方は……と聲を張り上げたが、此の若衆を重成は知つてゐたのであつたか知つてるとすれば、抑も誰れ……何者であるか……月はいよく冴えて、葉末に置れたる露がキラ／＼と光つてる。

○重成、鳩之助を懲す

ヤ、ツ……其方はと顔を瞰下して云はれたる言の葉に、打ち倒されて腰をした

たか古木の根にて撃ち、俄かに立ち上り得でありし其の若衆は、打ち驚き、月明に照して重成の顔を見上げながら、是れも亦たヤ、ツ……お身は綱千代どのにてはなはさぬかと、其の意外に仰天なしつゝ、痛を懐へ古木に縋つてユラユラと立ち上つた。

『如何にも拙者は堅田の畔り、六角どの、許にあつた、木村綱千代、今け秀頼公のお眼力に叶ひ、召し出されて元服なし、名を重成と改ためし、長門守で御座るわい、お身は叡山の山坊に、御稚兒として勤めありし、鳩之助どのでは御座らぬか、さてさて異なる處にて、久し振にて對面いたして御座るなど、重成は呆れる、鳩之助も亦た呆れ返へるのであつた。

此の鳩之助と云ふは、當時淀君の氣に入つて、秀頼どの、内後見とも云ふべき位置に立つて、大阪城内にて多少羽振を利かせてゐる、長曾我部盛親の家内に、山瀬と云ふものがある、其の山瀬の姉の腹に出来た子であるのだ、左れ

ば山瀬に對しては眞實の場である。

ところが、此の鳩之助幼少の頃より、叡山の山坊に人と爲り、文武の兩道を研きつゝ、今年十八の盛の春を迎へ、最も立派な男と爲つたのであつたが其の心根が甚だ宜しからぬより、山坊にて罪を犯して人を惱せ、其れが爲に山坊におゐることが出来なくなつて、今では浪人をしてゐた、山瀬は其れを哀れんで、影ながら相當の扶助を爲し、而して好き機を見て、秀頼どのに召し抱えて貰はふと、其れとなく淀君にまで願ひ出たのであつた。人を抱へる、抱へぬは、淀君の獨斷にはゆかぬ、又た秀頼どの、獨斷にてもゆかぬ、兎も角も城中にて、重役會議を開ひて、其の上でなければ、召し抱へると云ふ譯にはゆかぬ、なれども淀君に取り入つて置けば、十中の九までは成就する、其れで山瀬は鳩之助のことを、淀君に懇々と頼んだのである。重成は堅田の里に居る頃、幾度か鳩之助に會ふて、物語りなどしたことがある

其れ故に互ひに顔は能ふ知り合ふてゐるのであつた。

「鳩之助どの、お身如何いたして今時分、斯様な處へ參られて、うら若き娘御を捕へ、悲鳴を揚げさするやうな、不埒至極の舉動をいたさるるか、重成果て御座りまするぞと、云つてゐるところへ、バタバタバタと小走りに走つて來て、長門様能ふお越しあそばされて下さりました、お庇様にて危ふいところを助かり、有がとふ存じますると云ひつゝ、重成の小袖の袖を確と握つたは、今の鳩之助に捕えられてゐた小娘である。長門様と、馴々しゆふ呼ばれて、重成二度吃驚……お身はと云ひつゝ、瞰下す顔と見上げる顔、互ひに顔と顔とを見合せて。

「ヤーア……お身は尾花どのでは御座りませぬか、マア何うあそばしてと、重成は續けさまの意外に呆然たり。尾花と呼ばれし其の娘御は、嬉し涙に咽せ返りつゝ、聲震はせて、長門様

召使の渡井が、彼處に殺されて居ります。……此の憎い方に、ど  
 ……何うぞ早う敵を撃つて下さりませと云ふ。  
 打ち續く意外に、愈々呆れ果たる木村長門守は、お身のお召使の、渡  
 井どのが、鳩どのに殺されたと云やるか、ウム……と、重成は顔色を變た、鳩  
 之助は今の重成の手の中に、懲々してゐたから、遅々してゐて捕えられたら  
 大事と斯は思ひてか、其のまゝ、腰の痛を打ち忘れ、重成の隙を見て、京都の  
 方へ一目散に逃げ出した。  
 己れッ……鳩之助と、其の後を追はんとせしが、長門守何う思案なしたか、  
 何にやら打ち黙ひて、優しい尾花の顔を、月に照してニツと眺め、  
 「お身の御容子、又た拙者が今宵此處へ参り居りし仔細を聞きしお聞がま  
 しいたしとふは御座れど、其は後のこととして、氣ならぬは渡井どのが殺さ  
 れて居らるるとは、氣ならぬこと、何處に御座るか、御案内下されいと云へ

ば、尾花は打ち點ま。  
 「左様なれば何うぞ、お越しあそばされ下されませと、尾花は重成と知つて  
 勇み出し、其れより一丁ほど北へ寄りたる堤の片側に、倒れてゐる渡井と  
 云ふ其の召使の傍へ案内して來た。  
 重成、月の明に照して見れば、如何にも尾花の召使の渡井とて三十路に  
 餘る優しの女中である、重成は今更のごとくに驚きて、ズカズカと傍へ寄り  
 添ふて視れば、血に染りたる痕もなく、又た見たくも、血漿は眼に入らぬので  
 不審を抱ひたが、併し全く死んでゐるのには相違ない、ビリビリ動きもせず  
 に横さまに倒れてゐる。  
 何處も斬られた處はないやうで御座ると、渡井の容子と尾花の顔とを見  
 比べつゝ、合點ゆかざる體にて尾花に訊れる。  
 「左様で御座ります、斬られはいたしませなんだが、助を確か蹴り揚げら

れ、其れから手を取つて投げ付けられたやうに、覺えて居りまする。

「オ、左様で御座つたか、其れでは當て身を食されたとみえまするな、當身なれば、助からぬことも御座りまする、兎も角もと云ひながら、渡井の胸を開いて、左の乳の下へ手を當て、暫らく眠と容子を窺ふてゐたが、オ……尾花どのと、重成は太く嬉しそふな風情にて。」

「未だ乳の下に、ホンノリと暖りが御座りまする、左れば手當次第に依つて蘇生されんにも限ぎらむ、待たれよと云ひつゝ、重成はそのまゝ、前なる淀の岸邊へ足早やに下り行きて、懷中なせし手拭に、ウムと水を浸して立ち歸り、其れを尾花に持たせ置きて、而して自分は後より、渡井を抱き起し、心得ある柔術の手、エイツ……と掛聲なしつゝ、腰の邊を膝にてグヒツと押した、すると、未だ全く呼吸の絶すやありけむ、ウム……と叫ぶがごとくに仰吟るので、ヤレ有がたや尾花どの、其の手拭と云ひつゝ、手拭を受取つて、含ま

れてあつた手拭の水を、尾花の口へ絞り込んだ、而して左右より渡井どの、渡井やと、聲を限りに呼び立てたる、主と重成の赤心が通じたりけむ、ウーム……と渡井は呼吸を吹き返した。

二人は顔を見合せて、互ひに太く打ち喜びつゝ、ヤレヤレ此れにて安心いたして御座る、お庇さまにて絶えなんとする玉の緒を、お繋ぎ賜はり、斯んな嬉しいことは御座りませぬと、尾花はイソッと打ち喜ぶ。

渡井は斯の如くにして、危ふき生命を助けられたなれど、呼吸を吹き返したと云ふのみにて、未だ身體はグタぐたで、物のあ色も定かには明らないのであつた。

「此れにて生命に別條は御座るまゝが、併し何方へ早う送つて、醫藥の手當を施すが、何により肝要で御座りまする、就ては此處から、拙者が今宵の宿と假に定めたる、山城屋とか申す宿屋までは、五六丁ほどより御座りませぬゆへ

先づ兎も角も山城屋まで、運んで取敢ず手當いたそふでは御座りませぬかな  
 と何處までも優しき重成の言葉に。  
 「何分どもに、宜しゆお願ひ申じ上げまする……なれど長門様、運はふと仰  
 せられましたも、此の邊に擬はなしと云ふを打ち消して。

「アハ、ハ、ハ……何にを仰せられまするか、擬はなくとも身許が脊負で参りま  
 するわい……ハテサテ……其の斟酌には及び申さぬと、其れより重成は甲斐  
 々々しくも、波井を脊負て山城屋へ歸り行かんと、其の仕度にかかりし時  
 も、行く手の方二三丁の向に當つて、提灯の燈火が、五つ六つ俄に見へ出  
 した而して其の提灯の火は、此方を指してグングンと進つて来る容子に、重成  
 は不審の眉を蹙めながら。」

「尾花どの何んで御座りませうなアノ提灯の火は……尾花は無言で唯と其の提  
 灯を眺めてゐる中に、早や一丁ほど向ふの所まで進んで来たリテ、重成は其

處へ突つ立ちたるまゝで、提灯の近寄つて来るのを待つてゐた。

間もなく一番先の提灯は、重成の立つてゐる四五間先のところへ近寄つて来て  
 早くも行手に當つて、若き男女二人が立つてゐるのを見て、不審を起しながら  
 二間ほど手前のところまで進み寄つて、グヒツと提灯を突き出だしつゝ、其處  
 に居るは何者じやと先づ聲を掛けた。

重成は其の提灯を持てる男の容子を見るに、武家奉公せる供廻りの人物らし  
 いので、靜かに打ち黙きながら、ズカズカと其の提灯の前へ進み出た、時に  
 殘の四つの提灯も、皆其處へ集まつた、其の中に三十二三に爲る立派な武家  
 が無提灯にて一人ゐた、此れは此の中の主人なんであらう。

重成は先づ軽く會釋をして、御一同は何方の何んと仰せらるる、御方かは存じ  
 ませれど、拙者は昨年の夏右府様召し抱へられましたる、木村長門守重  
 成に御座りますると云ふと、三十二三になる其の立派な武家は、ズカズカと其



れへ進み出て。

『然らばお身は、常陸介殿の御子息、木村長門守重成殿にて御座つたかと、最も丁寧な言葉に掛けた。』

『如何にも常陸の、わすれ記念、長門守重成に御座りまする。』

ツクツクと其の顔を眺めながら、如何にも而く云はるれば、常陸介どのに其のまゝ斯く申す某はお身未だ御存じも御座りますまいが、京都の所司代を承はつて居りまする、板倉伊賀守勝重に御座りまするぞ……

『なんと仰せらるる、すりや徳川殿のお覚え殊に芽出度、板倉伊賀守殿に御座りました、圖らぬところで圖らぬ初対面……以後はお見知り置きのほどを、幾重にも願ひ上とまする。』

『イヤ拙者こそ、此れより何にかとお近附を願はればならぬ身の上へ、何んとぞお見知り置き下さりませ、其れは左様と木村どの、此の夜陰に而も斯る淀川

堤に、何にをいたし居られたか、イヤ此れは餘計なお訊れなれど、見ぬ参りすれば、年若き女性をお伴れあそばす御容子……變りたる仔細なれば、兎も角も一寸とお訊れ申したので御座る、アハハハ……  
心にいまわしきことのあらば、勝重の此の訊れ、強う迷惑いたすべきであるが、重成は情けこそ加へたれ、憚かるにとの毫もなければ、静かに打ち黙ひてニツコと笑みつゝ。

『伊賀守殿の其の御不審、至極御尤もに御座りまするが、此れなる女性に、眞野豊後守頼包殿の御息女、尾花どのに御座りまする。』

『エ……なんと仰せられる、眞野豊後守どのの御息女と、板倉重勝は愈々訝かりて、重成の顔を呢と眺めながら。』

『豊後守頼包どのの御息女が、何故あつて今時分、場處もあらふに斯る處へ來られたので御座るか、アハハハ……此れも亦た余計な御詮議のやうでは

御座れど、餘りの訝かしきに、お訊ね申すので御座る、左ればお差支なくば此の場の仔細、先づ細さに物語られひ、何にも身許が、根堀り葉堀りお訊ね申すには及ばぬ儀で御座れども、此の場の有様、何うやら仔細あり氣のやうに見ぬ参らせませすればと、板倉重勝は何處までも、言葉やさしふ云ふて訊ねるのである。

「拙者も未だ、一訊伍終の容子は、尾花どのより承はり申さぬに依り、存じ申されども、斯々斯様な次第にてと、堅田よりの歸りに、山城屋へ泊り、淀の川瀬を流るる春の月を賞せんと、堤へ來たりし容子より、鳴之助の事、並に、渡井が常身を食らふて倒れぬたるを、漸との事にて呼吸吹き返さしたまでの仕細を、落なく物語りて、更に。

「デ、兎も角も醫師の手當を加ふるこそ、肝要ならめと斯様に存じ、取敢ず拙者が今宵の宿りまで、背負て伴れゆかんと、其の仕度をいたし居りましたると

ころへ、お身様がお越して御座りましたのでと云ふ、その概略の容子を知つて伊賀守叱驚仰天いたし。

「スリヤ鳴之助が、眞野殿の御息女を捕らへて、何れへか伴れゆかんとし、邪魔に爲るより渡井とか申す御息女の其の召使に、當て身を食したと云ふ次第に御座りまするか、其れば其れば、言語道斷なる鳴之助の不埒、シテ渡井とか申す其の召使は、何處に居りまするか。

「彼れなる松の古木の根方に、恁れ掛けさせて御座りまする……オ、左様で御座るか、板倉重勝は打ち點きて、庄左衛門と呼ぶと、後にあな一人の年嵩の家來が其れへ出て來る。

「其方兎も角も彼處へ参つて、出來るだけの手當いたし遣はせと、腰に吊してあな印籠を脱して、其の庄左衛門と云ふのに渡す。

「何には兎もあれ危ふいところを、お身の爲めに、先づ御息女の身に何んの御

迷惑もなかりしのみか、一日呼吸の音絶えたる召使まで、本心に立ち歸つたとは、此の上もなき幸福で御座つた、尾花どのとやら、嗚ぞお驚きで御座つたらふ、重成の後の方に跪んでゐた、尾花に言葉を掛ける。

尾花は恥かしさやる瀬なく、ハイお庇様にて、危ふいところを、長門様に助けて戴き、此の様な嬉いことは御座りませぬと、漸うに云ひ終つて、雪をも羞らふ玉の顔に、眞紅の色を漂よはせたが、月夜とは云へ夜陰のことなれば其のいちらゝさの風情は、勝重の眼にも重成の眼にも、映らなかつたのであつた。

伊賀守は、やさしゆふ合點なして、更に重成に向ひ、鳩之助は當時浪々の身上で御座る、其れに付きては、叡山にて犯せる罪の數々御座つたに依り、實は捕り押えて吟味いたさんかとは存じたので御座るが、其の罪を犯せしに就ては叡山方にも多少の曲事が御座ると、又た二つには大阪の内後見を承は

つて居らるる、長曾我部盛親どの、甥に當るとの事で御座るに依り、其れや是れやで其のまゝにいたし置いたので御座つたが、さても呆きれ果たる人物……ンテ今宵の鳩之助の曲事に付き、事の次第を拙者所司代と云ふ役向よりいたして、一應右府様（秀頼のこと）のお耳まで、お届けいたし置きとふ御座るが、鳩之助に相違御座らぬと云ふ證據が、何にか御座らぬかな……其りやお身と云ひ、尾花どの、さては呼吸吹き返したる渡井が、生きたる立派な證據で御座る、なれども他に尙ほ何にか證據が御座らば、此の上もなき儀と存じられ申すのでと云ふ。

『如何にも御尤もで御座りまする、長曾我部盛親どの、令室山瀬どの、淀君殿のお氣に入り、其の山瀬どの、實の甥に當る鳩之助のことで御座れば、生きたる證人の證據では、何んの彼のと餘計な事を云はれて、甥を庇はるるに相違御座りませぬ、此りや如何にも生きたる證據よりは、死したる證據が肝心で御

座りまするなど、重成打ち點ひて暫らく思案に暮れてゐたが。  
 『オ、……御座りまする……御座りますると、重成は叫んだ……ナニあると云はるるか、其れは重疊、シテ如何様な物が御座りましたかな。  
 『先刻鳩之助が無法にも、拙者を見掛て切り込んで参りましたを、鐵扇にて打ち拂ひ、利き腕取つて投げ出しましたる時に、其の太刀を其處へ取り落し、其のまゝ逃げ去つて御座りました、其れ故に其の太刀が、未だ其處に遺してある筈に御座りますると云ふ。  
 『オ、……其れは何によりの證據と、其のまゝ勝重は重成に尾いて行くと、果して、脱き身の太刀が遺してあつたので、重勝は其れを家來に渡し、大切に持ち歸れと云ふて、其のまゝ以前の處へ戻り。  
 『時に尾花どの、お身如何なる仔細あつて、鳩之助に斯様な處にて、手荒ひ目に遭され給ふたので御座るか、その仔細、我等に篤とお聞かせ下されひ。

問はれて尾花は振り袖の、袂も最と重た氣に、靜々と勝重の前へ進み出で、其處へ柔優に跪きたる其の風情、宛然雨に惱める夜櫻の如き觀を呈しゐたるぞ、優しも哀れなり。

『お正月の中旬より、京都におはす叔母上の御許へ、渡井を召し伴れて参り居りましたので御座りましたが、一昨日大阪の父の許より、戻り來たれとの飛脚で御座りました、其れで伏見より夜舟に乗らふと存じ、夕方に京都を立ち出でまして御座りましたのに、伏見へ参つて承はりまするには、淀川に水嵩増して御座れば、今宵は舟は出ぬとのこと、左様なれば明日にいたそふと其のまゝ京へ引き返しました時には、モウズツホリと日が暮れて居りました。  
 『ウム……成ほど、其れでは日の暮れてから、伏見より京へ引き返されたので御座つたか、シテと重勝は打ち點く。  
 『折から月は冴へ渡り、道は晝のやふに明るう御座りまするので、渡井と二